
彼方無双～ ときっ現代技術ばかりの三国志～

C I A 捜査官

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼方無双〜どきッ現代技術ばかりの三国志〜

【Nコード】

N8193M

【作者名】

CIA捜査官

【あらすじ】

ひぐらしのなく頃にの世界から帰ってきた彼方しかしすぐまた違う世界に飛ばされる。

前作の彼方のなく頃にタイムスリップ編は読まなくてもOKです。

又歪みねえという賛美の心
だらしねえという戒めの心

しょうがないという許容の心を持つてる方と駄文でもいいぜという方のみ是非読んでみてください。

感想、意見ばんばください!!お願いします!

主人公紹介?とひぐらしのなく頃にであったこと。(前書き)

兄「作者だらしないね。読者の皆さん許してやってね」

主人公紹介？とひぐらしのなく頃にであったこと。

「どうも作者です」

「どうも前原圭一です」

「この度は特になにもありませんが、紹介していきます」

「まずは何があるんだ？」

「山狗のことです。あっちの世界でクビになってしまったので、チームに吸収しました。なので現時点で、山狗は昭和ではなく平成にいることになります」

「そんなのありかよ」

「作者はご都合主義なんだ」

「そのくさった根性叩き直してやるよ」

「おっ彼方先生」

「先生はいらないけど」

「まだだ、まだだスネーク」

どん

「間違えて撃っちまったよ」

「はあはあ、次は一回目の主人公紹介です。ぐふ」

「大丈夫か、大丈夫か。くそつ、作者の死無駄にはしない」

「心配するような価値はその男には無い」

「ひでえ
W
W
W
」

渡辺寛もとい佐々木彼方

20歳だが若く見える。(多分)

髪は黒で短髪。

基本軍服。

目が細いので喧嘩をよくうられる。
(ちゃんと買う。)

銃改造大好き。スネークによく手加減しろと言われている。

戦闘能力化け物ガンダムが千いても余裕で倒せる

自然回復能力

輕傷（銃創、矢傷、切り傷、風邪、打ち身など。）だと治りが、0・

[illegible]

1秒くらい。

重傷（骨折、アキレスがいくなど。）だと治りが0.000000

0
0
0
0
0
0
0
0
0
0
0
0
1秒くらい。

これらは全て、戦場で怪我を繰り返した結果らしい。技は多すぎて、紹介できない。殺さない拳法や剣法を使える。逆に返り血を浴びないように殺したりする技もある。

逃走能力は戦闘能力の遥か上をいく。彼方の脳内には、スーパーコンピュータがあり、必ず逃走できる方法をたたき出す。（自分の

都合の悪いときにかつてに発動する。ある意味予知)

元の世界では社長、年収、10京円という超金持ちだが家は一戸建て。各国のお偉いさんとは仲のいい友人というよりもはや親友。

工藤 澪

髪は黒で長く結っている。

服は基本黒のゴスロリ服である。

18歳だが、見た目からして大人の女性に見える良い意味で。

彼方をからかうことが好きらしい。彼方本人は困っている。表情には出さないが。

戦闘能力は彼方の十分の一くらい。

彼方自体戦闘能力はてななので比べようもないが。料理はめっちゃうまい、正直言って、三ツ星じゃすでに評価できないレベル。

変な薬を作ったりするらしい農薬なども開発しているようだが。

スネーク

ご存知のとおり、メタルギアを破壊して、世界を救っている英雄。

澪の食事が大好き。

新型のレーションを作ったりしている。

兵士達から尊敬されている。

仕事忙しいが、最近は彼方がメタルギアを叩き潰したりするので暇でよく彼方の家にいる。

ここだけの話ギャラばねらしい。

鳳1こと小此木隊長

チームでの中隊長だが兵士からの人気と信頼が高い。

軍隊の階級は中佐。

彼方に能力を認められたので、階級は高い。しかし彼方自体階級は

あまり気にしないので チーム内では階級は余り関係ない（自分より階級が上でもタメ口OKのため）

チーム

本作品ですでに登場した チーム。

構成人数400000人の世界最強の軍隊、デルタフォースだろうが足元にも及ばない。デルタフォースが100だとしたら、チームは100000くらいである。

身体能力、戦闘能力は異常であり一騎当千なんて楽にできる。

はいろいろ分けられており、小隊100人構成。中隊1000人構成。大隊10000人構成。連隊は100000人になる。

その中に装甲師団や輸送隊、諜報部隊がはいる。（山狗は チームの中で中隊で諜報部隊に入っている。）

募集資格。生きる覚悟があるもの。三食（お代わりし放題。）保険つき。

なぜか身体能力や性別のことは書いていない。

主人公紹介?とひぐらしのなく頃にであったこと。(後書き)

感想どんどんお願いします。

第二の世界恋姫無双〜第一話〜何処の世界でもドン パチする彼方 (前書き)

「あぁん作者だらしねえな!!」

「ちょ、何をするつも「アツーーーーー」」

作者は性 裁されました。

第二の世界恋姫無双〜第一話〜何処の世界でもドン パチする彼方

やあ俺は佐々木彼方軍隊を辞めて今は自宅警備員をやってるんだ。
ああ？誰がニートだって？

まあいい、実は違う世界に行ってただけど戻ってきたので家でジューズを飲んでいた。

そんなとき、携帯がやかましく騒ぎ始めた。

この状況でかかってくるとか空気読めよこのKY携帯が。

「はい、佐々木ですけど」

だるいまじでだるい。

「大将今どこにいるんですか？」

漣からの電話でした。

また面倒ごとなんですわわかります。

「J A P A N」

ちよつとふざけてみる。

「今度言ったら拷問フルコースですよ。それはいいんですが今大統領領からお話がありまして、とにかく速くアメリカに来て下さい」

ま・た・か。

しかも今しれつとすごい発言しちゃったよね？漣怖いでしょう・・・？

「俺、引退したんだけど」

へへ、正論を言ってやったぜ！

「大統領がどうしても」

「ジミーの頼みなら仕方がない。わかったよ30分で行く」

食事とトイレはゆっくりしたいしね。

（梨花 side）

「本当に行ってしまったのね」

まるであのことが昨日のようだね。

彼・・・いい彼方は立派だったわ。

最初から諦めるなんて選択肢がないんですもの。

あの事件はもう数週間も前のことだったわね。

懐かしいわ。

古手梨花、いや彼女の仲間もまた悲しんでいたのだ。

「梨花・・・落ち込まないでください。またきつと会えるのです」

「羽生に言われなくてもわかってるわ・・・ありがとう彼方」

今度は私たちの奇跡の力で彼方を呼んでやるんだから！！

「梨花そろそろ学校に行きますわよ」

「わかったのです」

きつとまた会えるんじゃないかって会っわ。

絶対絶対必ず！！

彼女の意志はつい一ヶ月前とはまったく違っていた。

彼女も又熱い心を持ったのだ。

そして彼女達はこう考えた“ずっと下を向いて泣いてたら彼方も喜ばないだろうと”全くこれほどの意志はそうあるまい。

（彼方 side）

俺達は武装勢力を倒して、テントで明日の作戦会議をしていた。

「じゃあこれでいいか？」

思ったより時間がかかってるな。

武装勢力のやつらもバカじゃないってことか。

「はい、流石ですね。でも、なんで引退するんですか？」

「疲れたから・・・かな？とりあえず今週中に殲滅するぞ」

「そう・・・ですか」

漣は察したように言うのとテントを出て行った。

俺は殺すということに疲れた。

今まで人を殺してきてよく発狂しなかったと思う。

「じゃあ俺も寝ますか」

漣におやすみといって自分のテントに戻る。

内乱、紛争、昔も平和では無いけど少なくとも国の中でドンパチはそこまで多くなかっただろうなんてことを考えながらゆっくり目を閉じた。

・・・

「はっ」

見渡す限り荒野だった。

このパターンもしや！

また異世界フラグですか。

『あんなところに人が』

第一村人？発見だ。

俺はそいつらに近づいて話しかける。

「あのーすみませんここは何処でしょうか？」

そのいかにも昔の賊ですよ的な痛い奴に話しかける。

「おおちようどいいところにおい、あんだ金目の物全部おいていきな」

はあ？何いってんのこの人？

「いつぺん死んだ方がいいと思うぞ」

言ってやったぜ。

その賊っぽい3人組をどや顔で見る。

「なら死ね」

3人組の中の一番小さいのが刀・・・いや剣を抜く。

「服は傷つけるなよ」

あらら命より服の心配ですか。

少々しだけお仕置きが必要な。

「わかったんだなふん」

太った奴が剣を振りかぶる。

それをひょいと避ける。

「おっと、もうこれで正当防衛だな」

でかいのと小さいのに一発ずつ喰らわせる。

「ぐふっ！」「」

「覚えてやがれ！」

「いまどきそんな台詞チンピラでも言わないよ」

あ、あいつらはチンピラか。

でも逃すのもあれなんで落ちてる剣を拾って兄貴っぽい男に投げつけてやった。

「ぐわあ、足が!!」

「因果応報、さ」

まあその連中は放っておくことにした。

少しばかりの金と剣を2本（投げてない方）拝借させてもらったがあれ？やってることさっきの連中と変わりなくない？いや気にしたら負けだな。

そして1時間変わらない風景の場所をさ迷いながらやっと小さい村についた。

さっきの連中に道を聞けばよかった。

村に入ると村長っぽい人に話かけられる。

「これは旅のお方。今、村は黄巾の連中に襲われています早く村を去ったほうがいいですよ」

「では、そうします」

面倒は御免だからな。

さっき拾った剣があれば襲われても大丈夫だろう。いざってときはバレないように銃を使うだけだし。黄巾って三國志のかな？

んなことを考えていると遠くで砂ボコリがたっているのが見えた

「ん？なんだあれは、黄巾と操の旗か、よしスナイパーライフルで」

勿論サプレッサーつきだ。

銃弾を放つ。その瞬間黄巾党の頭の頭が吹っ飛ぶ。

「恨まないでくれよ」

「なんだ！？頭が頭がやられた皆逃げろ！！」

「華琳様賊どもが混乱しています」

「なぜかしら？」

「報告します！敵総大将死亡」

「なにがあつたの」

「斥候によりますと何かで射殺されたとの報告です」

「なにか、ね」

「やはりあの占いは本当だったのでしょうか？」

「もうすぐわかるはきつとね」

華琳はそう言つて笑みを浮かべた。

心ではその者を自分の物にしたいと考えて。

「！？なんたる寒気が・・・」

疲れてるのかなあ？

「街」

やっと街についたか。

あの場所からまたまた数時間歩いてやっとたどりついた。

この街は結構大きい。

しかし街に入ってから妙に視線を感じるなあ。

「変な格好ね」

「警邏に連絡したほうがいいんじゃないか？」

ワオ！町民に相当警戒されてるなあしょうがないね。

この服だしなあ。

「きゃあ〜」

「ヘッヘッヘッそんなに怖がんなよ。別に痛いことするわけじゃあねえんだ」

この世界の賊出現率歪みねえな。

「おい、兄ちゃん勘弁してやれや」っといって肩を握っている手に力を入れる。

「ぐわああ」

やば折っちまった。

「すまんのう力加減まちごうてもうたわ」

満面の笑みをうかべていう。

この時の俺の顔は大層悪い奴だったんだろうな。

「おっおぼえてやがれ」

それしか捨て台詞のレパートリーないのな。

「助けてくれてありがとうございます。あの、お名前は？」

「名乗るほどのものではない」

思っただけで格好つける必要なかったよな？

「黄巾党が攻めてきたぞ！」

「またか、仕方ない行くか」

黄巾どんだけだよ本当に。

く城壁の上く

「ここでいいか」

スナイパーライフルを構える

「あれか、よし」

一発の銃弾が頭にあたる。

「ぐはっ!!」

無駄な殺しはしなかったのにな。
所詮人殺しは人殺しか。

「頭！頭！。頭がやられた逃げろ」

「夏侯淵様敵が引いていきます」

「伝令！敵総大将死亡!!」

「詳しく教えてくれ」

「はっ。敵総大将は何者かによって射殺しました」

こんなにも両軍が入り乱れているのに狙撃とはできるものなのか？

「おおやばいなさっさとずらかりますか」

その場を立ち去ろうとするが呼び止められる。

「おい兄ちゃん金目のもんおいてけや」

こいつらのせいだ。

「断る！！」

剣で賊の体を真つ二つにする。

「はあ全くこういう奴らばかりなのか」

ん？あれはどこの軍だ？

「何処かの軍みたいだが旗印は・・・公と十だ。な十はどこの軍だ。ちかずいて探ってみるか」

「君が公孫賛かい」

「お前が天の遣いって奴か」

「俺の顔に何かついてる？」

「すまんすまん。人の顔をじつと見ちまって」

「そちらの女性は？」

「こいつは趙雲だ。客将としてうちにて貰っている」

「今後よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

「きたようですな」

「伝令、黄巾党が動いています」

「朱里今すぐ戦闘準備に入ってくれ」

「わかりました皆さん戦闘準備に入ってください」

今から戦か、でもあの服ってポリエステルだよな。

てことはあいつもタイムスリップしてきたってことか。

しかし話しかけないしな、発信機と盗聴器でも仕掛けようかな。

ピュンピーー

「なんか今、音しなかった？」

「気のせいではないですか？」

こうして戦いのひ蓋は切って落とされた。

「さて手伝ってやるかな」

「皆合図があるまで頑張ってくれ！」

スナイパーライフルで援護してやる。確実に一人ずつ仕留めていく。

急に敵が倒れたためか本郷軍に動揺が走る。

「なんだ敵が急に倒れたぞ」

「まさか最近噂になっている、地獄の暗殺者！」

最近って今日来たばかりなんだが。

「手を貸してくれるということか」

「いやまさか、気分によって変わるらしいぞ」

「今日は気分が良いということか？」

「たぶん、だから大丈夫だと思う」

酷い言われようだ。泣いてもいいのかな？

ジャーンジャーン

銅鑼の音が響き渡る撤退の合図だ。

「皆の者撤退するぞ！」

「応!!」

敵は調子に乗りまんまと策に引っ掛かる。

「数だけはいいな。仕方ない機関銃でも使つか」

射程距離まで近ずきフルオートにも関わらず、頭を吹っ飛ばしていき。

今思った弾足りなくなるんじゃないかと。

まあいいか。

「ひい助けてくれ。ぐわ！」

「敵が混乱しています。今です、全軍反撃に移ってください」

「ひい本郷軍が戻って来た逃げろ！撤退だ、地獄の暗殺者も現れたぞ逃げろ」

おいおい俺の評価どういうことになってるんだ。

「俺もそろそろ逃げるか」

「伝令、黄巾党に増援が到着その数20000」

弾がないからロケットランチャーで我慢してくれ。
手早く準備して総大将のところにぶっ放す。

「20000そんなに。どうする孔明殿」

「困りましたね」

「伝令、敵総大将死亡！！」

「え、どういうこと？」

「たぶん最近噂になっている、地獄の暗殺者でしょう」

「地獄の暗殺者？それってなに」

「はい、最近、巷で噂になっっているのはありえない距離から黄巾兵の頭を撃ち抜くということで地獄から来た暗殺者と呼ばれているみたいです」

「ウーン、もしかしてあれかな？」

「心あたりがあるのですか？ご主人様」

「俺の世界、つまり天の世界に銃っていう、武器があつてね。矢よりも速く遠くまで届く武器なんだ。まてよてことは俺と同じ世界から来た人がいるってことだ」

なるほど一刀とやらも俺と似た境遇なのか。

「つまりその人に話を聞いたら何か情報を掴めるかもしれないということですね」

「ああ、そういうこと」

「しかし、今、ご主人様が言った、地獄の暗殺者はいろんな国が血眼になって捜してますよ」

俺も有名人（指名手配犯的な意味で）になったもんだな。

「じゃあどうやったらここに連れて来れるんだ？」

「こちらも、捜すしかないでしょうね」

しかし三国志の登場人物が女性というのは変だな。
本郷一刀のせいかな。いや、もしかしたら俺のせいかもしれない。た

だここが正史ではなくパラレルワールド、ということは解った。

「この話は城に帰ってからにしよう」

「はい、それにその者を見つければ、名声とかなりの戦力が期待できますから、何処の国も捜しているということです」

さりげなく俺を利用しようという発言が聞こえたがきのせいだよな。うんきつとそうに違いない。

「よし俺たちの居場所に戻ろうか」

「はい」

「疲れたのだー」

「鈴々、油断するな、いつ敵が襲って来るか分からんだぞ」

「愛紗に言われなくても分かってるのだ」

「いい仕事したな、そろそろ離れるかな見つかるとまずいし」

それにしてもこういうことをしていると昔の血が殺し屋としての血が騒ぐ。

「夜」

「今日は野宿か」

なんかこういうのも悪くないと思ってしまふ。

がさっ

草が動く。

「誰だ！」

「まさか彼方か？」

まさかの知り合いか。
心臓に悪いぜ。

「やあスネーク、元気だったか」

「あんまり元気とは言えないな」

そりゃそうだろうな。

「スネークもタイムスリップだよな」

しかも2回目。

「ああそうだ」

「ああ、そういえばこの前のメタルギアはどうなった。一応日米連合軍は動かしたんだが」

あの変な機械を作ってる連中は頭がいかれてんのか？こう考えるのは失礼かな？

「助かった。かなり精練されたいい兵士だった。装備も最新式だったしな」

ジミーのが大統領やってる国だもの弱いわけが無い。

「スネークは武器持ってるか？」

「MK2ピストルとオペレーターなら持ってるが」

軽装備だな。

「なら、ジャベリンとVSS狙撃銃を貸そう。あ、そうそうスネークはこれからどこに行くつもりだ？」

「とりあえずこの国の首都に行こうと思ってる」

首都は落陽であってるよな？

「じゃあ目的地は同じだな。ここからだと言はかかるな」

実は適当に言ってるんだが。

「お前、こつちの世界でもやらかしてるみたいだな。地獄の暗殺者ってかなり噂になってるぞ」

「有名人になっちゃったみたいだね」

「ところでこれを見てもろ」

「いい銃だ」

（相変わらず良い腕だ）

「マガジン容量を増やした。7発から15発に増えた。そしてデザ
ーティーグルの欠点の衝撃は二分の一に抑えることができた」

意外と苦勞したが。

「凄いな、かなり扱いやすくなってるだろう」

「勿論軍でも使いやすいとわかったら使うつもりだ。後、カスタマ
イズできるようにレールをつけてをいた。レーザポイントを装備で
きる。試し撃ちをしてくれ」

パスパス

「消音か。かなり使い易い、リコイルが少ないおかげで肘も痛くな
らないし、スコープも付いててスナイパーライフルと変わりないく
らい強いな」

やっぱり消音機能はないとな

「そいつは試作品だからスネークにやるよ」

「ありがたい」

「スネーク、聞いてくれ、もしかしたらこのさき賊に襲われるかも
しれない。だが、極力銃の使用は避けてくれ」

俺が言えた立場じゃないんだけどさ。

「使えばすぐに噂になり、いろんな国の軍が捜しに来るからだろう」

「流石はスネーク、察してくれて助かるよ」

それでも察してくれるスネークは流石。

「だから刀をやる。使えるよな」

実は剣だがツツコミが帰ってこなかったのでスルーすることにする。

「大丈夫だと思うが。以外と軽いな」

「そっちの方が使いやすいだろ」

というか力の問題じゃあ・・・俺なんにもいじってないし。

「お心づかい感謝する」

「今日はもう寝よう。明日は早く起きて一刻も速く洛陽につきたい」

今日は色々ありすぎて疲れたというか徒歩移動が地味に一番効いたかも。

しかし二人は知らなかった。洛陽は既に白装束しかないことを。

第二の世界恋姫無双〜第一話〜何処の世界でもドン パチする彼方 (後書き)

文才がほしいなあ。

く第二話く洛陽への平和な道のり。(前書き)

直しました。

く第二話く洛陽への平和な道のり。

「スネーク、朝だ起きろ」

中々起きないスネークをこれでもかと揺する。

「ん、ああ、今起きる」

スネークがこうなのは今に始まったことじゃない。
へたをすると殴っても起きないときがある。

「朝食はカロリーメイトしかないからこれで我慢してくれ」

実は1週間前の奴だが言わないでおこう。

「ロシアのレーションじゃなきゃなんでもいいさ」

喉が詰まるんじゃないかってくらいがつがつ食べる。

カロリーメイトは食べて見るとわかるけどかなりパサパサしてるんだよね。

少なくとも水を持って無いときにこいつは食べたくない。

このあたりがスネークの良いところ？多分。

てか、良いところにしてあげよう。

「随分大袈裟だね」

「軍のレーションは最凶だからな」

最凶どころの話では無いんだけどね。

まあ不味いつてこと。

「家の軍はレーションかなり不評だから、いつもカロリーメイトだぞ」

確かにレーションは不評だけど戦場食としては間違いなく人気だぞ。スネークは味と量があればいいらしいが。

「そうだったのか知らなかったぞ。そういえば食糧はどのくらいあるんだ？」

「もうないよ」

「ああそうか。ってどういうことだ！」

「そのまんまの意味だけど」

そのまんまだねうん。

「じゃこの後の食事はどうするんだ！」

「街で摂ればいいだろう」

その後も30分くらいスネークが騒いでいたがらちがあかないのでさっさと行くことにした。

どんだけ食にこだわるつもりなんだろう。

まともな人がいないよほんと（；；；）

（道中）

「ところで洛陽にはいつつくんだ？」

「昨日三日はかかるていったんだけど」

「すまん、聞いてなかった」

実は言っ てなかったwww

「まさか、ボケたんじゃないよね」

「まだボケてない。それよりこの大陸は戦争が多いのか？」

あ、ごまかした。

「今よりは多いんじゃないか。国は実質機能してないし」

違ったらごめん中国大陆の人たち。

「だったら国民はどうなる」

「今は戦争より内紛やクーデターの方が多いのさ」

話を反らすための話題なのに結構真面目になってない？

「何処の時代も変わらずか」

「そういつこと」

「なら治安も悪いのか？」

「国ごとに違ふよ」

今みたいに中国っていう1つの国じゃないからね。

「それはどういう意味だ？」

「要は戦国時代ってこと」

これならスネークも納得するだろう。

・・・納得しなかったらどうしよう。

「だから国が多いし、支配者も違ふのか」

あ、納得した。

「そういうことになるね。スネークはここが外史って知ってたか？」

「まあだいたい。二回目だからな」

慣れって怖いよな。

あれが外史かは知らないけど。

「そういうことだ。で、さっきの話の続きだがクーデターや内紛があるといったろ。だからここら辺は賊が出やすいということさ」

「物騒だな」

いや元の世界みたいに銃でドンパチしてる奴よりはマシだから。

「仕方ないさ、地方は国の政治が届きにくいんだよ。国が腐ってる

んだ。そついう輩も増えて来る」

これは今から何百年続く問題だからな。

悪いのつて山賊になるしかない人たちなのか、墮落した国なのかどつちなんだろうね。

「つまりその政府が崩壊すれば、また戦争ということか」

「そつゆつこと」

多分な。

中国の政治体制なんてしらんし、唯一分かつてるのは共産主義つてことくらいか？

しかもそれつて現在の話だし。

そんなとき草むらから噂の山賊が出てくる。

「兄ちゃん達金目の物置いてけや」

山賊の台詞はそれしかないのか？

「噂をすればなんとやら、だな」

スネークが刀（剣）を抜き三人の首を飛ばす。

「ひゅー　　流石！」

「命を粗末にするな。死にたいやつから前に出る」

まあ確かに普段刀を使つてないスネークといつても、まず素人は勝

てないだろうな。

「死ねやあ！」

スネークが刀を素早く三回振る。

流石というか何というか。

雷電の刀捌きをみて覚えたとか？ありそうだな。
というか峰打ちする気はさらさら無いのな。

「ひい、逃げる。殺されちまう」

さつきスネークが殺すって堂々と宣言してたぞ。

「流石スネーク強いねえ」

「コンバットナイフしか使ったことがないがこれは使いやすい」

「賊はやっぱり多いだろう？」

スネークに聞く。

「まさか本当に会おうとは思ってなかった」

スネークってあれだよな、絶対詐欺とかに引っかかるタイプだよな。

「弱いから会ったら刀の練習と思えばいい」

我ながら酷いこと言ってるよな。

もしこれが俺達の過去の世界なら好き勝手しないがここは俺達の過去の世界じゃない。

だから“少し”派手にドンパチするのさ。

「確かにこの先なにがあるかわからんだからな」

心配だよスネークが食い逃げで捕まらないか。

「スネーク、街が見えてきたぞ。何にしても服を買わないとまずいな」

スネークのスニークングスーツは変に目立つから兵士に見つかった瞬間アラートだよ。

「解った。にしてもあの街の活気がすごいな」

そりゃ街に活気がないと困るしな。

いや、この時代ならは結構多いのか？

「何でも天の御つかいが治めてる街らしい」

「天の御つかい？なんだそれは」

スネークにしては珍しいな。

てつきり情報を手に入れてると思ってたよ。

「要は俺達と同じ異世界人ってことだ」

「なるほど」

「その件についてだけど、盗聴器と発信機を天の御つかいに仕掛けておいた」

「随分手際がいいじゃないか。ところでその天の御つかいの名前は？当然知ってるんだろ？」

まあ、職業がらそういうのは調べちまうしな。
もう引退したけど・・・。

「勿論、本郷一刀だ」

胸を張って言う。

「本郷一刀、か。お、やっとな街の入口についたか」

「やっとな着いたか。じゃあさっさと行こう」

やっぱり街の人に紛れるとわかるけどスニーカーキングスーツは最高に目立ってる。

「昼食がやっとな食べれるぞ」

飯しか頭になんかい。

とりあえず服屋に行ってさっさと着替えをして食事をとることにした。

「似合っていないな」

「似合っていないのか？」

逆にスニーカーキングスーツの方がよかったかもしれない。

変に目立ってる。というか違和感が・・・ね。
30分歩いてやっとついた。

「店についたぞ。金はあるけどあんまり食べないでくれよ」

店に入り椅子にかける。

「いらっしやいませ」

「肉まんと小籠包3個ずつ」

「かしこまりました」

数十分で料理が来た。

「お待ちどうさま」

ガツガツ

スネークがつつきすぎ。

見てるこっちが恥ずかしい。

「美味しい。この前よりも美味しい」

「確かに、かなり美味いけどスネークはもう少しゆっくり食べてよ」

その後もがつつきながらスネークは食べてたわけだが店の人の目
がかなり痛かった。

人前でもうスネークと食事するのやめよう・・・。

「そろそろ、宿を取りに行かないと」

「そうだな」

「おばちゃん美味かったよ」

「まっただ」

なんでそんな誇らしげなの？

本当に伝説の英雄が怪しいよな。

伝説の英雄なんだけどさ。

「嬉しいこといつてくれるじゃないの。またきておくれよ」

おばちゃんの声がやたらと男らしかったがそこは触れないでよくとゆうか触れたくない。

その後宿をとりについたのはいいんだが文字が書けなくて戸惑った、がスネークが何とかしてくれたので助かった。

潜入以外でも役に立つこともあるんだなあと切実に思ったよ。

「まだ夜まで時間があるしそこら辺を探索でもするか」

「わかった」

俺たちは別々に外に出た。

＼スネーク side＼

「アメリカとは違った町並みだな」

メイリンが住んでるのがこういう場所なのか。
まさに中国4000年の歴史だな。

どん

普段ならぶつから避けるが、少しボーとしていたみたいだ。
いかにもな連中にぶつかるとは・・・俺もまだまだだな。

「ああ肩が折れた」

「兄貴に何してくれとんじゃあ」

日本にいなやつらだ。

ここは中国だが。

「今ので骨が折れたら、カルシウム不足も良いところだ。何なら俺
が本当に折ってやろうか？」

兄貴と呼ばれてたやつの肩を掴んで力を入れる。
いかにも骨が折れた音がする。

「アアアアア」

「兄貴、兄貴大丈夫ですか？」

「お前らもこうなりたくなかったらさっさと失せろ」

殺気をこめて言う。

「ひい、化け物だ」

心外だな彼方じゃあるまいし。

「凄いなあんた、本当に肩を折っちまうなんて」

近くにいた奴に話しかけられる。

「なに、たいしたことない」

さて、これからどうするか。あまり騒ぐとまずいんだよな。さっさとここから去るか。

人混みに紛れる。

「さっきの人は？」

「さあ？」

「さっきここで喧嘩があったというのは本当か！」

「チンピラが旅人に突っ掛かったのですよそれで旅人が肩を折って退散させたのです」

「それでその者は何処に？」

「さきほどまでいましたが、何処かに行ってしまったようです」

「どうでしょうか、ご主人様」

「別にほつといても問題ないと思うけど。悪いのはチンピラだし、街の人達に怪我があったわけじゃないしね」

でもなんか気になるな。

別に逃げる必要はないと思うんだけど。

「ご主人様がそうおっしゃるのでしたら」

「一刀様、そういえばその旅人変でした」

町人が言う。

「変？」

「はい瞳の色が青でした」

「外国人かな？でもこの時代に？」

うーんと考え込む一刀であった。

side out

俺は街をぶらぶらしてたんだが、スネークが急に走ってきた。

「どうしたの？」

首を傾げて質問する。

どうせまたやらかしたんだろ。
だいたい想像できるし。

「まずいことになった」

「チンピラに絡まれたとか？」

それで相手に怪我させて騒ぎになったとかだろ？

「その時相手の肩を折ってしまった。それで軍の警備隊が探してる」

随分派手にやったな。

怪我させた相手がまさか国の高官とかじゃないだろうな。

「それはまずいな。なら速く宿に戻ろう」

〈宿〉

窓を開けて外を見る。

「そこまで、警戒はしてないようだ。いざとなったら、やるしかないけどな」

まあ1人の搜索だしなあ。

【スネーク隠れる】

【わかった】

小声で会話する。

「はい、何でしょうか？」

いたって普通の口調で応答する。
こうしないと怪しまれるからな。

「ここら辺で青い瞳をした人を見ませんでしたか？」

「何かあつたんですか？」

「詳しくはわかりませんが、本郷様から探せとの命令が出ています」

「心あたりはないですね」

「ご協力ありがとうございました」

兵士が次の部屋に行く。
にしても青い瞳とはね。

「スネーク出てきていいぞ」

にしてもなんでスネークを捜し回るんだ？何か特別な理由でもあるのか？

「！」

俺はそこではつとぎずいた。

青い瞳そりゃあこの時代で青い瞳なら誰でも捜すな。

「行つたか？」

「ああ、大丈夫だ」

「なんでこんなに捜すんだ」

「だぶん、違う世界からきたことを知ってるんだろ。だから、見つければ情報を集めれると思って探してるんじゃないか」

「捜されて見つければ間違いなく利用されるそんなのはごめんだ」

本郷一刀の噂からそんなことはないと思うけど一応な。
他の軍の連中は利用しようとするんだらうけど。

「とにかく今は逃げるのが先決だ」

「この地域一帯の中では俺はマークされてることになる」

大丈夫中国大陆で搜索されてるから。

「ああ、まだ勢力が小さいから搜索範囲は広くは無いだろ。勘ずかれる前にここからずらかった方がいいな。まあでも明日まではまだ大丈夫だらう。ただ、明日は速く出よう」

「ああ、俺もそうしたい」

「じゃあ今日は明日に備えて速く寝よう」

また早寝早起きか。

たまにはゆっくり寝てゆっくり起きたいよ。

「ああ、わかった」

「翌日明朝」

「よし、さっさと行こう」

あの街から数時間は歩いただろうな。多分。

「本郷一刀の領地は抜けたか？」

ああ、明日には洛陽に着くだろう」

多分、な。

「そうか。追うのはいいが、追われるのは良いものじゃないな」

それは誰でもそうじゃないか？

「俺は全国指名手配されてるけどな。この世界で」

「大変だな」

たしか彼方元の世界でも2、3回全国指名手配になってるよな。

今絶対失礼なこと考えたな。

「自分でやったことだからな、別に後悔してないさ」

「急に話が変わるんだが、この前のメタルギアの話だ。核弾頭が搭載されてなかったが、なにかしたのか？」

色々ねテロリストどもはあまり強くなかったね。

「今その核弾頭は日本海溝の1000kmの所にあるもちろんメタルギアを所持していた組織は壊滅、構成員はCIAによって全員逮捕。死人なし、良い結果で終わった。国連からもスネーク宛に感謝状が来ていたぞ」

少しでしゃばり過ぎかな？

「聞いてないぞ」

「まあ、メタルギアについては一切語られないからな。まあ、家の机の上に新聞と一緒に報告書のつかてるけどな」

あの書類この前濤が捨てたっけ？やば。

まあいつか。

「情報が漏れるとまずいんじゃないか」

「大丈夫だよ、まさかそんな所にあるとは思ってないだろうし」

そら国家機密の書類がゴミ捨て場にあるとは思わないわな。多分もう炭になってしまっているだろうが。

「灯台下暗しということか」

そんなレベルじゃねえけどな。

「そういうこと。そついや最近、治安が悪いのは知ってるだろ」

「ああ、世界各地で紛争、内紛があると聞いている。俺も現地に行

つてきた」

よし話題反らし成功。

「俺も現役復帰だよ。紛争がおおくてな。テロリストどもの装備が新しくなって来てな。EUからも支援要請が来ている。スネークにも手伝ってもらってるぞ」

あれはEUじゃないわ。国連だった。

「まさか」

「ああ、表向きは国連からの依頼になってる。アメリカからの支援を受けていることを知れば世界から叩かれることになるからな」

多分叩かれないと思うけどジミー支持率99・9%だし。

「そうだったのか。そろそろ、日が暮れてきたな」

気づけばもう夕方だ。

「ああ、そうだな今夜はここで野宿だ。今日は何も無いが我慢してくれ」

「構わない」

よかった。

また文句言われるかと思ったよ。

「さっきその川の水を汲んできたが。飲むか？」

「遠慮しておくよ」

生の魚はOKで生水はダメってどういうことなの・・・？
少なくとも水道水よりは美味しいけどな？

「俺は先に寝るぞ」

スネークはそういつと毛布をかぶってさっさと眠ってしまう。

靴の音がする。

「ま・た・か」

「へっへっへっ金目のもん置いてきな」

あららこんな夜更けにご苦労さまだな。

「この世界の賊は金目のもん置いてきなってしか言えないのか」

「んだと、聞いて驚くなよ俺達はあの黄巾賊だ」

知ってるよ。

頭に黄色い布巻いとるだろうが。

「ご苦労様」

そう言った瞬間、30人いた兵士は真つ二つになった。

「こんだけ騒いでも起きないスネークは色んな意味で凄いな」

もつとも素手で人を斬っている、彼方も凄いのだが。

失礼なナレーションが聞こえたきがするぜ・・・。

「ま、いつかもう寝よつと」

毛布を巻かないまま寝てしまった。

（翌朝）

「スネーク行くぞ！起きろ！」

スネークの横つ腹を蹴飛ばすが、防御される。

「起きてたの？」

「たつた今な」

そいつはすまなかったね。
というか殺気に反応するのな。

「さつさと行くぞ」

「ああ」

もう少し易しい起こしかたは出来ないのか？

「無理」

「俺なにか言ったか？」

「どうせ、もう少し易しい起こしかたは出来ないのか？とか思ってるんだろ。顔に出てるよ」

「!？」

やっぱり人間じゃないな。

人間じゃないとか思ってるな。

それにその顔なら誰でもわかるよ。

そんなこんなで俺達は洛陽に向かったのであった。にしても嫌な予感がするぜ。

そのとき彼方達は既に洛陽が白装束の手に落ちていたことを知らなかった。

ゝ第二話ゝ洛陽への平和な道のり。(後書き)

これからも頑張ります。

く第三話く歪みある彼方。（前書き）

「作者!! 最近は・・・岩に隠れつつたのか?」

「いえそのようなことは決して!」

く第三話く歪みある彼方。

とりあえず洛陽に着いたので俺達は洛陽の街を見ようと思ったのだが、人の気配が全くない。

「さて、どうします?。」

スネークに聞く。答えには期待してないから大丈夫。

「怪しいが、一通り見て回るか」

「そうだね」

2、3時間ではつと見る。

「本当に誰もいないな」

「ああ、とりあえずもう一回みてみよう」

流石洛陽広いなあ。

「寛そいつは必要ないみたいだ。あつちからきてるぞ」

白い服を着たどこかの宗教みたいな連中が槍やらなんやらを持ってこっちに歩いてくる。

「あの連中なんだと思う?。」

「昔のテロリスト」

「確かにそう見えないこともないな」

でもその答えは間違ってるよ。

あれだから中東の人とかじゃないからね。

「白い服が、正しく不審者だな」

「スネークのスニーキングスーツも十分怪しいと思うがな」

素直な意見だ。

「潜入だけには使える」

「確かに。何にしてもまず目の前にいるやつを倒しますか」

「わかった」

「抜刀八分桜乱れ斬り」

どうだい僕の一撃。

2、300人は斬ったが至る所から沸いて来る。
気持ち悪いよ。何か酔ってきた。

「沸いてくるね」

「見る人がゴミのようだ！」

某大佐だらしねえな。

「バルス」

「はぁ〜目が目が〜」

「なんだ今のは」

「気にすんなよ」

突っ込んだら負けだスネーク。

「うおおおお」

スネークは素早く何回も刀を振る。

白装束の死体が地面に大量に転がっている。

「どうだ!!」

「まだくるよ」

「これじゃきりがない」

「諦めんなんよ。諦めんなお前！俺だつてこの・10度のところ蜷が採れるって頑張ってるんだよもつと熱くなれよ!!」

そんなにこの戦闘熱が出てたのかな？

「一閃龍桜」

「どこから沸いて来るんだ？」

「誰か沸かしてるんだよ。いわいる妖術ってやつだ」

「何でわかるんだ？」

スネークは不思議がっていたが納得したのかまたと白装束を斬り始めた。

「みじかにいるからさ」

あいつも違う世界の奴だったかな。

「成る程。そいつも人間じゃないのはわかった」

流石スネーク勘が良いな。

そりゃ魔法使いは間違っても人間には部類はしないだろ。

会話をしているがその間も敵を斬っている。

「きりがないな。ついでに今ので2456人目だ」

「2458じゃないか？」

「二人まだ死んでない」

あ、今死んだ。

「よくわかるな」

「こうみえても、化け物と呼ばれてるんだぞ」

悲しいがな。

「納得がいくな。寛の場合は鬼神と呼ばれてもおかしくないからな」

「なんで皆、そういう評価なんだろう。後、脱出するぞ。掴まれ」

「どうするんだ？」

「こうするのさ。神速移動」

久しぶりにやると疲れるな。

「うお」

そう声をあげたときは既にどこかの関所の前についていた。

「ここは何処だ？」

やっぱり久しぶりにやると色々あれだな。

「どうやら戦場のようだ」

「よし黒いローブを着るんだ怪しいが顔が割れなくて便利だ」

「確かにな」

「スネークは隠れてくれ」

援護してほしいしね。

「わかった。でもひとつだけ言わせろ、最初からあの技を使ってくれ」

「そいつはすまなかったね。ちょっとお話してくる。ふっ！」

陣の何処かに着地する。

「衝撃が結構あるな。おっ、本命の奴が来たみたいだな。」

物陰に素早く隠れる。

（流石彼方化け物じみてるな）

それを見ていたスネークはつくづくそう思ったのだった。

「あの会議は、酷かったね」

「まあ仕方ないですよ。袁紹さんですし」

まあ一刀が言うのも分かる。

「確かに」

「お困りのようだな」

「誰？」

敵だったかどうかするんだと言いたところだが今はそんな場合じゃない。

「情報を渡しにきた、善良な市民さ。ここの大將は頭が悪いみたいだからな」

「ははは」

苦笑する一刀。

「大変だな。小国だと立場も弱いしな」

「確かにそうですね。それで情報とは」

そんなに気になるのか？

「ああ、忘れてた。この軍隊の集団をみるかぎり反董卓連合軍なのはわかる。これは変でもなんでもない。だがそれなら、洛陽に人がいてもおかしくない。でも居なかった。これはおかしいまあ言いたいのはそれだけだ」

「確かに、私たちと戦うなら、軍を整えるはずです。それに町の人の人が一人も居ないのはおかしいです」

この子は天才だから大丈夫だろうとは思うが。

「つまり誰かが偽の情報を流してるってことか」

「そうなるな。あくまで、可能性としてだが」

一刀の命を狙ってるのかもな。

「その可能性が一番高いでしょう、戦をさせて得をする人達がいれば間違いありません」

流石名軍師すぐにわかつちまうのか。

「わかつたのはこれぐらいだな。じゃあ後は自分で頑張ってくれ」

その場からさっさと立ち去ろうとする。

「待て！」

武将だろう・・・。

その武将に呼び止められる。

その反応が普通なんだが。

「・・・はあ」

厄介なものに見つかったな。

スネークきずいてるかな？

「何者だ！」

「善良な市民さ」

少し間違ってるかもな。

善良じゃなく悪徳かな？

「ならば何故、そんな不審な格好をしている。敵の斥候ではないのか」

敵の斥候がこんなに目立つ格好してるわけないだろう。

「愛紗違うんだ。この人は、情報を提供してくれた人なんだ」

「御主人様は黙っていてください」

「なんか勘違いされてるみたいだな。さっさずらかりますか」

「逃がすな。捕らえろ！！」

「うち！スネーク見えるか？」

兵士まで集まってきやがった。

「ああ、よくみえる」

「やってくれ」

スネークはスナイパーライフルを構えて袁紹軍な兵士に狙いを定める。

「ぐは」

「地獄の暗殺者だ」

「逃げろ、魂を取られるぞ」

ははは、どんな噂流れてるんだろ。

「ひい、助けてくれ」

「大丈夫か？」

最後の兵士を撃ち殺して喋る。

「ああ、相変わらずいい腕だ」

「なにをこちゃこちゃ言っている。いくぞ！」

「ふっ、踏み込みが甘いな」

キンという音をたてて関羽の持っていた武器が盛大に吹っ飛ぶ。スネークにとってはあの切り込みも相当甘く見えてたみたいだ。

「ひゅっ、ナイスショット」

「これくらい当然だ。さあ、早く脱出しろ。後ろから兵士がきてるぞ」

「了解。スタングレネードでもくらっててくれ」

閃光と耳をつんざくような音が放たれる。

流石の猛将も目が眩み耳が聞こえなくなる。

「くっ！」

「神速移動」

「流石だ。速かったな。0・01秒だ」

本来ならこの技もつと速くなくちゃいけないんだけどね。

「数えてたのか。いやそれにしても、武器に弾を当てて弾き飛ばすなんて、やるな」

「冷静にやれば簡単に当たる。それに、富竹にはまだ及ばんさ」

富竹さんは自衛隊の射撃教官ってレベルじゃないからね。

「確かに、銃を持たせたら、天下一品だろうね」

「経験の差を簡単にうめれる実力を持っている。そして、狙撃兵に重要な、冷静さ、余裕を持っている」

「あのスキルはすごいよね。普通は無いものだよ」

状況判断にも優れるしね。

そう考えると富竹さんうちの軍に誘いたかったな。

すると大きな声が聞こえる。

進軍を開始したようだ。

「動きはじめたか」

「どうするんだ？」

「ちよつと行つて暴れて来る」

「ほごほごにしとけよ」

そんなに心配なのか。

（彼方に殺されるとは、敵も可哀相だよな。）

「わかつてるって。兵士に変装してこれでよし。じゃあまた後で。高速移動。さていきますか」

さつきぱくじゃなかった借りてきた兵士の服をきて戦場に赴く。

「いくぞ!!」

「応!!」

「敵を蹴散してやる」

流石時代を感じるねえ。
いい声だよ。

「こちら鳳2。応答願う」

「こちら鳳6異常無し。後方から、敵の奇襲」

「了解。本部から指示があるまで待機」

「了解」

「こちら鳳1、鳳と雲雀、鶯は後方の敵に当たれ。白鷺はバックアップだ」

鳳1こと小此木が指揮する山狗部隊。

チームに統合された今は戦闘、諜報ともに優秀になり、チーム内ではかなりの信頼を受けていた。

「なにあいづらぶつくさ喋ってるんだ」

「気にしてる暇はないぞ。すぐに迎撃だ」

「行きますか。なるべく普通に戦うしかないな」

普通の加減が出来るか怪しいけど。

「聞こえるか」

「ああ聞こえるよ」

「派手に暴れてる奴がいる。多分そいつがその部隊の将だ」

ならそいつを捕まえて武勲でもあげるか。

「了解上手くやるさ。弓でも十分あたるからな」

「わかった、兵力的にはこっちが勝ってる。相手は突っ込んで来るだけだ陣形も綺麗じゃない。上手く相手すれば簡単に倒せるな」

見えてんのか？ここからあそこまで何kmあると思ってんだ。何気に弓を持っていなかったというね。

「了解だ、大丈夫こっちには三國一の軍師がいるんだからな」

流れ矢が3本飛んでくる。

「あぶねえ。通信を終了する」

銃弾より遅いのが救いかな？

「了解」

「行くぜ、うおおていや。おりゃ、こんなもんか？」

並み居る敵をバッサバッサと斬っていく。

手加減してるつもりだがこれはアウトかな？

「すごいな」

「俺達も続かないとな」

「よし行くぜ」

うおおお

俺？の戦いっぷりを見て兵士達の士気も上がったようだった。
やっぱり手加減できてなかったのか。

「士気が高まりましたね。何かあったのでしょうか」

「何であろうと今が好機です、一気に殲滅します」

「敵の士気があがったか。しょうがない撤退だ！敵を突っ切るぞ！」

「華雄覚悟」

「邪魔だ雑魚！」

いかにも猪つてかんじですね。

そしてあなたは雑魚にやられるんですよ。

「雑魚ですとも。一閃」

どす、と鈍い音がする。

「安心しろ、峰打ちだ。と冗談はさておき、敵将華雄捕らえたり！」

「将軍がやられた逃げろ」

「追撃します」

「仕事は終わった。高速移動」

やっぱり久し振りにやってるせいか、気分が悪い。

「速かったな」

「これくらいは普通だよ。10kmも無いんだぜ」

「十分だ。ところで連合軍は真つ正面から敵に突っ込んでいるが、大将の頭はいかれてるのか？」

的を射た発言をする。

「ああ、純粹にいかれてる。MAXでな」

「折角の精鋭が全く活かされていない」

スネークが言うんだから間違いないんだろうけど精鋭だったのか・・。

ということは袁紹で相当株落としてるんだな袁紹軍。可愛いそうに。

「まあ、仕方ないさ。大将があれじゃあな」

「同じ軍人としては恥ずかしいな」

同じではないだろう。
多分な。

「一般人の方がまだいいかもなでも小此木みたいな奴が一番いいけどな」

「へつくしょん。誰か俺の噂してやがるな。大将か？」

「風邪ですか、隊長？」

「大丈夫だ」

「？何か今知り合いの気配が」

小此木か？

「本郷隊が前に出たぞ」

「前線はただでさえ混乱してるのにさらに混乱するだろうが。ほん
つとどうしようもないな」

数で押し切るつもりか。

力押しは被害が増えるからやめた方がいいんだけどね。

「まともな奴はいないのか」

「いても聞く耳もたないだろうな」

あの大將だし。

「いつそのこと殺っちまった方がいいんじゃないか？」

「かもな。さて本郷が囷にされる前に何とかしないと。ジャベリ
ンはあるか？」

「ああ、あるぞ」

「よし貸してくれ。こいつならここからでも届く」

何処にしまったたのかは来になったがここで聞くとなんか負けのよ
うな気がしたのでやめた。

門に狙いをつけミサイルを発射する。

派手な音をたてて門が崩壊する。

「吹っ飛んだ。百点だ」

「兵が退いていくぞ」

「三国志的に、ここはシスイ関かな」

「洛陽までは？」

「まだ、関がある。しかも最強のな」

「なんだそれは？」

「虎牢関だ」

「ジャベリンで吹っ飛ぶか？」

「門は簡単に吹っ飛ぶさ」

ただ守ってる武将が・・・ね。

「行くのか？」

「ああ、物見遊山でな。こいつを着るんだ」

「兵士の服と変装マスクか」

「よし、自然に混ざる感じで行くぞ」

でもスネークの目が青だから簡単にはれるんじゃないかね？と思ったのは

ここだけの話だ。

あいにくカラーコンタクトは持ってなかったんでね。

「わかってる」

「スネーク、掴まれ」

「これでいいか？」

「ああ。よし行くぞ、同時高速移動」

「だめだ、やっぱり慣れないな」

やば吐きそう。

「仕方ないさ。特に初心者は」

「初心者？まあいい。潜入したが、ここから虎牢関まで歩きか」

「健康のためだと思って我慢してくれ」

「わかったそいつで納得しようじゃないか」

聞き分けがよくて本当に助かるよ。

それから半日くらい歩いて虎牢関についた。
普通に行けばよかったよ。

「でかいな」

「そりゃあ中国一堅牢な関だからな」

あくまでそう思ってるだけだったが。

「動くみたいだな」

「小国ながら、かなりいい条件を出せたようだ」

「よしショータイムだ」

「喧嘩の時間だな。お兄さんは大好きだよ」

殺し合いと喧嘩はまた違う。

まあ喧嘩で死人がでることもあるが。

「いくぞ」

「了解」

「駄目です。数が多すぎて防ぎきれません!」

兵士もあせっているようだ。

「・・・でる」

「呂布將軍お待ちください!」

門が開いて一人の少女が出て来る。

「大将かな?自分から出てくるとはいい度胸だ」

「・・・」

「勝負してくれ」

「いいの？本当に？」

「はっはっは。愚問だ全力できな」

豪快に笑い飛ばす。さあ、呂布の力見せてくれよ。

「さあ、いくぞ！！」

世界を越えた不運な自宅警備員彼方VS飛将呂布

「いくぞ」

武器のぶつかった音が響く。

いつきにいくつもりだったが、流石に手を抜きすぎたか。
気絶させることも出来ないな。

呂布がこっちに向かってきて、持っている武器で攻撃してくる。

「甘い甘い。この程度簡単に対応できるぞ」

「！強い」

「そんなに強くはないさ逃げるほうが得意なんだね」

くう流石は呂布いくらか重い攻撃かくる。ちょっと力を抜きすぎたかな。

だがこれならどうか。

「いくぞ。無殺剣一閃」

呂布を斬る。

「安心しろ峰打ちだ。スネークこっちはかたずいた」

「さつさとずらかるぞ」

「C4を仕掛ける」

プラバク設置。

よし、これでいい。

「爆発するぞ。門から離れろ！スネークいくぞ」

「ああ」

スネークも機敏に行動する。

C4が爆発して門が吹っ飛ぶ。

「よし洛陽に入るぞ！」

「了解だ」

（洛陽）

「相変わらず誰もいないな」

「連中入ってきたぞ」

「本郷軍だ」

随分入ってくるのが早かったな。

「白装束の奴らが動いたぞ」

「またあ？しょうがねえ、いつちよやるか」

本当の狙いはやはりこっちだったか。

「ああ。ショータイムだ！」

「少しだけ、力をだすぞ……。閃刀・抜刀平切り」

息を大きく吸い家屋ごと一気に切り伏せる。

音と同時に数千の白装束の首が落ちる。
それと家が倒壊する。

（寛だけは敵に回したくないな。）

「かたずいた。次」

家の持ち主さんたちすいません。

「あっちだ」

「了解。高速移動」

やっと感覚が戻ってきた。

「何者だ！」

「そんなこといつてる場合じゃない」

お堅い人と話できるのか？

「次から次へと沸いて来る」

「はぁー。殺刀・地獄切り」

洛陽全体にいる白装束の連中を四つに切る。

少し残酷だったかな？まあこれくらいはまだいいほうか。

「ふう、終わり」

「もうかたずいたのか。俺の分も残しておいてほしかったな」

「悪い悪い、少しイラッときたもんだから派手にやっちゃまったよ」

気絶ですませておけばよかったな。

「おぬし達何者だ！特にそっちの男」

「愛紗やめてくれ」

「ですが・・・」

「いいんだ。ところで聞きたいことがあるのですがいいですか？」

相手が丁寧語ならこっちも丁寧語で行かないとな。

「構いませんよ」

「天の世界を知っていますか？」

「聞いたことはあります」

「聞いたことがあるというのは？」

「最近天からこの乱世を終わらせる者が来るといふ噂がありましたので。その中に天の国という言葉がはいっているのです」

多分俺のことなんだろうが。

「あなた達はなぜこんことを？」

「暇だからです」

この理由づけは苦しいよな。

「それにつけたしがあります。二人目の天の御遣いはこの国を変えてしまうと言われています」

「なるほど」

「天の御遣い？夢のある話だ」

吸血鬼を恐がつてるスネークには言われたくないと思うけどね。
やば思い出したら笑えてきた。

「仕方ないさ、こんな御時世だ。それに天の御遣いの一人目はいる
じゃないか」

「二人目がいない」

スネークがまともな会話をしとる。
あしたは雪か。

「話によると二人目の天の御遣いは不明だそうです。偽装、逃亡、
隠れるのが得意らしいです」

どうからそんな話が漏れてるんだ？

「つまりわかってて自分から名乗りでないってこと」

「多分そうだと思います。理由があるかもしれません。戦いたくな
いか、軍につきたくないか」

「つまり元の世界では軍人だったかもしれないってことかな？」
なぜそこまでわかるし。

「天の国の戦とはどのようなものでしょうか？」

「弓矢よりも強い武器を使って、遠距離で戦うんだ」

わかりやすい説明だ。

「話を戻しますね。私は貴方が第二の天の御遣いさんだと思っています」

「僕ですか」

ほお、いい勘だな。

「はははそれはないな。元曹操軍だこいつは」

「そうなんですか？」

一刀が不思議そうに聞く。

「昔の話です」

「そういうことだ。あんたらも、嬢ちゃんを助けにいったほうがいい」

「嬢ちゃん？あつ董卓は？」

「ちゃんと確保しました」

流石天才軍師。

よかった。あ、ありがとございます
ってあれいいい」

「あの者らただ者ではあるまい」

「南皮付近の街」

「あぶなかったぜ」

「そうかそこまでじゃなかったがな」

「しかし騒がしいな。あのなにかあったんですか？」

近くにいた村人に聞く。

「あんた知らないのかい、黄巾の残党が大きな軍勢を作ってこの街に向かつてるんだよ」

黄巾の連中もこりないねえ。

「何万ぐらいですか？」

「1、2千くらいだ。わかったらあんたもさっさと逃げるんだよ」

他人の心配をするとはいいやつだな。

「スネーク」

「わかってる。ちょっと暴れて来る、だろ」

もちろん。

まあ、今回はかなり暴れせてもらっつが。

「正解」

「行きたきゃ行ってくればいいさ。俺は止めたりしない」

「どうも」

流石スネーク空気が読める男だ。

「気の毒だな。賊が」

今聞き捨てならない台詞を聞いたぞ！

「高速移動。ほいっと、またそろそろとご苦労なことで。さあてさくつとやっちまうか」

「なんだてめえは」

「人殺しだよ。惨殺・八つ切り」

2千の軍の体が、八つにわかれる。

「あんまり、いい殺し方じゃないけど。まあ今までやってきたことの報いだとも思っといてくれ。さて戻りますか。高速移動」

「早かったな」

「たった2千だもの」

「あんたすごいな」

恐がる奴はよくいるが誉める奴はそういないぞ。

「いえいえたいしたことはありません」

「いえいえ謙遜なさることはない。実は貴方様にこの町の県令になつてほしいのです」

いかにも村長っぽい人が話しかけてくる。

「まあ構いませんが」

たまには良いことをしても罰はあたらんのだろ。
たとえそれが偽善だったとしてもな。

「お心ずかい、いたみいます」

「もう黄巾党の残党がきても負けないぞ」

「おー！ー！！」

（一ヶ月後）

街は前よりも活発になり、悪人も減った。予算を上手く使うので、税金は低く、しかし予算は黒字という状態であった。

しかも彼方の徳を慕ったのか、各地から有能な将兵が集まって来た。兵力も増え、傘下に入る街も増え、まさに勢力となっていた。その中でも各国の目を引くものが銃や戦車だった。

しかし情報を漏れないようにしていることもあり知っている国も本当に数国だけだった。

しかもその国々は渡辺軍の傘下の国である。

「公孫贇からの使者？わかった通してくれ」

なんでしょうね。

まさか宣戦布告とか。

「はっ！」

公孫贇の使者と思われる人物が入ってくる。

「本日の要件は我が国と同盟を結んでほしいのです」

「わかった。条件はなにもない、お互い助け合っていこうじゃないか」

こういうのはすっぱっと終わらせるに限る。

本当は調印式みたいながあるんだろうがそこはいいことにしよう。
面倒くさいから。

「ありがとうございます」

場所は変わって、本郷軍
今は軍儀の真つ最中。

「報告することは、まず袁紹さんの近隣で新しい国ができたのと
ですそれのおかげで袁紹さんは迂闊に動けないそうです」

「それは黄巾党の残党を一瞬で倒したといわれている者の国か」

星が喋る。

「はい。ですが情報が少なくて」

彼方だからこそ情報を漏らさないのだ。

「実は国境の警備が厳しく、国に入るのにも厳しい検査があるんです。そこで昨日愛紗さんと星さんと話し合っただんですが、私達で現地調査にいくことになりました」

本当はそこまで厳しくは無い情報統制は相当厳しいだろうが。

「仕事とか守りとかは大丈夫なの？」

「今の時期はどちらも心配する必要がないので今しかないんです」

「皆が賛成ならいいんだけどさ」

「御主人様聞きたいことがあるのですがよろしいですか？」

「ああ構わないよ」

「御主人様は警察というものを聞いたことがありますか？」

一刀は疑問に思ったが口には出さず答えた。

「俺達の世界の治安を維持する役人みたいな人かな」

「なるほど、ありがとうございました」

朱里はなんであんなことを聞いてきたんだろう？

まいいかはやく仕事をしないとまた愛紗にどやされる。

ゝ第三話ゝ歪みある彼方。(後書き)

誤字脱字あるかもしれません。

く第四話く現代！？いいえ三国志です。街が発展したたる？（前書き）

歪みありまくりです。

文中の《》のかっこは無線での会話です。聞いている人の。

「第四話」現代！？いいえ三国志です。街が発展しただろ？

あれから一ヶ月街の城壁は高くして掘りは深くした。

155mm迫撃砲も設置したし、99式戦車、ミニミ（軽機関銃）

も配備、装備した。もちろんSMAWも配備、装備した。

グレネード、スタングレネードも装備させた。

新型の装甲兵員輸送車輛も配備した。

「やることないな」

仕事は数秒で終わるし。山賊の類はふるぶっこにしたし。
あくまで殺してはいないよ。

「寛話があるんだが・・・食糧が増えすぎている。地下に貯蔵した
ほうがいい。」

「じゃあさっそくとりかかってくれ」

「了解！」

今何て言っただんだ？眠くて全く聞いてなかった。

そのころ本郷一行はというと。

「検問だねこれは」

まるで元の世界にいるみたいだ。

「凄く大きいのだ」

「支城が数十個固い守りですね」

「失礼ですが、身分証明書はお持ちですか？」

現代の装備に身をつつんだ兵士が身分証明証の提出を求めてくる。
学生証でもいいのかな？

「これでもいいですか？」

「はいお借りします。そちらの方々はこちらにお名前を」

「わかりました」

カリカリ

みんなに身分証明書が渡される。

「それは国内では常に使いますので所持しておいてください。ここから先はバスで移動するので、バス乗り場につけてください」

「バスもあるんだ」

いよいよ現代ってかんじだな。

「御主人様バスとは？」

そうだよなみんなにとっては始めて見るもんだしな。

「天の世界の乗り物だよ」

「そうなんですか」

「文明的にかなり進んでいるんでしょうか？」

うーん。やっぱり俺と同じ天の御使いになるのかなあ？

「多分ね。バスが来たみたいだ」

それから30分移動に時間がかかった。

みんなにとってこのスピードは速かったのか朱里は気分を悪そうにしている。

「凄い早さでした」

「景色が凄いはやさで通り過ぎていったのだ」

「なんだか気持ち悪いです」

「それにしてもつい最近出来たとは思えませんな」

確かにこの開発の効率のよさはなんなんだろうか。

「あれは迫撃砲！なんでこんなところに」

軍隊も現代か。

敵にはまわしたくないけど。

「まさか二人目の天の御遣いでしょうか？」

「それもありうるな」

「失礼ですが身分証明書はお持ちですか？」

門の前で兵士に聞かれる

「はい」

「ではどうぞ」

俺達は大きい門をくぐって中に入っていく。

「すごい活気だ」

「洛陽を越しているかもしれませんね。きゃ！す、すいません」

「どこ見てあるいとなねん。このガキ」

いかにもな恰好をした連中が言う。

「す、すみません」

「骨が折れてしもうたわ。治療費ださんかい治療費」

「貴様」

愛紗が構える。

流石に武器を出すのはまずいと思ったのかな。

「君何をしてるんだ」

警官がヤクザに言う。

「警察だ。止まれ！」

「ちっ」

ヤクザは走って逃げようとするがパトカーに阻まれる。

「LCPD（自由な国の警察組織）だ止まれ！！」

「くそ」

「恐喝の現行犯で逮捕する」

すると他の警察官が近寄ってきて言った。

「お怪我はありませんか」

「ありがとうございます」

「市民を守るのが警察の仕事ですから」

「すみません。警察っていつからあるんですか？」

警察までいるなんて。

「そうだなあ。先月くらいか？」

《Aブロック3地区でナイフを持った男が暴れているもよう近場の

警官は直ぐに現場に向かえ』

無線機から声がある。

「了解直ちに向かいます。ではお気をつけて」

「はい」

「忙しそうでしたね」

「民を守るうとする心意気立派です」

向こうは仕事だからね。

俺たちの警邏みたいなものなんだよね。

「お腹すいたのだー」

「確かに腹が減ってきたな。あそこに入ろうか」

近くにあつた時計を見る。

時計はもう12時を指している

「見たことない店ですね」

その店は西洋風の店だった。

「とりあえずはいつて見よう」

〈店内〉

「いらつしゃいませ。何名様でしょうか？」

「五人です」

「お煙草は吸われますか？」

ここが本当にパラレルワールドなのかわからなくなってきた。

「いえ」

煙草？知ってるのか？

「こちらの席にどうぞ」

「皆も座ってくれ」

落ち着いたかんじのいい店だね。

「メニューはこちらです。注文がお決まりの際にはそのベルを鳴らしてください。それではごゆっくりどうぞ」

「何にする？」

「たくさんありますね。じゃあこれに「やかましいんじゃあーぶち殺すぞ！」はわわー」

朱里が大声にビックリしてメニューを投げ飛ばす。危なかったもう少しで顔面に当たるところだった。愛紗との鍛錬がいきってきてるのかな？

「朱里落ち着け」

「てめえ殺されてえのか!!」

「そりゃあこつちのセリフじゃこのガキが!!」

短刀を取り出す。

なんでそんな物を持つてるかは考えたくもない。

「またですか」

「警察が来るまで大人しくしていたほうがいいと思うよ」

「あまり目立ちたくはないですからね」

その連中の後ろから声がかけられる。

「おい兄ちゃん チームの渡辺だ」

「、渡辺!？」

「やべえ逃げるぞ」

「殺される」

そのヤクザ風の男たちは一目散に逃げ出した。

「はぁー、傷つくわぁー。殺さないよ。気絶はしてもらったが。ふっ」

ヤクザどもの首を叩いて気絶させる。

「こちら渡辺犯人二人を取り押さえた。現在位置に増援を送れ」

《了解》

「こういつ輩は減らないんだよな」

まあ0にはならないだろうけどさ。

「はあー。おばちゃん被害はなかったかい？」

「大守様のおかげで」

「だから大守なんて呼び方なくていいって。そんなたいそうなものじゃないんだから」

「御主人様みたいな方ですね」

「ご兄弟ですか？」

「お兄ちゃんにそっくりなのだ」

「たしかにそうですね」

皆が言う。

「そんなに？」

「似ているではないですか」

（謙虚なところとか）

「うーん」

そんなにかな？そうでもないと思うんだけどな！。

（彼方視点）

「まったく嘆かわしいな。まあ事件発生率は一日15件から1件に減ったけどさ。それでもまだああいうことがあるんだから仕事が無くならないね。給料をもっと増やしてくれないと割に合わないな」

給料を上げるのは彼方の役目なのだが。

「すみません」

貧乏くさい少女が近寄ってくる。

「はいなんでしょうか」

「大守様にこのお人形を受けとってもらいたくて」

ばればれの変装でくるとは俺も舐められたもんだな。

「それはそれはうれしいですね。ですが」

「えっ！？」

彼方は懷にしまっていた、短刀を投げつける。

「ばれてしまつては仕方ない死ね！」

男は剣を取り襲ってくる。

「剣筋が甘いな」

剣を促し、持っていた剣を吹っ飛ばす。

「くっ次は必ず殺る」

「実力をつけてからきな。相手はしてやる。さて帰るか」

そういえばなんで少女に化けてたんだ。趣味疑うわー。まさか・・・
ロリコン！

く一刀達視点く

「大きい城だね」

「簡単に入れてくれるのでしょうか？」

みんなで悩んでいるとおばあちゃんが兵士に話しかける

「大守様いますか？」

「はい今なら中庭にいるかと」

「普通に入つていつてますね」

「すごいですな。色々な意味で」

警備ってどうなってるんだろう。

そんなときパトカーが物凄いスピードで走ってくる。

「なんでしょうか？」

「事件かな」

「大守様が不審人物に襲われた。これより国境警戒レベルを3に引き上げる」

「了解!!」

兵士が返事をしてどこかに走っていく。

「失礼します」

「何かあったみたいけど」

「御主人様、やはり大守の方と会った方がいいと思います」

「確かに友好を深めるというでもあるしな」

「しかし主殿ここの領主どのが信用してくれるでしょうか」

うーん。確かにそれはあるなあ。

へたに機嫌損ねて戦争なんてのは嫌だなあ。

「大丈夫だと思います。ここの大守さんは優しいと評判ですし、戦いは避ける方だそうです」

「でもさつき警戒がなんとかって」

「城南1kmの位置に山賊が出現。市民の皆さんは警官の指示に従い速やかに避難してください。繰り返します。城南1kmの位置に山賊が出現。市民の皆さんは警官の指示に従い速やかに避難してください」

放送が流れる。

「賊だって」

「この地方には山賊の砦があって数は十万を越えているとのことです」

《山賊の数およそ2万繰り返す山賊の数およそ2万》

「本部応答願う。こちら 259」

《こちら本部》

「袁紹の軍勢が接近中、その数およそ10万」

《了解交戦の許可及び発砲を許可する。隊長は 465に任せろ》

「了解」

「そこにいる皆さん避難してください」

「今は指示に従おう」

「「「はい（了解）」」」

「こつちです急いでください」

警官が誘導してくれる。

「本郷は悪なり！！」

「悪は滅ぶべし！！」

「滅ぼせー！」

「なんだこいつらは。本部応答せよ。市民の避難中に武装している兵士に襲われた。直ちに現在位置に増援を送れ！」

《了解。付近の警官隊は市民の避難が終わりしだい全速で増援に迎え。10分持ちこたえろ》

「了解。皆さん大丈夫ですか」

「こいつらは洛陽のときの」

「囲まれちゃいました。はわわわー」

「くそつここまでか」

諦めかける。

そのとき警官が言った。

「5千か」

「こうなったら、力尽きるまで戦うのみ」

「愛紗、鈴々も手伝うのだ」

「よしいくぞ！」

みんなが奮起しているときけたたましい音が響く多分、というか銃声だ。

「うおおおお」

その警官は雄叫びをあげながら機関銃を撃っている。

愛紗達はこの光景をみてポカーンとしていた。

「す、凄い」

「す、凄いのだ」

（何という強さだ。恋をも簡単に凌ぐかもしれん。）

流星に星もびつくりした。たった一人で軍勢と戦い、息ひとつ乱していないのだ。そのことに星は思わず息を呑んだ。

（治安を守る兵がこの程度ならば軍はどうなのだろう。どれほどの強さなのだ？）

星には予想もつかなかった。チームの兵士の強さを侮っていたのである。

もちろん警官がこのレベルなら、軍隊はもつと強いことになる。武器、いわゆる銃のレベルも違う。それでも警察程度ならば充分だった。

しかしこの男には軍隊もましてや警察も関係ない。25歳で死神の異名を持つ、この柵橋龍夜^{たなはしりゅうや}には。

「大丈夫か？あんだ達」

（まだ不完全燃焼だな）

「はい、ありがとうございました」

「気にしなさんな。これが仕事だ」

「あのすみません。その銃はどこで？」

「日本とは言えないな、アメリカからかな？本郷一刀君」

（M249はアメリカの発明品さブローニングM2銃機関銃もいいがね）

「！ご主人様お下がりください」

「勘違いするなよ。俺達の仕事は街の犯罪者を逮捕したり始末することだ。その中に敵の領地に大将自らわざわざきてる連中を消すことは入ってない」

「無事ですか！龍夜中佐」

「こちら 45、警官市民に被害なし。繰り返す。被害なし」

「よし撤収だ！」

「はっ！」

日米連合軍兵士はさっさと白装束の“かたずけ”る。

「じゃあな。今のはあんたらを狙ってたぜ」

「凄い方でしたね」

「ああ全くだ」

「かつこよかったのだ！」

「あの覇気、私と愛紗で戦っても勝てる気がしない」

「機関銃、か」

ベテランなのかな多分そんな感じがする。

「ではご主人様城に入りましょう」

（城内）

「あんたらか、本郷軍の使者とやらは。こつちだついて来てくれ」

「強者だな」

「ああ」

「スネーク中佐ご苦労様です」

「ご苦労」

「凄い人ですね」

「鈴々にかかれば楽勝ーなのだー」

「どうだろうな」

（兵士があれ程となると先程の龍夜という人物も本気を出してないな。）

しばらく歩いていると演習場についた。

「G O G O G O！」

「突入！」

「寛！」

「どうしたスネーク」

「今日演習の予定なんてあったか？」

「兵士が体動かしたいんだと」

「それでS W A T 顔負けの訓練をやったのか」

演習と言っているが使われている弾丸は本物であり、勿論当たれば死の危険性がほぼ100%だろう。

しかしそのような訓練をこなしてこそ、チーム、日米連合軍隊員と言えるのである。

「実弾を使ってるんだ。あるのは生か死さ」

「こいつが渡辺寛。チームもとい日米連合軍の総司令官だ。この国の君主とも言えるな」

スネークが本郷勢に説明をしている。朱里は真面目な顔をして何か考えている。

「本郷一刀ですよろしくお願いします」

思ったよりやさしそうな人でよかった。

「先程紹介がありました、この国の君主を勤めさせていただいている、渡辺寛です。よろしくお願いします、本郷一刀さん」

「こちらこそお願いします」

「立ち話もなんですから、ゆっくり話が出来るところに案内致しましょう」

「俺はこれから警邏の仕事があるんでな、また会おう！」

スネークは仕事に戻って行った。

「それではあそこの席にお座りください」

「は、はいありがとうございます」

「客人に失礼があつてはなりませんから」

六つある席に愛紗、朱里、一刀、鈴々、星、俺の順で座っている。

「それで今日は何用でしょうか？」

「友好を深めに來たのと、同盟を結ぶために來ました」

「なぜ我が国のような小国と同盟を結ぼうと思ったのですか？」

「貴方は民を大切にし、仁義を持っていると聞く。私とて無駄な戦いは避けたい」

「寛さんの国とご主人様の国が手を組めば、魏や呉、袁紹さんが手を出しにくくなるんです」

袁紹が？どうしてだろう。

「小国を潰すには充分な力を魏、呉、袁紹それぞれ持ち合わせておると思いますか？」

確かに、国だけで比べれば領地は狭い、しかしそれ程のハンデがあつても、手を出しにくい否、出せない理由があつたのだ。

「それは、装備、守りの堅さ、優秀な将兵、そして兵士の数、国力、

補給、軍需物資の備蓄量で寛さんの国が勝っています。これだけ有利な状況ならば手を出しにくいんです」

「そして最後は、民衆、民からの支持、そうであろう朱里？」

「はい星さんの言う通りなんです」

「寛殿、一つお伺い致してもよいですか？」

「構いませんよ。おっしゃってください」

「これ程の力を持ちながら、なぜ寛殿は野望を果たされないのか？」

「私の願いは平和に暮らすことであり、戦いをすることはありません」

「天下を統一した方が世が平和になると思われるが、そこはどうお思いだろうか？」

「目の前の民をいい人を助けられないような者はたとえ乱世を統一したとしてもさきの漢のようにまた乱が起こるでしょう。それだけは避けたいのです」

「寛殿は自分をそのような器では無いと思っておられるのか？」

「もちろんですとも私がここにいるのも何かの間違いと思うほどです」

星は凄いな向こうと渡りあってる。寛さんを見て自分に足りないものがあることに気付いた。行動力だ、行動力が足りないんだ。あり

がとう寛さん貴方のおかげで俺成長できました。

「ではなぜこの国の君主となっておられるのか？」

「民のためです、器が小さいと言っても諦めていい理由にはなりませんからね。私は私なりのやり方で民の期待に応えているだけです」

「謙虚さと、覚悟、十分な器が感じられますな」

「同盟を受けていたたけますか？」

「すみません。私が情けないために。私の国では直接国に関わるような、ことは民の声を反映します。こちらからの勝手な申し出ですが、明日まで待つていただけませんでしょうか」

「わかりました」

「ありがとうございます。では今夜のお休みなられるお部屋に案内させていただきます」

移動中は一刀や朱里と話た、国のことや賊のことを。

「こちらになります」

「ありがとうございます」

「いえいえこちらの勝手な都合で迷惑をかけているのでこれくらいは当然のことでございます。それでは用がありましたら、お呼びくださいませ」

彼方はそう言つて立ち去る。

「あれが本当の志を抱いている者か」

「ご主人様の方が大きな志をもっていらっしゃるぞ」

「ご主人様と彼の志は似ても似つかないものだぞ愛紗」

「民に人気な理由もわかりました。彼には人を引き付ける。仁義があるんですね」

「悔しいが、それはご主人様より何段も上だ」

こうして本郷軍の武将は寛軍の恐ろしさを垣間見るのであった。

く第四話く現代！？いいえ三国志です。街が発展したたる？（後書き）

心が折れそう。

く第五話く蜀との同盟。現代技術に勝てるもんか。（前書き）

更新速度を上げたい。

「おっほっほ元気だ」

く第五話く蜀との同盟。現代技術に勝てるもんか。

あの激しい(?)議論があつた翌日

《厳粛な審査の結果、本郷渡辺同盟は受理されました》

なんと国内の市民(お偉いさんも含む)全員が同盟をOKした。

これには流石に驚いたぜなにせ国民全員、流石に赤ちゃんは来てないと思うがそれでも全員がきたことが奇跡だね。

ということをやっと起きた(午前10くらいまで寝てた)本郷に会いに行った。

この情報は女官さんから決めて覗きに行った訳じゃないぞ。俺にそっちの趣味はないし。

「それでは改めまして、これからよろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」

こうして本郷渡辺同盟が締結された。

その日は特に何もなかったので宴会をして寝た。

漣が未成年にもかかわらずに酒を飲んでいたのは黙っておくことにする。

こうゆう日くらいは…ね。

そんなこんなで翌日になった。

「兵糧の問題か、地下の倉庫を広げる必要があるな。誰かー」

いきなり話が飛んでよくわからないって？ようは食料が増えすぎて倉庫が足りないっていう話だよ。
少ないんじゃないかって多いつつうのは幸せな悩みだよな。

「なんでございますか？」

「こいつをスネーク中佐のところに頼んだよ」

「畏まりました」

誰かを顎で使うのもいいなあ。なんて馬鹿なことを考えながら資料（建築物に関する資料だったかな？）に目を通す。
その資料で目についたのが耐震強度だ。

「ん？これはひどい耐震強度が…と言ってもここ日本じゃないから大丈夫…夫？かな？」

でも四川省で地震があったしなあやっぱり耐震強度の問題は結構きついなあ。

ぶっちゃけつい最近できた建物はいいんだが祖父の代から住んでる家とか俺が来る前の建造物は相当やばい。

ま、百聞は一見に如かずだ。この目で見てきますか。

〈スネーク視点〉

「地下倉庫の拡大か。この調子だとまだまだ広くなりそうだな」

この兵糧問題。国としては嬉しい限りなのだが、多過ぎて一つの街

に10万の兵士を十数年養えるくらいの量になってしまっているのである。

それを解決しようと立ち上がったのが、SZMKD（食糧増加問題解決組織。）である。

簡単に言つと、食糧を商人にいかに高く売り付けて利益を得るか、考える団体である。

組織頭は元関東連合二代目組長の六角丈二である。ヤクザでありながら市民の人気、外国との友好の幅から、現在は日本の外交官。

第三次世界大戦を三度も防ぐなど、功績もある。スネークの次に世界を救つた回数が多い人物。

「カロリーメイトの開発が遅れているな。午後からは調練か。今のうちに昼飯を食べるか」

にしても少ないならともかく多いのは幸せだなまるで今の日本やアメリカみたいだ。

こうして当然のように平和な日が続いている。しかし物事に永遠はないいつか途切れてしまうだろう。

しかし、彼なら”平和”を維持できるだろう。

「無駄な争いはする必要はない、か。自分も軍人のくせに何言ってるんだろうな、俺」

そう彼ならば・・・。

（side out）

結局昨日は耐震強度の調査をただけで今日は本格的に対策を練ろうと思っていたのだが、袁紹軍が攻めてくる。と聞き、対策会議を

強引に開かされました。

情けないぜ…怖いでしょう。

「報告を」

ぶっちゃけこの間も耐震強度のことしか頭にない。

「はっ、袁紹軍はおよそ20万の兵力で本郷と我が軍を攻撃しようと画策しています」

「袁紹は我が軍が弱小と油断しているのか、こちらに5万の兵だけを差し向けています」

震度5弱にしか耐えられないのはまずいよな。

「距離は？」

「ここから南20kmの位置だ」

「防衛準備開始、これより、防衛を開始する」

「サーイエッサー!!」

袁紹と渡辺軍との戦闘が始まったのだ。

「（ところでスネーク文官なんて言ってた？）」

「（いつもどおりさ）」

うちの高性能兵士が勝手に片付けてくれるパターンね了解。

じゃあ俺寝ようかなあ。

《袁紹軍を発見食事をとっている模様》

《遮蔽物が無いため、高周波が使えます使用しますか？》

《使用許可。司令部から発砲許可が出た。武器、戦車の点検をさせろ》

《了解》

こういった光景もはや当たり前になっていた。

「誰か、P S Gを見なかったか」

「P S G？あああちらの箱にあります」

「戦車の整備は済んだか？」

文官がせかせかと走り回っている。

「100輦の内90輦、整備完了いつでも出れます」

「よし、急がせろ！」

「はっ！！（忙しそうだな）」

「（偉くはなってもああはなりたくないね）」

「（俺たちの10倍は戦場での経験がある人だからな）」

このような光景も武将、文官ともに慣れていったのであった。

「準備はどんな感じ？」

カロリーメイトを食ってげふんげふん食べてるスネークに聞く。

「順調に進んでる」

明日までは大丈夫が。普通なら今日中に来そうだが、まあ袁紹だしな。

ていつか話すとき食うのやめろよ。

「よし、皆聞いてくれ。今日はゆっくり休んで明日に備えてくれ」

「「「「「おおー！ー！ー！ー！ー！ー」」」」」

「頼もしい限りだ。野郎共明日の喧嘩勝ちにいくぞ！」

「「「「「おおー！ー！ー！ー！ー！ー」」」」」

彼方も軍隊のお偉いさんである。

軍勢を鼓舞することは造作もない。

彼の兄貴分や魅力などもあるのだが。

彼の好かれるところは鼻にかけないことである。

チーム、日米連合軍兵士からも人気が高いのはそのためである。

勢いもあるのだが…。

「くしゅん。誰か噂してるな」

天の声に気づくとはただ者ではないな。

「さて明日戦ですか」

「どうした？まさか、今更戦場が怖くなったのか」

「そんなもん、もちろん怖くないさ」

「もう慣れるほど戦場に出て人を殺したからな」

スネークも、かな？

「俺は軍人だが、戦闘狂じゃない」

「そうかい」

（言われなくても普段のお前を見てればわかるさ。争いを嫌い平和的に解決しようとしている普段のお前を見てればな）

にしても袁紹の兵士も可哀相に。まともな将もないのに無理矢理攻めさせられるとは。

「…彼方、彼方、彼方！」

「はっ！」

「大丈夫か？疲れてるんじゃないのか？」

流石にブーツとしすぎていたようだ。
いつもなら逆なものにな。

「大丈夫だよ」

「ならいいんだが」

（珍しいな、彼方がほづけているのは。）

「じゃあ見回りにでも出ますか」

確か今日は俺の番だったはず。

戦の前に警邏の日とは俺もついてないなあ。

「そうか、俺は寝る」

まだ昼だぜというツッコミはしないよくあることだから。

明日は正規軍？との戦争か。どれほどのも見せてもらっぞ

彼から見ればどの軍も雑魚同然なのだが。

（翌日）

「よし第一、第二隊は銃を構えろ」

彼方の合図で一斉に銃が構えられる。

「全班に報告、500まで引き付けろ」

「迫撃砲、EFV共に準備完了」

もちろん、この時代にはない代物なのだが。

「五万かこつちは十万、一気にかたをつけるぞ」

流石にこの兵力差と武器の違いには勝てないだろう。
後はあつちが馬鹿なことをしなければOKだな。

ついに袁紹軍との戦いが始まったのである。

「500まで300。迫撃砲射撃開始」

「発射命令が出たぞ。撃て撃て！」

合図で一斉に放たれる。

「600もういいぞ撃て！」

だだだだだだ

銃弾の雨が降り注ぐ。

「兵力は少ないんじゃないのか」

彼方はこの国の現状が他国に知られるのはまずいと思い、偽情報を流したのだ。

「今は退け、殺されるぞ。がっ」

その瞬間、ライフルの弾が、頭を貫く。

「撃ち方止め！」

「撃ち方止め！」

「撃ち方止め！」

こうして戦闘時間僅か数分。防衛戦は渡辺軍の勝ちで集結した。これを外史で渡辺防衛戦と呼ばれている。

「撤収ー、撤収ー」

「彼方いや寛」

嘘が相変わらず下手というかなんというか。

「久しぶり。龍夜」

「久しぶりだったか？」

「言葉のあやだよ」

「今日は酒でも飲もうぜ」

「どれくらい飲めるか心配だな」

金の心配をした方がいいかもな。

「大丈夫さ。多分な」

「じゃ夜まで寝るか」

しかし袁紹軍が滅んだわけではない。まだ本郷軍のほうに十万の兵士が向かっているのだ。
その対策を考えながら彼方はベットに横たわった。

く第五話く蜀との同盟。現代技術に勝てるもんか。（後書き）

作者は最近だらしねえな。

くPV15000突破記念くじょうじての色々な説明。(前書き)

PV突破もはや関係ない。

くPV15000突破記念くじょうじての色々な説明。

作者『どうも作者です』

彼方『今度は何なんだ？』

作者『ああ、その、とりあえずPV15000突破記念おめでとう
！』

彼方『ごまかすな』

作者『痛い痛い。髪の毛を引っ張らないで』

彼方『どうせ書く事無いと言っただろ』

作者『いやだから今回は日米連合軍の紹介とかその他の色々な紹介
をしようと思って』

彼方『更新速度も遅いしな』

兄貴『ああん最近だらしねえな。ああんだらしねえな』

彼方『確かに』

作者『そ、それではどうぞ！』

にちべいれんごうぐん
日米連合軍

チームとは別の組織。

日本の自衛隊とアメリカ軍を統合したものである。

この統合はアメリカ軍基地の問題を何とかするために実行された。たまにだが チームと合同演習するようだ。

チームには劣るが、かなりの精鋭ということは間違いない。

アニメ
兄貴、別名 森の妖精

だらしねえ作者に気合いを入れてくれる。

筋肉モリモリマツチョマンで強い。

これから度々出て来るに違いない。

彼のおかげで作者は更新することが出来る。

作者（作者と書いてバカと読む。）

ナレーションをやってる年齢不詳の不審者（笑）

見えないのをいいことに棒読みしかも台本を見ながらナレーションしている。

よほどのイジメられ体質なのか漣のS部分を見事に引き出してしまっている。

最近兄貴に気合いを入れられているようだ。

作者『これで終わりです。というか俺の紹介酷くね？』

彼方『いいんじゃない。本当のことだろ』

くPV15000突破記念くじょうじての色々な説明。(後書き)

気合い入れて頑張ります。

く第六話く本郷軍への救援。 零も人間とは言えないよね。 B Y 佐々木彼方。 (前

やってやる！

「第六話」本郷軍への救援。 澤も人間とは言えないよね。 B Y 佐々木彼方。

今は昔ここにある二人がいた。 酒を飲んで、彼方と龍夜である。

「結構飲むじゃねえか」

「龍夜こそ」

二人でこんなことを言っているが、勿論量でいえば、既に90、100リットルは越えている。

そうこの二人酔わない上に、アルコール中毒にもならないのでいつも飲み過ぎてしまうのだ。

飲み過ぎとは常識人から見れば飲み過ぎなんてレベルでないのか。

ついつい朝まで飲んでしまうこともある。

ついでに言うと、二日酔いにはならない。

最悪の飲んべいである。

「久しぶりの酒はいいんだけどさ、この酒高い酒じゃないか」

金大丈夫かな。

「ああ、久しぶりだから、旨い酒を飲みたくてな」

「それにしても結構開けたな」

「まだまだ、この程度じゃ終わらねえぜ」

「最近はやけ物っぽくないように、自重してたのにな」

「気にする必要はないだろ。少なくともお前は尊敬されてるさ」

「だいいけど」

彼方は一応こんなに飲むことはおかしいとわかっているようだ。

「まあしょうがないか、ダチの為だし」

「そうそう特にお前はほんとにたまにしか飲まないんだから」

「そんなにがぶがぶ飲むものじゃないでしょ」

駄目だこりゃ酒に吞まれてる。

朝まで付き合わないといけないなこれだと。

こうして夜が更けて言った。

く次の日く

「本郷軍の状況は？」

「はっ、まあり思わしくない状態です」

そりゃあそうだろうな。

なんせ15万も攻めにいったんだから。

「袁紹が7万、本郷軍が3万です」

「救援に送れる数は？」

「約5万かと」

袁紹軍の兵力おかしくない!?

15万向かったのに7万しかないぞ!

本郷軍どんだけ頑張ってるんだ。

「増援はそれくらいで充分だ。よしすぐに出陣の準備をさせろ」

文官は既に予想していた人のいい主のことだ必ず援軍をだすだろうと。

「スネーク行くぞ」

「ああ。7万か。CQCの練習にはいいな」

スネーク榴弾砲に撃たれても文句言つなよ。

「今のうちにトイレいって」

緊張感のない彼方であつた。

トイレ中〜Now Loading〜

「てめえら、今から本郷軍を助けに行く家の軍の強さ各国に見せ付けてやれ!」

行くぞごらあ!!--と自分の中でもモチベーションを上げる。
じゃないと寝不足の俺に辛い。

「おおおー」

「袁紹なんか一揉みだー!」

「気合い入ってきたな。よしいくぞ進軍だ!」

「おおおー」

相変わらずのハイテンションで本郷軍を助けにいった。
元氣すぎワロタ。

打って変わって、本郷軍。

「朱里戦況は?」

袁紹が攻めてきて色々と急がしそうである。

「今はまだ攻めてくる様子がありませんが」

「なにかあるのか?」

「実は、袁紹軍の増援が3万到着したそうです」

やっぱり袁紹は力押しか。

「いくら烏合の衆とはいえ数が多いか」

「あたしに任せてくれよ。あんなやつら簡単に蹴散らすてみせる」

「翠の言うとおりなのだ」

と話していると、兵士が部屋に入ってくる。

「もっ、申し上げます袁紹軍の援軍、到着を確認その数およそ、5万です」

「15万か」

「流石に厳しいですね」

「伝令、渡辺軍が5万の兵士をひきつれこちらに向かっています」

「増援が」

後何日か持ちこたえられれば増援が来るのか…。

「これで勝てる可能性が大きくなりました」

「流石だな。寛殿」

「もう一暴れするのだー！」

「鈴々の言うとおりだ」

増援が来ると聞いてすぐにテンションが上がってきた本郷軍。単純と言うか何と言うか。まあいいけどな。

彼方軍、もとい渡辺軍はというと。

「テンション上がってきた」

「彼方が壊れた」

「よほど嬉しいことでもあったんだろうな」

進軍中もちろんEFVで。

「後二日三日くらいでつくだろ」

しらんけどな。

「だな」

「ところで袁紹軍の後五万の兵士はどこに行ったんだ？」

「逃げたか、本郷攻めの方に合流したんじゃない？」

実は五万の兵士は荒野をさ迷っていたのだ。

「たぶん今頃困ってるんじゃないか。ここら辺は何もないからな」

「そうか。まあいいか、敵のことなんざ」

《前方に袁紹軍発見数およそ五万どうしますか？》

「殲滅だ」

《了解》

こうして袁紹軍五万と闘ったのだが、結果は言わなくてもわかるだろう。

装甲車に槍なんかきかないただそれだけだ。

「圧倒的じゃないか我が軍は」

「（今日の寛変じゃないか？）」

「（さあ、なにかいいことでもあったんじゃないか）」（変と言うなら、スネークには負けてるが。）

「何か言った？」

「いやゝなにも言っていないよ」

絶対悪口言ってたな。
声が変わってるし。

「そうか」

「中国大陆がこんなに広いとは思わなかったな。メイ・リンの住んでる国が。いい国だ」

（愛国心か。）

愛国心、スネークにとっては思うところも多いだろう。まあ実際彼方はあまり気にしてないようだが。というか、彼方は人生なるようになると思っているのですね感じになるのだろうか。
やるときはやるのだが・・・。

「誰かが俺の悪口を言っているような気がする」

「気のせいだ」（本当のことじゃないのか？）

「別に人生なるようになれって思ったこと一度もないぞ。一応俺なりに、人生設計をたててるんだから」

「明日のか」

む…当たってるけどさ。

「まさか10年後くらいまではな。多分今までと変わらないだろうな」

多分じゃないく間違いなくな。

いや変わってるかもな。いつまでも同じ…なんてことは無いしな。いつかこいつらとも別れることになるのかもな。

彼方に残された道は軍人を続けるか、隠居暮らしをするかしかないのである。彼方は別に浪費癖があるわけでもないの、一般住民よりも安い金額で暮らしている。

なので、死ぬまで楽して生きるのは簡単なのだ。本人がそうしないだけで。

（なんでこんなんが偉いんだろうな。あの国はおかしいとしか言いようがないな。）

「むむむ」

「なにがむむむだ！」

こうして本郷軍の救援に（急いで。）向かったのであった。

その2日後やっとなつた。
ぶちゃっけ高速移動してさっさとくればよかった皆がやたらとゆっくりするもんだから遅れちまったよ。

「見えたぞ」

彼方が拡声器で喋る。

なんで拡声器で喋ってんだろう俺。
無線機使えばよかったぜ。

「全軍につぐ。砲兵隊は砲撃開始。歩兵、戦車隊は射程距離まで袁紹軍に接近、駆逐せよ」

「……サイエッサー!」……」

「てめえら、さっさと準備しろ。遅れた奴は置いていくからな（ぶっちゃけだるい）」

迅速に行動する将兵達。これが チートもとい チームなのだ。

「位置についたなよし歩兵、戦車隊は攻撃開始」

「……よしやあー! チームの強さ見せ付けてやるぜ」……」

「今回の戦は何十分で終わるかね」

（油断は出来ないがな。油断なんてしてる奴はいないだろうな。チームだしな。）

「化け物ね言われても仕方ない気がするが」

「敵さん数は多いな」

「烏合の衆か。突っ込めじゃ、そりゃあ兵士も力を発揮できないわけだ」

スネークの評価もさんざんだな。
一応特殊部隊？の出身だったはず。

「突撃はないよな」

いっぽう袁紹軍はというと。

「まだ倒せませんの！」

袁紹がぎゃあぎゃあ騒ぎ立てる。

「麗羽様こっちが負けてるんですよ」

「なんですって！？早く敵を倒しなさい！！」

「だから負けてるんですってば」

ここの大將はその・・・頭がうまく回らないようだ。

「文ちゃん。麗羽様大変です。曹操が冀州に攻めてきました」

「きくくあのぐるぐる小娘が！そうっとなったら、こんな貧乏軍に

構っている暇はありませんわ」

〈本郷軍〉

「袁紹軍が引いて行ってますね」

「顔色が悪くなったからか？」

「追撃しましょう。ご主人様」

「兵士の皆は大丈夫かな？」

一応寛軍の兵士も戦ってくれてるみたいだから相当楽になった……はず。

「今なら、兵士の疲れも少ないですし、大丈夫です」

「なら俺達の明日のために袁紹軍を追撃だ！」

決断をする迷ってる暇なんか俺には無いんだ。

〈渡辺軍〉

「よし家の軍の勝ちださっさと帰るぞ！」

眠いよお。帰ってさっさと寝よう。

というか遠征車の中で寝ることにしよう。そうしよう。

「……おおー！！（寝よう）（龍夜死ね）（見てこいカルロ！）死亡フラグ」「」

ちょ、龍夜の悪口言ったの誰だ。殺されるぞ。
それと死亡フラグたてた奴誰だよwww。

《あっさりすぎて、言葉が出ないな》

龍夜がその場にいらなくてよかった。
もしいたらその場で開戦だったぜ…ビビるわぁ!!

《まさに呆れて物も言えないって感じだな》

無線機でお話する。

《スネークでも知ってる言葉はあるんだな》

《龍夜には言われたくない》

《なんだと!!》

少なくともお前よりは頭良いよ。

元軍人のS・Kさん(20歳)の意見。

「嫌な予感がするな・・・まあいいか」

↓数時間後↓

《大将、前方に武装した兵士を発見。小此木中佐です》

小此木？誰？……ああ小此木な。

寝ぼけてて何を言っていたのかわからなかった。

「小此木？小此木無事だったか。よしEFVに乗せろ」

一方小此木はと言うと。

「へへ、神様の救いですかね」

もう少しで倒れるところでしたんね。

チームの兵士が下りてきて、小此木にかけよってきた。

「小此木中佐ご苦労様ですお乗りください。他の方も」

「助かった。運がいいな俺達」

「ああ白鷺5」

「よしさつさと乗れ」

「乗ったな。よし行くぞ」

帰ったら銃の改造でもしよう。
いや寝ようかな？

またやらかすきらしい。スネークもさぞかし大変だろう。

「！」

「中佐どうかしましたか？」

兵士が心配そうな顔で見ている（頭大丈夫か？的な意味で）

「いやなんでもない」（彼方、またやるつもりか？わからんがそんな気がする。）

「今回は邪魔させないぞ。スネーーク！」

兵士が言った。

「ただよ（笑）」

（本郷軍）

本郷軍はまさに袁紹が人質をとった城の前にいるところだった。

「街の人によれば、ここの城主は人質をとられていて仕方なく闘っている、か」

「寛さんと呼ぶという方法もあるんですが、それは無理かと」

「どうすれば」

「一刀は悩んでいた。争う理由が無いのだ。相手は人質を取られているだけなのだから。」

「鈴々が、城に忍び込んで人質を助けて来るのだ」

「一人じゃちょっとな。そうだ、二人でいけばいいんじゃないかな。こっちは時間稼ぎをして」

うーん。でも相手に乗ってくれるかなんだよねあー。

とりあえず三国…四国最強の軍師にOKもらったから、「じゃあ愛紗行こうか」

「わかりました」

（城内）

「外で何が起ってるんでしょう？」

まったく彼方の情報を集めていたらこれですよ。まったくもう。

「袁紹がこの城主の娘さんを人質にとったんだ」

「あまりいいこととは言えませんがね」

仕方ありませんその娘さんを救出しましょう。無駄な争いは無い方がいいのですから。

こうゆう考え方は彼方に感化されているのでしょうか。

「この辺りを捜しましょうか」

そう涸はこの町に居たのだ。まあぶっちゃけここに落ちてきたからなんだが。

彼方の情報を集めてたら今の状況になっていた（笑）

その頃侵入した鈴々と星はと言うと。

「で、人質はどこにいるのだ？」

「取り合えずそこら辺を探せばいいのではないか？」

情報が少ない以上予想して、捜すしかないのだ。

「じゃあ早く助けるのだ」

「そうだな、時間も長くはないしな」

その頃、彼方というところ。

本郷の城に到着したのが2日。

帰還したのが30分。どういふことなの……？

「来いよ彼方。改造なんか止めてかかってこい。それとも怖いのか？」

「誰がてめえなんか。てめえなんか怖くねえ！野郎ぶつころっしや——！」

意味不明なことをしていた。

「よくわかりませんが、大将を見つけたらお仕置きしないといけな
い気がします」

流石勘は鋭い。

「あそこですかね」

建物の角から、兵士のいる家を見る。

人質っぽいのはあの子ですかね。

「少し強めて行きますよ。高速移動」

ざっ

「誰だお前は！」

「加減はしません」

刹那、兵士の体が二つに別れる。

少し残酷でしたか？

まあ今更ですがね。

「大丈夫でしたか？」

優しく聞く。

「ひつくひつくふええん。漣おねーちゃん怖かったよー」

「もう大丈夫ですよ」

璃々を抱きしめる。

「じゃあお母さんの所に行きましょうか」

「うん」

「ここなのだー！ってあれもう助けられてるのだ」

元気な子がダイナミックに部屋に入ってきました。
この世界の女性は遅いといつかなんといつか。

「遅かったようだな」

「もう助けましたよ。早くこの子のお母さんの所に連れていきたいのですが」

彼女は基本優しいのだ。基本なのだが。一線を越えれば大変なことになる。滅多にそんなことはないが。

（移動中）

「くっ」

「なかなかやるわね」

黄忠が矢を射って関羽がそれを叩き落とす。その繰り返しであった。

「その一騎打ち待った！」

星の声が響く。

「璃々…？璃々！璃々…！」

「間に合ったようだな」

「あなた達は一体？」

「愛紗無事で良かった」

愛紗の元に駆け寄る。

「ご主人様がこの作戦を提案なさったのだ」

「助けたのは我々ではなく彼女だな」

「澪さん。ありがとうございます」

どうやら知り合いだったらしい。

「いえ、紫苑さんが困っていると聞いたので」

「あのすみませんもしかして日本の方ですか？」

一刀は気になっていたのだ。髪は黒なのだが黒いゴスロリな服を着ていたのだ。

「その通りです。そうですよね大将」

（そこで俺にふるのね）

「確かにね」

「ど、どこから？」

「ちょっとね。澪も随分派手にやらかしたんじゃないか？」

「それほどでもありませんよ」

彼方と一緒にしないでください。

私はまだそこまで化け物になっていませんから。

その場は騒然とする。

「こちらの方は？」

「申し遅れました。一応、彼女の上司の渡辺寛です」

「寛さん。何してるんですか？」

（さん付けかちょっと残念だけでしょうがないね。）

「漣を迎えに来ただけど」

「では先に行ってますね。高速移動」

その場にいる皆は（彼方を除く。）「（・・・）エッ・・？」
啞然としていた。

「じゃあ。俺もこの辺で。神速移動」

「何だっただ」

一刀は心からそう思ったと言った。

く第六話く本郷軍への救援。 澤も人間とは言えないよね。 B Y 佐々木彼方。 (後

書き直すのにかなり時間がかかる。

く第七話く彼方が改造を始めたようです。 重大会議（多分）（前書き）

更新遅くなりましたすいません。

兄「あぁん！？最近だらしいねえな！あぁん！？だらしいねえな！」

はい、だらしいないです。

相変わらずの駄文ですがよろしく願います。

「第七話」彼方が改造を始めたようです。重大会議（多分）

あの人質事件があつた後、俺と澪は城に戻ってきた。

「やつぱり、澪もいたか」

「いましたよ。大将もいい国をつくつてゐるそうですね」

「まあね」

そついや他の連中はどうなったんだろ。

大事なことを忘れてる気がするな。

その時、彼方に電流走る。

改造を忘れていた。

「（きずいたか）」

スネークやはりわかつていたのか。

くそつまさかばれてるとは。

「スネークside」

彼方はやつときずいたみたいだな。

だがきずいたということは何かを行動に移すということだ。
さあどう動く。最初に動くのは多分彼方だ！

「させんぞ！」

俺は彼方の進路を塞ぐ。

ここからだ。大事なのは。

「なら」

彼方はスタングレネードを投げて来るが問題無い。進路を塞ぐだけだ。

「ワンパターンだ！」

「ならもう一回」

スタングレネード10個だと！何をするつもりだ。
スタングレネードが爆発して彼方は姿を消す。
流石にあの音じゃ何も聞こえないな。
くそっ俺もまだまだだな。

「何処に行った」

＼side out＼

＼彼方視点＼

「俺の逃げ方には108の方法があるんだ」

しかしスネークも腕を上げたな。逃走術之三を使うことになるとは思ってもいなかった。

だが、スネークから逃げきったつまり改造やり放題ということだ。

「ふっふっふっはっはっは俺の勝ちだスネーク！」

楽しい改造が終わったのは3時間後だった。

M4カービンを改造した結果がこれだよ！

命名 M4カービン改。

威力 ダイヤモンドを貫通はしないが傷つくくらいの威力。

装填数 50発。

弾丸 スペシャル SPM4カービン弾使用。

軽くとても頑丈。そして壊れにくい。初心者でも安全に使える。
チームに新人の新人はいないが。

オプションパーツ

スコープ8倍率

GP-40（強力な45mmグレネード弾使用。一発。）

サプレッサー装着（消音効果99%）

名前を気にはいけない。

「親友の頼みだから手加減したが次はこうは行かないぜ」

しかしいやな予感がする。あの白服の連中“この”世界について何か知ってるな。

厄介だな、連中妖術使いだ。参ったな。かたずけるのが面倒臭くなるな。

「大将入りますよ?」

「どうぞ」

いつも溼には驚かされる。いつの間にかいて、いつの間にか消える。もう慣れたが。

もし心臓の弱い人が溼に驚いたら確実に心臓停止するね。断言できる。

綺麗で怖いよ特に真っ暗の中で見ると。

「すいません大将呉の使者がこれをと」

呉の使者が？

何の用だろうな？

「どれどれ」

そこにはぶっちゃけると同盟しようということだった。

その同盟につき二人人質を送るという内容だった。省略したぞかなりな。

「了解。人質はいらないと伝えておいてくれ」

全く人質を偵察兵代わりに使うとはこの国大丈夫か？

呉の国の王が変わってから戦が減り民を大事にしていると聞いているのだが。

まあ王と軍師は仲が悪いとも聞いているが。

「世も末かね」

始まったばかりだが。

始まったと言っても地球が生まれたのが約45億年前だったはずな

ら始まったばかりではないか。

西暦なら始まったばかりなんだけどね。

そんなこんなで結局人質は預かることにしました。

もちろんただでは無いが。少し金を貰って、チームに監視させてる。

余計なことをしないようにな。

いやな話になるが下手をすれば内密に“処理”しないとイケなくなるな。

話がずれたな。今は政務中だ。

「終わった」

書類に目を通して判子を押すだけこんなの1秒とかからないさ。

そういえばこの前の耐震強度の話、完璧に直してきた。

不覚にも数時間もかかってしまったのはちょっと残念かな。

「失礼します」

「どうかした？」

「魏と本郷軍が衝突しました」

「戦況は？」

「本郷軍がやや不利ですね」

「増援要請は？」

「今のところは」

漣の話によるとこうだ。

まず魏と本郷軍は城の外で野戦をしていた。しかし魏兵が激しく抵抗し、なかなか城をとれない。

そこに背後の兵粘を魏兵に奪われる。

今なお本郷軍は奮戦中だそうだ。

「報告ご苦労様」

「これが私の仕事ですから。それでは失礼します」

仕事ねえ。俺は軍隊引退したのに酷いよな。また仕事だぜ。引き受けたのは自分だが。

「改造でもしようかな」

改造自重しろ。

だが断る!!!

「ナレーションは黙っている」

す、すみませんでした。

思わぬ邪魔が入ったが、改造はやめぬ。やりたい放題だ！

「！彼方。またやるつもりかさせないぞ」

スネークはものすごい速さで、彼方の部屋に向かった。そのときの様子を チーム兵士のPさんが語っている。「鬼のような形相で戦闘機並に速く走っていた」と。

スネークは彼方関係（改造のみ）に対してはたとえば チーム兵士が
1000人（ チーム兵士1人当たりグリーンベレー兵士5000
0人）行方を塞いだとしても片手で粉碎できる。

「流石スネークですね。化け物です」

ナレーションに話し掛けないで「すみませんでした」

むむむ・・・

漣はそれ（？）を見てふふつと笑った。

全くもう。さてどこまで言っただけ。

「台本です」

どうも。

えーつまりスネークも化け物であり（漣も）大変な人なんです。

「ふふつ、失礼なことを考えましたね。惨殺・全体骨折」

ぎゃああああああああ。

く、悔しいでも感じちゃうビクンビクン。

「敵襲か？」

「どうせまたスネーク中佐が暴れてるんだろう」

一方彼方かというと。

三八式歩兵銃を改造した結果がこれだよ！

命名 三八式歩兵銃改

三八式歩兵銃を改造したもの。

改造によりボルトアクション（一回撃つごとにカチャカチャやらないといけないもの）がセミオートに。

威力 1000メートル先の防弾ヘルメットを貫通する。

装弾数 10発。

有効射程距離1500メートル。

8倍スコープ、三八専用短刀つき。

軽いそして頑丈近接攻撃にも優れる。銃剣（刀）をつけているので槍のように使える。

消音率（99.9%）

弾はSP三八弾を使う。

「今日はこのくらいにしといてやる」

消音率をいつか100パーセントにしてやるぜ。

一方そのころスネークはというと。

「彼方は何処だ！」

「知らん」

一般人に尋問していた。

「嘘を言つな！何処にいるんだ！」

「自分の部屋だよ」

「そうか」

一般人（？）を麻醉銃で眠らせて、彼方の部屋に向かう。

「ぬおおおおお！」

（彼方side）

「ちよつ、何？」

改造し終えて椅子に座った瞬間スネークがいきなり部屋に飛び込んできた（文字通りの意味で。）

「待たせたな！」

この蛇は何言ってるんだ。もしかして頭がパンしたのか（元からだが。）

だつていきなり人の部屋に突っ込んで来てあげくのはて『待たせだな。』はあ？だよ。何決まったみたいな顔してるんだよ頭叩いて直すしかねえか。

「45度の角度で。はあああー!!」

「何をする、やめっぐっ」

スネークにチョップ（コンクリート粉碎レベル）した。もちろん粉碎 玉碎 大喝采しました。

「ぐふっ！がはっ！」

「まだ生きていたのか。かゝめゝはゝめゝ波ー！」

高エネルギーの球をスネークにぶつける。

「ぐわああああ。」

「スネークどうしたんだスネーク、応答してくれスネーク!!!」

）GAME OVER（

＼でんでんでんでててててん／

「やば死んだ？」

「まだ終わってない。ぐふっ」

「さて仕事に戻るか」

「彼も（スネーク）また特別な存在なのだと感じてる、いえ感じました」

「てええええええん／＼」

SE 自重。

「最近家の軍変と言うか、カオスと言うか」

「今更そんなこと言うのか？」

「生きてたの？」

「殺すな」

俺はスネークに悪い悪いと謝って、漑がスネークに頼みたい仕事があるって言ってたぞと言った。

スネークはそうかといって漑の所に向かった。

「スネークも仕事熱心だねえ。漑も龍夜もだけど」

なんか忘れてるんだよね。なんだろう。まあいいか。

「さてまだ仕事残ってたっけ？」

部屋の椅子に座り机の上を見る。

机の上には幸いなことに何もなかった。

「なんだ無いじゃん」

まあ漑とかスネークのな処理能力おかしいからな（彼方の仕事量は

澪やスネークの5倍です。」

「仕事ないなら改造しようかな」

改造はもはや俺の持病だよ。

「はっ！」

（彼方め……これを狙っていたのか！！）

「どうしました？」

「……いやなんでもない」

「ならいいんですけど。それでここはこっちの方がいいと思うんですけど」

「これもいいと思うんだが」

（この借りいつか返すぞ彼方）

1、2、3 来ないスネークは来ない。そうかスネーク仕事か！よろしいならば改造だ。

また改造に3時間もつかっちまった。

俺は改造の事になると他の物がだいたい目に入らないからな。

「こんなもんかな」

三八式歩兵銃改を改造した結果がこれだよ！

命名 三八式突撃銃

威力 2000メートル先の敵の防弾ヘルメットを貫通出来る近距離で撃つと大変なことになる。

装弾数 20発。

オプションパーツ 8倍スコープ（暗視、サーモルに変えられる）つき、三八突撃用銃剣（刀）つき。

とても頑丈で軽いがこれで殴られるとスレッジハンマーで殴られるより痛い。

大抵は気絶する。

力加減を間違えると相手の頭を吹っ飛ばす事になる。

三八突撃用銃剣で斬られると、たとえ女性がやったとしても簡単に首や腕が吹っ飛ぶ。

また三八突撃用銃剣をバラで使うと短刀になるが、むやみに振り回したりしてはいけない。

三八突撃用銃剣は銘刀である。

彼方の改造した銃の共通点は頑丈で軽いという点だ。

彼方の改造したRPG-7ですら2、300gしかない。

頑丈というのはまさに象に踏まれても壊れない程の硬さ。

何の物質で出来ているかは秘密らしい。

弾は三八突撃弾を使う。

ネーミングセンスはほっというて結構気にしてるから。

この銃は突撃銃なので音は普通に出る。

それでも消音は施されている。

ていうか改造しすぎじゃね？

今日で2回目なんだけど（笑）

「こんなもんかな」

そう言つて彼方はかなり満足そうな顔をした。

「相変わらずやってるな！」

「龍夜。仕事は？」

「即行でかたずけたぜ」

「ふーん」

正確な仕事をするからな。

問題無いとは思うけど。

龍夜が耳打ちをしてくる。

「（白服の情報が入った。どうやら本郷軍の情報を魏に漏らしてるらしい）」

マジかよ。

白服仕事しすぎたまには休んだっていいんだぜ。

「（本当か！）」

「（ああ間違いない）」

それが本当だとすると・・・まずいな。
仕事が増えるし。白服の連中死なないかな。
純粹にそう思ったわ。

「直ぐに諜報部隊長、1と澁大佐、スネーク中佐を召集しろ！」

「了解！！」

（忙しくなりそうだ。）

とりあえずみんなに会議室に集まってもらったので本郷軍のことに
ついて話し合おうと思う。

…一応ね。

「先程入った情報によると白服の連中が、本郷軍の情報を魏に漏ら
しているらしい。俺達は今からこれを叩く」

「山狗はいつでも動けますんね」

「特殊部隊いつでも出撃できます」

「申し上げます。本部の設置完了しました」

流石準備が速いな。このスピードは他の軍隊には無いいいところだ。

「よしっ。特殊部隊は本郷軍本陣付近で待機。いつでも動けるよう
にしておけ」

「サーイエツサー！」

「山狗は諜報に専念。魏付近で情報を集めろ！」

「わかりましたんね」

「これより国境警戒レベルを5に引き上げる！」

「「「「「了解！！」「」「」「」

国境警戒レベルはぶっちゃけそのまんまの意味だ。下でだらしねえ作者が説明してくれるそうだ。

く国境警戒レベルとはく

国境警戒レベルとは検問及び警備員の増員、装備に関わることである。

レベル1 普通の状態。

検問一つにつき警備員30人（警棒、ピストル装備。ピストルはコルト45。）

レベル2 検問付近で問題があるとレベル2になる。

警備員は検問一つにつき50人（サブマシンガン、サバイバルナイフ、強化スタンガン装備。サブマシンガンはP-90。）

レベル3 国内で問題が起きるとこのレベルになる。

警備員検問一つにつき80人（アサルトライフル、短刀、強化スタンガン装備。アサルトライフルはM5カービン。）戦車5輜配備（

99式戦車。）

レベル4 隣国で戦争があるとこのレベルになる。

警備員検問一つにつき150人（アサルトライフル、ロケットランチャー、強化スタンガン、対空ミサイル装備。アサルトライフルはM5カービン。ロケットランチャーはSMAW。対空ミサイルはFIM92。）戦車20輜配備（99式戦車。）

戦闘ヘリ20機配備（ブラックホーク。）

レベル5 緊急事態になるとこのレベルになる。

検問は封鎖される（市民が通ることは可能。）

国境はもはや警備員ではなく チーム兵士になる。

説明これくらいでいいか ナレーションはサボリ屋です。

こうして（？）彼方は白服の連中を調べることを口実に本郷軍の本陣に向かったのであった。

「第七話」彼方が改造を始めたようです。 重大会議（多分）（後書き）

更新速度上げれるように頑張ります。

「頑張れ頑張れ出来る出来る絶対出来るやれる気持ちの問題だ！頑張れ頑張れ（ry」

これからもよろしく願います！

く第八話く本郷軍の協力。彼方による本郷領の偵察（食べ歩き。）（前書き）

素晴らしい駄文。

「第八話」本郷軍の協力。彼方による本郷領の偵察（食べ歩き。）

国のことは チームに任せて俺は今、本郷領で食事中だ。

「小籠包追加お願いします」

いや、スネークじゃ無いけどやっぱり食べるという事は大事なな。
中国の食べ物はなかなかうまい。西洋の料理も嫌いじゃないが

「チンジャオロース追加お願いします」

今日くらいたくさん食ってもばちはあたらんだろう。

食べているばかりでは仕事にならないからだるいけどとりあえず白服連中の事を探るか。

「うん？」

「この店どうなつとんのじゃあ！」

「ラーメンに得体の知れないもん入つとたぞ！」

「それ食って気分悪くしてもうたんじゃ！迷惑代ださんかい！」

はあ、何やってんだかあの連中。

この前も警邏のときいたなあんな連中。最近見ないと思つたらこっちに居たのか。

こっちは食事中だつてのによ。とりあえず…

「おいそこのバカ共！」

「だところあ！」

「今なんてぬかしやがった！」

頭が悪くて耳も悪かったら終わってるぜお前ら。

「聞こえなかったのか。バカって言ったんだよ！」

「野郎なめくさりやがってぶち殺したるかい！」

売られた喧嘩は高く買ってやるぜ。

「上等じゃボケが！泣いて謝ってもゆるさんぞ！」

「こっちの台詞じゃ！」

「行くぞところあ！」

さて久しぶりの喧嘩だ。（違います）派手にいこうぜ。

名前が忘れられそうな彼方VS何故かチンピラの格好をしているヤクザ？

ヤクザの風の男がいきなり殴りかってくる。

「えっ？」

おいおいパンチってこんなに遅いもんだったか？
信じられねえ。元の世界でもこれの何10倍は強かったぞ。

「ぐふっ」

元の世界のチンピラより弱いとはなんと嘆かわしい。

パンチ一発かまともな喧嘩になりやしない。俺がいじめてるみたいじゃ無いか。

「おいおい喧嘩売ってきてその程度か？もうちょっと本気でかかってこいよ」

挑発してみるこれに乗ってきて本気を出してくれば少しは強くなるかもな。

「野郎！」

2人のうち1人が殴りかかってくる。そいつの手を掴んでそのままもう1人の方に思いっきり投げる！！

「くそ覚えてやがれ！」

伸びてる2人を放置して逃げる。

「捨てぜりふそれしかないのか？」

にしてもあんなに弱い連中がチンピラとは、世も末だな

「仲間も連れていけよ。最低だなあの兄貴」

とりあえずこの連中は警邏に突き出しておくか。やっぱりこういう連中がいるのは仕方ないことなんだろうな。

と言っても治安の悪さは異常だ。まあ今みたいに携帯や無線機があるわけでもないしな。

「ありがとうね！！あんたいい男だよ！！」

腰をバンバン叩かれる。パワフルなおばちゃんだ。

「いえいえ困ったときはお互い様ですよ」

やっぱ人間助け合って生きて行かないとね。

「本当にありがとね！！」

「いえほんとにいいんですよ。それやりさつき頼んだ小籠包とチンジャオロースをはやく持って来てくれませんか？」

「まかしときな。腕によりをかけて作るよ！」

長生きするだろうな。

「お願いします」

やば昨日筋トレしてて夜中まで寝てたからな眠い。

いくらもうすぐ引退するからって体が鈍ると困るしな。

そのとき1人の女性が数人の兵を引き連れて入って来る。

「ここか喧嘩があつた場所というのは」

「これはこれは関羽様」

「女将」

「先程の事です。喧嘩ではなく私の店を救っていただいたものです」

「そのものは何処に？」

「あちらです」

騒ぎの当人と言うと「眠いぜ……zzz」眠たがっていたというかもう半分寝ていた。

「おい、貴様。先程ここで騒ぎをおこしたそうだな」

「ああ、店から金を奪おうとして嘘ついてた人達のことですか？」

あらあ！？俺誰と話してるんだ？

思考がままならない……p: @「@でw d cいうwぎ! ? / f ヴ
え q ふ え r f q w ……つは!! 危ない危ない。

「そつなのか女将？」

「はい。そこを助けてくれたのがこのお方で」

なんか照れるなそんな言い方されると。

「貴様名前は」

「渡辺、渡辺寛です」

眠いゝ寝たいいつそのこと寝るか。

また意識が飛びそ…うガク

「貴様嘘をつくな！渡辺寛といえど…あー！寛殿！」

うお！なんだスタングレネードでも飛んできたのか？凄い音がしたぞ。

「あー…。関羽さんでしたっけ？」

あつてるよな。

眠くて頭がボーっとするよ。

彼方の睡眠時間は極端に少ないのだが、多量の睡眠をとって次の日睡眠時間が少ないとやたらと眠くなるという意味不明な現象である。

「こんなところで何を？」

流石に先程の愛紗の声が効いたのか意識がはつきりとしてくる。

「すみません。少し寝ぼけていまして」

「そうですか。それでこちらには何をしに来たのですか？」

「いや実は白装束が情報を漏洩しているとの噂を聞き、私の軍で探っていたのです」

「それは本当ですか！」

愛紗さん声でかいですね。眠気が吹っ飛んだぜ。

「確かな情報です。畏の可能性もありますが」

山狗が何か掴んでくれればいいんだがな。

「では早速ご主人様にお伝えせねば。寛殿もよかつたら一緒に来てくださいますか。詳しい事情もお伺いしたいので」

確かに本郷軍の協力は欲しいが、本郷軍から情報が漏洩してるしな。どうしたもんかねえ。

「寛殿！寛殿！」

「ああはい。わかりましたご一緒させてください」

「感謝します」

俺は辺りを見渡し、今の情報を聞いてる奴がいなか確認する。
流石に大丈夫か。

その店にいたとある男は「っち、やはり邪魔だな」と行って去って行った。

そして数10分歩くと城が見えてきた。

「こちらです」

客室に案内される。

まだ耳鳴りしてやがる。どんだけ声でかいんだよ。

「しばらくおまちください」と言い残し部屋からいなくなる。

「中々の城だな。今は曹操としのぎをけずってるのか。大変だな本郷軍も」

そして白服の情報漏洩。内部に裏切り者がいるのか？こいつは少し調査しないといけないな。
面倒なことになりそうだ。

「にしても綺麗な客室だ」

本郷軍の城内が綺麗なのは二人の女性のおかげだ。
彼女達は今日も仕事に励んでいるに違いない。

「失礼します」

そんなこと言っているとメイド服を着た女性が入ってくる。
ていうかこれ絶対一刀の趣味だろ。

まあ一刀も男だからなやっぱり女性には色々な服を着せたいに違いない。

というかよくこの服設計できたな。助平心のおかげか？

「どうぞ」

「どうも」

置かれたお茶を飲む。

お茶なんて言うがこの時代のお茶は相当高い。
だからおいしいと言う分けでもないがこれは入れてる人が上手い、
ということかな。

「どうでしょうか」

「とてもおいしいですよ。このお茶はあなたが入れたのですか？」

「は、はい！あのおいしくなかったでしょうか？」

真面目な子や。

将来いい奥さんになるよ。

「いえいえとてもおいしいですよ。慣れていらっしゃる」

濡なみに入れるの上手いんじゃないかってくらいこのお茶はうまい。
おいしかったせいかな湯のみのお茶はすぐに無くなった。

「おかわりもらえますか？」

「はい只今」

メイド服を着た彼女は微笑みながらお茶を入れる。
少しこぼしそうになりながら入れているが。
思わずその光景に和んでしまう。

「（俺も丸くなったかな）」

小声でボソツと呟く。

「どうぞ」

「ありがとう」

相変わらずお茶は香しい匂いを放っている。
その匂いを楽しみながらお茶をすする。
何杯でもいけそうだ。

「いや本当にいい腕だ。味が変わりませんね」と笑みをうかべ褒めると月は顔を真っ赤にして出て行ってしまう。

「あのちよつと。笑顔はまずかったかな。彼女勘違いしてないといけど」

こういうとき相手がどう思っているかわかるのも辛いもんだな。
時々自分が恨めしくなるよ。顔を見ればだいたいわかるし。
でも乙女心は簡単には読めないな。そこは訓練、練習でなんとかするしかないのかな？

「寛殿準備が整いましたので」

扉をぶつ壊れる勢いで開けながら言う。
ダイナミック 入室すんな。愛紗さんいろいろな意味で自重してくださいお願いします。

「わかりました。案内の方よろしくお願いしますね」

こうして彼女に連れてこられたのがものものしい雰囲気から察して多分会議室だろう。

座っているのは武将、文官だろうな。

さっきも言ったがものものしい雰囲気だ。

一刀もこの雰囲気には耐えられないのか汗をかいている。

つまり俺の持ってきた情報はそれほど重大ということだ。

「それではこれより軍議を始める！今回の案件は特に重要であるから皆心して聞いてほしい」その場の皆はうんと頷く。「それでは寛殿お願いします」

俺に話が振られる。

こんな重い雰囲気で会議なんぞしたくないのだが、仕事だから仕方ないと割りきるしかない。

大人になれば分かるさ言われずともな。

「はい。この情報が入ったのが、3日前。チームの諜報部からの情報で白装束の男達が曹操軍と本郷軍の城の近くで目撃。

その後の調べにより白装束が本郷軍内部の情報を曹操軍に漏らしていることが判明。その情報が入ったのが2日前です」

「確かに今回の戦では敵に我が軍の動きが筒抜けになっていたように感じます。寛さんの情報も信憑性が高いですし、やはり寛さんの軍に協力してもらいたいですね」

「まったく問題ありません。それも協議で確定済みの事項です。本郷軍からの救援要請には無条件で答えることになっておりますので」

無表情で淡々と喋る。

武将の中には拳を握りしめてる人もいるようだ。体が相当震えてるのが分かる。

それほど腹が立ったと言うことなのだろう。

お人好しが多いようだ。俺は好きだけどね。

「我が軍は一応国境付近で待機していますが、どうでしょうか？」その問いに朱里は「寛さんの軍はそのまま調査を続けてください。」

後、直ぐに動けるようにお願いします」と言った。

「わかりました。その旨直ぐに伝えておきます」そう言い終えると無線機を取り出し、《国境付近で待機中の全軍つぐ、いつでも戦えるように準備をしる。司令官は龍夜とする》と言った。

《了解こっちはまかしとけ。白装束の連中も動いてるようだ。そろそろ大きめの戦争が始まるだろうな》

《ふふ大きめの喧嘩になりそうだ。久しぶりに大暴れできそうじゃないか。なあ、龍夜》

《元から大暴れする気だったさ》

《そうかじゃあな切るぞ。こっちは大事な会議中なんでね》

《了解。じゃあな飯ばかり食ってないで仕事しろよ》

バレてたぜ。

大きな戦か、龍夜が言うんだかなりの規模になりそうだ。
10万は降らんかもしれんな。

「それでは私はこれで」

「あ、待ってください。軍議の後にお話があるんですがよりしいでしょうか？」

なん・・・だと。

思わず声を上げるところだった。

機嫌が悪かったら一発殴ってたかもしれない。

「構いませんよ」

聞きたいことねえなんだろうね。どっちにしろ時間はまだあるんだ。ゆっくり話を聞こうじゃないか。

彼方はそう考えながら会議室を出て大きな欠伸をしたのだった。

俺はまた客室に案内されお茶を飲んでいた。

さつき顔を真っ赤にして逃げたメイド服の彼女にお茶を入れてもらってるのだが、空気が重い原因は俺だが。

そんな重い空気の中その静寂を破ったのは彼女だった。

「先ほどはすみませんでした！」と体を90度曲げながら言う。

「いえ先ほどのことは私にも非はありましたし、えっと貴女が気にすることではありませんよ」

この子ほんまに純粹やね。まるでこっちが悪いみたいやないか。

「あのそれでお詫びに真名をお教えしようと思ひまして。あの、そのご迷惑で無かったら」

「いえ迷惑なんてとんでもない。お教えいただけるのなら是非」

真名を教えるとは…いいのかな？後で殺すとかは無だぜ？

「えっと、その月です」

「月、良い真名ですね」

「あ、ありがとうございます」

この子があの董卓とは思えないな。まあ、それは正史の話だが。

「ではおかわりをいただけますか？」

俺はまたお代わりを要求したのであった。

結局会議も相当長かつたらしい。

2、3時間は待たされた。

待ちきれなくて部屋で寝てたが、誰かの足音で目が覚めた。

「（誰だ？巡回の兵か？）」

その足音はとても忙しなかった。

部屋の前を行ったり来たりしているのだ。

やがてその足音は部屋の前でピタツと止まると中に入って来た。

俺はというと椅子の裏に隠れていた。

そしてその人が近づいてきたところで椅子から飛び出し「動くな！」と叫んだ。

もちろん俺の愛銃M1911A1を構えて。

そうしてそこにいたのは白装束だった。

「死ね！」

短刀を持って突っ込んで来る。

「甘いな」

即座に白服の後ろに回り込み、首を叩く。

「うっ」

ばたつと倒れてしまう。

「俺を殺そうってか、もう少しまともなやり方があるだろうに」

ピストルをしまう。

その時扉の向こういや壁の向こうと言った方が正しいな。

「ふっ。覗きとはいいい趣味してやがる」

「必ず貴様を殺してやる。渡辺寛！」

さてお前程度の連中で俺を殺せるのか楽しみだ。

三国志か四国志になつてゐるような気もするが気のせいだろ。

というか気にしたらまずい色々と。

そこに本郷と諸葛亮が入って来る。

「すみません。待たせてしまつて」

「えつとこの人は一体？」

「ああ、私を狙つてきたみたいです」

まあ小手調べのようだな。

気絶はさせたが起きたら舌を噛むか毒でも飲むだろう。

「やはり本格的に動き出しているんでしょうか？」

本格的？まさかこいつらの親玉はもつと強いはずだ。

「みたいだね」

「ところでお話とは？」

さっき飯を食ってないのを思い出したのでさっさと本題に入りたい。
というか何か食いたい。

「えっと、寛さんの軍は呉の事も調べておられますよね。そこで現在の呉の情報もわかる範囲で教えてほしいのですが」

「もちろんお教えしましょう。呉は今のところ平和ですね。本郷軍と曹操軍の戦いも傍観するようです。ただ王と軍師の仲が相当悪いようです。我が軍でも分裂するのではないかという見方がかなり強まっています」

そういうと朱里は顎に手を当て何かを考え始めた。

「あの、すみません俺も質問したいんですけどいいですか？」

「構いませんどうぞおっしゃってください」

「えっと、天の国の出身ですか？」

天の国？あのクソみたいな国のことか？悪いのは市民じゃ無く政治家家さ。

ろくな奴がいないからなあ。昔仕事でよく殺したもんだ。

「貴方の言う天の国が日本ならそうなりますね」

そついうとほつとした顔をした。

「じゃあ、車とか戦車とか警察とかを作ったのも「私です」そうですか…」

「はあ、駄目だ腹減ってんのにこの喋り方は出来ないな」

俺の豹変ぶりに一刀は驚いていたようだが、すぐに戻って来るところ言い出した。

「よかった。さっきの会議みたいな雰囲気はもう嫌だったから」

「あれは酷かった。特に関羽がね、物凄い形相だったしな」

「愛紗は仕事になると鬼と化すから」

本当に鬼と言う言葉がぴったりだね。もしかしたら本物鬼すら裸足で逃げ出すかもな。

おおこわ〜。

「おいおい本人に聞かれてたらボコられる台詞だな」

「たまには言わせてくださいよ。本当に」

「確かに高校生に大守の仕事は大変だよな。俺が一刀だったらくくに旅に出て商売でもやってるよ」

その言葉に一刀は、ははつと笑った。

「そういえば寛さんも大守の仕事回って来ますよね。どうしてるんですか？」

「あんなもの1、2分下手すると数秒で終わるな。それとさんずけは止めてくれ。どうも他人行儀な呼び方は苦手なんだ。仕事ならいいんだけどな」

自分はさん呼びをよくしているがな。

「大変ですねって数秒で仕事終わるんですか！」

「余裕で」

（この人のスペック人間じゃないよな。）

「今、人間じゃないって考えたろ」

「わかるんですか？」

「よく言われるからな。人間じゃないって言葉と考えにやたらと敏感になっただけ」

まさか一刀に言われるとは思わなかったけどな。
やっぱり自重したほうがいいのかな。

2000人一気に斬る奴を人間とは言えないが（笑）やば逃げろ！

「どこへ行く？」

へえあー！

＼デデン／

「ところで彼女はあんなところで何をしてるんだい？」

「さあ何か凄い策でも練ってるんじゃないんすかね・・・さっきのこと突っ込んでいいだ「駄目だ」そうですか・・・」

そう言われた一刀はしゅんとした。

頑張れこれも大人になるために必要なんだ。
いいません。

作者後で殺す！

次回に続く！

「強引に持って行きやがった！」

「もう嫌・・・」

く第八話く本郷軍の協力。彼方による本郷領の偵察（食べ歩き。）（後書き）

きつと特別な存在なのだと感じました（苦笑）

『PV20000突破記念』（前書き）

『作者マジで最近だらないわ（私生活的な意味で。）』

くPV20000突破記念く

『PV20000達成おめでとう!』

『そうだな』

『あれ?なんかテンション低くね』

『朝だからな』

『そうゆう問題なのか?』

『そういうことだ』

『ついに語らなくなった。龍夜さん』

『困ったときに俺を呼ぶのはやめてくれないか』

『疲れるから。まじで』

『まあまあそう言わずに』

『だいたいにして澪はどうしたんだよ。澪は』

『彼女を呼ぶことだけは簡便してください』

『えーどうしようかな』

『頼んます。この通り』

『土下座までするか』

気持ちは痛いほどわかるけどさ。

『そんなこと言えるわけないだろ…』

『言ったら即拷問部屋行きですね』

『雖見沢並に恐ろしいなおい』

『龍夜聞いてくれよ』

『なんだ？』

『勉強オワタ＼（＾Ｏ＾）／』

『即終了かよせめて勉強しようとする意志を見せろよ！』

『嫌です』

『言いきりやがった』

『嫉妬、悪口自分の事ばっか考えてんじえねのか。お前昔を思い出せよ。君の心をピュアだったじゃねえかよ』

『昔、はっ！』え、回想に入るの？』そうだよ俺だって夢を追いかけてた。そうだ今こそ立ち上がらなければ』何にだよ』『そう君は今日から富士山だ！』ありがとう炎の妖精』

『今回もggggだよ』

『いつも通りで安心しました』

『もう驚かねえぞ』

『ではまた来週』
『

くPV20000突破記念く（後書き）

救いは無いんですか!!

く第九話く曹操とドンパチしたかったがまさかの話合い魏本陣が賑やかになった

兄貴「やっぱり作者だらしねえし」

く第九話く曹操とドンパチしたかったがまさかの話合い魏本陣が賑やかになった

結局諸葛亮のO H A N A S H Iは呉の情報が欲しかっただけみたいだ。

そんなんで3時間も待たせられたかと思うと腹がたつ。
あの後一刀と数時間話して今に至る。

「スネーク印のカロリーメイトが無かったら今頃餓死してたな」

このカロリーメイトは改良版軍隊用になっており腹持ちがかなり長くなっている。

一箱で一日は持つが一日二箱以上食べるともれなく下痢になれるらしい。

少なくとも一般人の食べ物ではない。

「うまいけどさ一杯欲しいよな」

でもこれ腹に悪いんだよね（スネーク体験談）
やっぱり見た目に騙されたら駄目なんだろうな。
にしても白装束の連中が何をしたいのか今だに分からん。

そう考えていたせいだろうか。
誰かにぶつかる。

『すいません』と彼方が言うつと、その男は『野郎てめえのせいで新しい服が汚れてしまったやないかい。と言つても今日は機嫌がええからのう、いくらか金出したら見逃したるわ』と言った。

「てめえみたいな野郎にやる金は一銭もねえ！」

「なんやとわれえぶち殺されたいんか！」

ヤクザの拳がかなりのスピードでとんで来るが、それをキャッチして拳を握り潰す。

ヤクザは『ああああ！』と声を出す。

ヤクザの拳を放してやる。

「死ね！」

ヤクザが振り向く。その手にはピストルが握られていた。

ヤクザがピストルの引き金を引く。

ピストルはかちっという音をたてた。

「お探し物はこれかな？」

懐から弾倉を取り出す。

「われえ。上等やないかいそうでないと面白くないからのっ」

「一閃・紅葉斬り」

その瞬間ヤクザは倒れる。

「極道ならそれなりの筋ちゅうもんを通せや」

昔はこんなことはなかったがな。

これも時代の移り変わりか。

変わることは良いんだけどね。

悪くなるのは良くないことだ。

「ま、俺が言えることでもないか」

きつと彼方も大変なのだろう。

今は自宅警備員なのだが。

俗に言うNEETである。

「お前は後で殺すと言ったな。あれは嘘だ」

ちよつ、おま。あつーー！！

逝ったかと思つたよ。

一方その頃。

「呉付近で白装束を確認」

「呉の連中と白装束の連中が接触したと報告があつた。諜報部隊は直ちに現地に向かえ」

これが忙しいときの チームである。
今回はかなり頑張っているようだ。

（こんなに忙しいのはいつぶりでしょうか。大將は何処かに行つて
しますし困りましたね。）

「零！この書類を頼む」

「はいわかりました」

「おい、呉の方はどうなつた？」

「特に動きは無いようです」

「30分事に何かなかったか報告させろ。後魏から目を離すんじゃないぞ」

「了解」

こうごたごたしてはいるが実際に忙しいのは諜報部隊だけである。現地部隊は来たる戦いに向けて準備しているだけである。

その頃の龍夜はと言うと。

「まあ飲めよ」

「いや自分は、もう」

と首を振っている。

「この程度で酔うとはだらしねえな」

龍夜が酒をがぶ飲みしながら言う。

「俺もう駄目だわ」

酒の席にいた数人が、席をたつ。もちろん理由は、ほらあれだ。流石に皆のまえで嘔吐するわけにはいかないだろう？つまりそういうことさ。

龍夜『どうせあと数週間は仕事は無いんだ。だったら酒くらい飲んだってかまわねえよ』と一人でぎゃあぎゃあ騒いでいる。

【何かあったのか？】

【さあ？最近いつもあの調子だ】

【おいお前ら聞こえたらどうするんだ。もう少し小さい声で話せ。ボコボコにされるぞ】

龍夜には色々な名前があるが、喧嘩番長という呼び名もあるらしい。特に酒を飲んだ後はやたらと強くなるらしい。漣に簡単にのされるが。

いつの時代も女は強しと思えないね。

【悪い俺も抜けるわ】

【俺も】

「おい 60が倒れたぞ！メディーク！メディーク！」

「こつちにも倒れてるぞ！」

この戦争のような宴会を第86回鬼酒宴会と チーム内では言われる。

86回というのは今回でこのような宴会が86回目ということである。

兵士はたまったもんじゃないと話す。

そして彼方はいつと。

「ここは何処だ？」

迷っていた。

彼方はここ4時間くらいさ迷い続けていたのだ。

「オラこんな世界嫌だ。オラこんな世界いやだ。元の世界に戻るだーい。元の世界に帰ったならコーヒー飲んで一服つくだーいが！なんてバカなこと言ってる場合じゃねえ。はよ帰らんと溲に殺されてまう」

ざまあwww。

「お前は後で殺すと約束したな。そ、そうだ大将助けて」あれは嘘だ「ぎゃー！」地獄に落ちる作者！

ほぼ逝きかけました。

「お何か見えるぞ。双眼鏡何処にやったけな」

ごそごそとバックバックを探る。

「魏の旗か。て俺は何処をどう歩いてきたんだ？」

自分にツツコミを入れてどうするんだ。

とりあえず逃げるか。

いや待てよここであの連中を殺つたらそこで戦い終了じゃないか。どうせ正史じゃないんだし。暴れるか。

とりあえずこれから餌食になる奴に謝っておくよ。

「今日は容赦しないぜ」

ドンパチタイムだ。

風を切りながら移動する。

かつてない清々しさ。

我ながら興奮しているんだと思う。

同時に人を殺すことに慣れてしまったのだと落胆もする。

くよくよ悩んでもしょうがないとわかっていてもやっぱりそう思っ
ちまう。

「ここか」

ついに魏の陣地まで来た。

さすがに奇襲を仕掛けるのは忍びないので、近くの衛兵に声を掛ける。

「あんた敵が来たぜ。ここにな」

衛兵が銅鑼を鳴らす。

兵士が数10人出てくる。

「第一ラウンドといきますか!」

東北の鬼彼方VS精鋭魏軍

「無殺・一閃斬り」

この時なぜ俺が魏の兵士を殺さなかったと言うと、誰かに見られているからだ。

この戦が長引くと得をするのは呉の連中だけではない、白装束の連中も得をすることになる。

魏と呉を潰せば後は俺の国と一刀の国だけ。

天の御遣いが滅べば後はやりたい放題だからな。

ただ分らないのは連中が何を企んでいるかだ。

つまりだここで魏の兵士を殺すことはあいつらの思いどおりになるということと同じだ。

だから俺は殺さなかった。

いやもちろん無駄な殺生はいけないというのはあるんだけども。

ここまででもそうとう敵を気絶させたはずなのだが何万といやがるこの連中に本郷軍は善戦していたのか？

まああつちは武将がチートだからな。

しょうがないんだが。にしてもそろそろ武将が出てきてもいいはずなんだがなあ。

一行にでてこないな。と思った瞬間網が飛んでくる。

何だこの位なら余裕で避けれると思ったがいいことを思いついたので止めた。

網が俺にかぶさる。

「成功しましたね。姉者」

「調子に乗ってるからこうなるのだ」

調子に乗りやすいのはお前じゃないかと切実に感じたが言わないことにした。斬られるのは痛いしな。

と、いうことで連れてこられたのはあれだな総大将が座ったり寝たりする場所本陣と言えればいいのか。多分そういう場所だ。

体を縄で縛られているがこんなので縛ったとはいえない簡単にはずれるよ。

「貴様あ名前は！」

尋問ですね分かります。

「そうですね。なんと言えばよいか。ああ渡辺軍総大将の渡辺寛と言えはいいのでしょうかね？」

「貴様それが本当ならこのこ敵陣に大将が一人乗り込んで来た事になるだろうが！」

なってるやん現在進行形で。

「姉者落ち着け嘘ではないようだ。目を見れば分かる」

「確かに嘘をついてる目ではないが」

まだ疑ってるな。そら信じがたいけどさ。

「じゃあ貴様は何をしにきたのだ」

「なんとなく」

嘘は言っていないぞ。正しくは迷ってたまたま見つけたただけだが。さすがにこれには飽きたのか姉者と言っていた、察するに妹、もため息をついていた。

「頭だいZ『大丈夫です』最後まで言わせろ」

「で本当の目的は何なのだ寛殿」

「ああ、はい、えっと、その…」

「申し遅れた私は姓は夏侯名は淵字は妙才だ好きに呼んでくれ」

礼儀正しい挨拶をしてくる。

反射的にこれはご丁寧にと返事をしそうになった。
確か夏侯淵と言えば弓の名手だよな。

「いいのか？こんな得体の知れん奴に正体を明かしても？」

「大丈夫だろう。それに第二の天の御遣いを斬つたとなれば民や他
国の評価は落ちるだろうしな」

「むむむ私の名前は姓が夏侯名は惇字は元讓好きに呼べ！」

あまりの自己紹介に『はあ』としか言えなくなる。本当に姉妹かこ
の人達というか自己紹介だけでなぜ赤くなったし。
興奮しすぎだろ。

「姉者はやっぱり世話が焼けるなあ」

そんな満更でもないみたいな顔で言われても困る。
この世界の人達なんか変じゃね？
そんなところが楽しんだけどさ。

「それで秋蘭が言う本当の目的とは何なのだ！」

本当の目的がある前提で話を進めるんですね。いやいいんだけどさ。

「これは軍事機密なのであんまり言いふらさないでくださいね。実は魏つまり夏侯淵さんの国に情報を流してる連中がいるという情報が入りまして。それで調べていたってことですね」

若干違うがこれで濫に怒られないですむだろう。

「というか今の話俺殺されても仕方ない情報を軽々しく言ってしまうたんじゃないか？」

「ヤバいな。いやもうなるようになれだ。やりたい放題やってやる。いつもとやってることは同じよ。」

「そんな情報を簡単にはなしてよかったのか？ 私たちは一応敵なのだぞ」

「敵の敵は味方ってね」

「つまりどういうことだ？」

「ここまでばらしてるのにわからないとかまさかNO U K I N
か！」

確かに偽報とかに真っ先に引っかかりそうだな。

「つまりだ姉者第三勢力がいるということだ」

「呉か」

「おいしいー。いやまあ今の魏からの意見はそれが普通なんだけどね。この姉妹も立ってるのが疲れたのか椅子に座る。」

「俺も椅子に座りてえー。尻が痛い。」

そんな俺を見かねたのか夏侯淵が椅子をすすめてくる。
こりやどうもと言ってどかっと座る。

姉の夏侯惇は『こんな奴に椅子をすすめるなど』とブツブツ言っていたが夏侯淵に『冷静になれ姉者』と言われると静かになった。
ほんと元気だよなこの人。

「しかし呉と寛殿の国は同盟関係のはずだが」

「まあその敵は本郷軍や家の軍だけの敵じゃないってことです。そうですねしいて言えば大陸の、いえこの世界の敵ですかね。目的は何なのかはよく分かりませんが」

「つまり魏と本郷軍の戦闘で消耗したところを呉が突いてさらにその第四勢力が突くと」

すごい解釈だ。さすがは姉の補佐をしているだけはあるな。

「そのとうりなんですが。隣の人は大丈夫ですか？」

見れば夏侯惇が茹でダコになっている。

夏侯淵の話では頭が混乱しているだけらしいがぜったいオーバーヒートしてるぞ。

今触ったら火傷するな間違いなく。

「つまり我が軍も利用されていると？」

「そうなります」

しかしこれほどまでに真摯に受け止めてくれるとは。
てつきりふざけたことを言うなこのたわけ者がと言われて斬られる

かと思つたよ。

やっぱり人間、口があるんだから話さないよね。

武力で何とかなる時代はいつか終わるんだ。

そう考えると夏侯淵は先を見据えているのか？賢い子だ。

「そういえばもう一つ。最近太守が狙われたということは？」

「華琳様が？特にそんな事はなかったが」

「実は今呉、本郷、そして我が軍全てで太守暗殺が未遂に終わっているのです」

そう俺は1回だが一刀は3回だったけかな住民に化けて巧みに近かずき殺そうとするらしい。

俺より本郷を狙ってるのがよくわかる。

つまり本郷はなんらかの鍵を握っているということだ。

「うーん。それが事実だとすれば今の戦いはかなり不毛になるな」

「数10万の兵士を敵、味方だしてますからね。多分不利になりかけた魏に情報を流したんでしょう」

しかし本郷が魏に負けていたとしても情報は流さなかっただろうがな。

つくづくきたねえ連中だ。

そんなところにぼろぼろの魏兵が突っ込んでくる。

「た、大変です。所属不明の軍団が襲撃を掛けてきました」

「本当か」

じゃあまた会おうちゃ

く第九話く曹操とドンパチしたかったがまさかの話合い魏本陣が賑やかになった

彼方「ちよつとこいや」

作者「いやまじすいませんでした。勘弁してください」

彼方「D A M E D A」

筋肉事項です。

くPV25000突破記念く（前書き）

短いです。

〽PV25000突破記念〽

彼『どうも彼方です』

作『作者です』

彼方『今日のゲストはメイトリクス大佐^{シュワちゃん}です』

シ『よろしく頼む』

作『まさか25000を超えるとは・・・意外に皆さんが読んでくれていることに感激です（泣）』

シ『ところでなんで彼方が彼なんだ？彼方にすればスッキリするのに』

作『何となくです』

シ『・・・ふざけやがって！！』

コンボ中

作『私を倒しても第二第三の作者が・・・！』

彼『どこの魔王の台詞だ』

シ『なんでこの小説は駄文なんだ？書かなきゃすつきりするのに』

作『それは酷いwww』

彼『今の生きがいだからじゃない？』

作『まあね。今は目標も無いし、これくらいだよやることは』

シ『勉強はしないのか？』

作『もちろんプロですから（キリッ）』

シ『お前は必ず雇うといったな。あれは、嘘だ』

彼『ざまあねえやWWW』

作『この組合員が！』

？『俺達や農業共同組合のもんだ』

ドカツ、バキ。

作『グフッ』

？『組合なめんなWWW』

？『いたしかない犠牲だ』

作『じゃあこれもこれもいたしかない犠牲だ！！』

？『ちよつとなんだあんだ！！』

くドンパチ中く

シ『小説がドンパチ賑やかになつたろ？』

彼『短いですが今回はここら辺で・・・かたづけもあるので』

『P V 25000突破記念』（後書き）

本編も速く更新できるように頑張ります。

第十話 今回こそドンパチ。白服の連中は口先だけのK A K A S H Iです

更新速度遅くなったなあ。

まあもうすぐテストだししょうがないね。

第十話　今回こそドンパチ。白服の連中は口先だけのK A K A S H Iです

前回は振り返る。

忘れた。

作者が使い物になってないようだ。いつものことだ。気にしないでくれ。

あの後白服の連中が攻めてきたって事で皆表に出て行ったのだが・

・俺の事忘れてるよな。

せめて縄を解いてほしかったぜ。

「そろそろ脱出するか」

俺は力を入れ縄を弾け飛ばす。

「縄を破壊したのはいいとしてこれからどうするかな・・・」

うーんとりあえずさっき魏将につけておいた、盗聴器の様子でも・
・。

《華琳様が！ザー！当なのか！？》

《さっき伝令が言ってたわ》

「くそっノイズが入ってるなこれだから安物は・・・」

華琳というのは一応魏の大將のことだよな？何かあったのか？
とりあえずモールス信号を送っとくか。

（龍夜 side）

「これだから中途半端な前線は嫌なんだよ」

彼方だつてもう少しましな場所に配置してくれればいいのによろ。

「龍夜中佐諜報部隊から連絡が」

なんだ？

78が龍夜に耳打ちをする。

「そりゃあ本当か！？」

「間違いありません」

彼方が行動を起こしたか。

多分滯に怒られないようにしたな。

まあいい。

やっと喧嘩の始まりか。

「よし！現地部隊は今から魏の本陣に向かう。さっさと準備しろ！」

「サーイエッサー！」

白服が一枚噛んでるかもな。

さっさと行くか。

（side out）

これでよし。モールス信号を送ったのはいいんだが何分で来るんだ？
そこを考えていなかった俺＼（ハ－ハ）／ 零に犯られる。

《やはり本郷の助力を仰ぐしか無いだろうな》

《くやしいけど華琳様がいればいくらでも盛り返せるわ！》

やっと聞こえるようになりやがった。

《そうと決まれば本郷と寛殿にも伝えねば》

《問題は通してくれるかね・・・》

ここまで話飛んでたのか？

その後春蘭は正面から堂々と行けばいいのだといったらその案が通ったっていう。

まさかの正論が出たのに驚いたのか、盗聴器越しなのに皆が啞然としているのがよくわかった。

頼みに行くのに堂々としてるのもどうかと思うんだが・・・まあいいか。

「寛殿！」

おおっ・・・結構近くで会議してたんだね。気づかなかったよ。

「手を貸せてことですよね？まあ増援が来るのに数刻はかかるでしょうから期待できるかはわかりませんが」

「感謝します」

感謝ねえ。

「感謝は貴女達の大將を助けだしてからにしてください。それでは行きましようか本郷軍の陣地へ」

こうして俺は本郷軍の陣地に向かうことになったのであった。
にしても嫌な予感がするぜ・・・

〔本郷軍陣地〕

本郷軍の陣地に来たのはいいんだがお話中みたいだから気配を消しておくよ。

あそこにいる姉ちゃんなんか曹操は敵なんだとか騒いでるし。
なんなんだ？彼女のせいで場の空気が重くなってるんだが。

それに反応して貴様あと言っている春蘭もどうかと思う。
あれだな猪だな。

というかこの不毛な口戦はまだ続くのか？

かれこれ30分はこのやり取りが続いてる。

お、本郷が宥めに入った。

そりゃあこのままってわけにもいかないしな。

「翠落ち着いてくれ」

「これが落ち着いていられるかよ！目の前に父の敵がいるんだ！」

「やはり本郷などに頼もうとしたのが間違いだったのだ！」

「・・・はあー」

いつまで続けるんだよ。

思わずため息しちまったよちくしょー。

「寛様何とかしていただけませんか？」

「うわっ！！なんだ関羽さんか。驚かさないでくださいよ」

と、言うとき愛紗はきよとした顔をした。

・・・何なの？俺なにか悪いこと言った？

「顔になにかついてますか？」

「いえ、星が寛様はただ者ではないと言っていたので気づいてらっしゃるのではないかと思います」

星さん歪みねえな。

いや確かに気づいてたけども。

歪みねえなは褒め言葉です。

「特に武器の扱いにたけているわけでもありませんし、統治に少し自信があるくらいですね」

「そうなのですか・・・それでさっきの話なのですが・・・」

すまなさそうな顔をして言う。

俺がただ者云々の話はいいのか。

俺的には言い訳しなくていいからいいんだけどさ。

「わかりました何とかしましょう」

「本当ですか！ありがとうございます！」

こうしてる間にも白服の連中が来てるんだよ。

この連中のせいで兵士が死ぬんだ。

ぶっちゃけ打開策無しだけどねwww

「どちらも落ち着いてください」

「うるさい黙ってる！」

「おい、翠やめろ」

ほう、俺とやろうつてか上等だよ。

「貴様さっからいわせて「やかましいわ！」！？」

この声でその場にいる皆が静かになる。

流石の関羽もびくりしているようだ。

お兄さんも頭にきたよ。

「さっきから黙って聞いてれば、がたがたやかましいんじゃ！！おまえら二人のせいだな、まわりに迷惑がかかってるんだ！！そこを自覚できないのか！！」

「しかしあっちが先に「じゃかしいわ！！」・・・」

「先にあっちからかかってきても冷静さを失ってるようじゃ武将失格じゃないのか？」

その言葉に流石の春蘭も黙る。

「そつちのあんたもだ！あんたのせいで兵士が死ぬんだ！あんたが死ぬわけじゃない！敵はもう目の前に来てるんだ！今はそつちの対策がさきじゃないのか！」

「・・・」

翠は唇を噛み締める。

「この戦だけ我慢しろ！！その後は殺し合いでもなんでもしてろ」と言い捨てて、さっさと陣を出す。

「寛・・・」

増援到着地点に走りながら言う。

「後はどうなるか。それはあいつらが決めることだ」

戦をとるか敵をとるか。

「どつちにしろ俺は暴れるだけだがね」

増援到着地点に龍夜達がいればいいんだが・・・。
とりあえず高速移動をして増援到着地点に向かう。

ここであつてるよな？

さっきつけておいた目印を確認する。

「どこだ？ここら辺にあつたような・・・ああこれだこれだ！」

目印を確認して、近くにいると思われる味方に照明弾で合図を送る。

「かすかに光が・・・彼方からの合図だ！急げ！」

「はっ！！」

そっちはうまくやってくれたよな？彼方。

「こりゃあ増援到着の前に一戦交えないといけないみたいだな」

そっう彼方の前には白服が大量にいたのだ。

やっぱり妖術使いがいるな。

厄介だが、数分耐えればいい。

もしかしたら龍夜の出番をとっちまうかもな。

「かかってきな・・・相手になってやる」

元関東連合二代目組長佐々木彼方VS白服の男達

「天誅！」

俺はきりかかって来た白服をいなして首を掴まえ骨を折る。

「意外に脆いんだな」

周りは既に白服の連中が囲んでいる。
だからといって焦ってはいけない。

こういうときだからこそ冷静でいないといけないのだ。

「とりあえず派手に行きますか!!」

冷静・・・?

どうみてもいかれてるよ。

一瞬なぜか不愉快な気分になったが気にしないでおく。
それがいいんだよ。じゃないとストレスで胃をやられますよ。

「一閃・斬首!」

ネーミングセンスを疑うって?

シンプルイズベストという言葉を知らないのか?

まあいい。

実際俺刀あんまり好きじゃないんだけどなあ。

でもこの数じゃあ銃を使うといってもすぐ弾切れになるしなあ。

「死ねえ!!」

「おつと危ない危ない」

考えごとした結果がこれだよ!!
すぐさま反撃に出る。

「おらぁ！あらよつと」

斬っても斬ってもわいてくるとかもはやボーナスステージだな。
1UP！1UP！！
虚しいわ！！

「最近は・・・岩に隠れとったのか？」

ウホッ・・・いい名言。

やっぱり森の妖精しかないね。
テンション上がったきた！！

「地獄斬り・臓器破裂！」

周囲の白服の心臓がパーンする。

自分で出しておいてなんだけどグロいのう・・・ヤス。

「おい！！俺の分は残してるだろうな？」

「あらぁ！？もう来たのか？もう少しゆっくりでもよかったんたぜ
？」

俺の囲んでいた白服連中を吹き飛ばして龍夜が近づいてくる。

「お前だけにおいしいところ持っていかせれるかよ」

どっちにしろまだいるんだけどね。

「へへ久しぶりのでかい戦だ。彼方！まさか怪我とかしてるんじゃない
ねえだろうな？」

「そう思つか？」

「まさかお前ほどの奴がこいつらにやられる器だとは思ってないさ」

龍夜はニヤツと笑って敵をバツバツサと切り伏せていく。
はぁー・・・手加減してもんを知らないのかね？

「フツ・・・」

俺も笑って敵に向かっていく。

一方その頃兵士達はというと・・・

「迫撃砲準備！！」

「連隊前身！！」

「榴弾砲準備！！装填！！」

忙しそうに走り回ったり弾をつめたりしている。

「一斉に撃てー！！」

轟音が鳴り響く。

砲身から発射された弾が着弾し、白服を吹っ飛ばす。

「命中を確認！！次弾装填撃てー！！」

「おいおい派手にやってるぜ」

「味方に当てずに撃つすごい技術だ」

流石うちの軍隊だ。本当に関心させられるよ。
さっきから敵を斬りまくってる龍夜も少し疲れたのかあまり移動しなくなった。

「龍夜どうした？疲れたのか？」

「少しはしゃぎすぎてな・・・」

ああ現代の戦争じゃあ敵が何10万なんてそうないもんな。
しかし俺達で相当暴れたが、まだまだいるな。

「中村准尉！」

「なにかあったか！」

兵士が報告する。

「西より白服の軍団が約5万接近中です！！」

5万か・・・幸いここは大将達が抑えてくれている。

「よし、砲兵隊の半分と装甲車を向かわせろ！」

「はっ！」

ナカムラゴロウ

中村吾朗 56 歳。

ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争に参加し、一度も負傷をしなかった英雄。

彼は特訓や訓練、実戦などで自分の時間は殆ど無い。

たまに古参の軍人と飲みに行く程度である。

歳をとつてゐるがまだまだ衰えていない。本人いわく「死ぬまで現役」だそうだ。

「砲兵隊射撃やめ！！移動開始！」

「よしこいつを運ぶぞ」

「中村準尉！装甲車位置につきました！」

よし後は砲兵隊だな。

「敵は後どれくらいだ？」

「おそらく後、1 km 程かと」

「装甲車部隊は迎撃準備！！」

（若いのががんばつとるんじゃないまだまだ倒れるわけにはいかん。）

ははは相変わらず頑張つてゐるな。

「龍夜！」

「わかつてるよ。もっと派手に、だろ？」

「そういうこと」

これ以上に派手にやるのか？
いくらなんでもやりすぎじゃないの
そのとき爆発が起こる。

「粉塵爆発くらいな!!」

龍夜さんやりすぎだよ。

「うわっこっちに粉塵が飛んできた」

ダイブ（地面に）して避けた。

間一髪だったぜ。

龍夜間違はなく俺を殺す気だ絶対そうだ。
じゃなきゃこっちまで飛ばすはずが無い。

とりあえず腹がたつたので白服の連中と龍夜をぼこぼこにして龍夜
には止めをさした。

「な、何故？グフツ」

「逝ったか」

龍夜のせいで俺の出番がなかったじゃ無いか。
まったく自重してほしいよまったく…。

「おい!!彼方ってどうかしたのか？」

「なにが？」

「龍y「何が？」……なんでもない」

スネークを威圧感で圧倒する今逆らうと本気で殺っちゃうぞ

「おええええええ」

「汚ねえ。スネーク食いすぎじゃないの？」

「今なんか変な電波を受信した」

あれ？本格的に頭がイカれてきたのかな？
スネークを痛い目で見ろ。

「止めろおおそんな目で俺を見るんじゃない！！」

「だが断る！！」

こうして白服の連中は半分くらい殲滅したのであった。

第十話 今回こそドンパチ。白服の連中は口先だけのK A K A S H Iです

感想あまりきつくない程度にお願いします。
ぜひ参考にさせていただきたいので。

くPV30000突破記念く（前書き）

兄「作者だらしなさすぎる」

彼「作者え……」

くPV30000突破記念く

作「いやあくまさか30000を越えるとは思わなかったよ」

彼「よかったな駄文に目を通してもらえて」

作「一応書き換えもしてるし少しは見やすくなってる…はず？」

彼「俺に聞くな」

作「まあ少しくらい努力はしてるよ」

彼「まあこれからもこの小説を見ている皆の期待に応えられるように頑張れよ」

作「ふ、ふん別にあんたのためにやってあげてる訳じゃないんだからね！」

彼「誰得だよ…気持ち悪い」

作「ああんひどうい…」

彼「だらしねえし…」

兄「だらしねえな」

彼「ところで作者ってどうやってサブタイトルつけてるんだ？」

作「うーんぱっと思いついたやつ」

兄「だらしねえな!？」

ぱん!ぱん!

作「oh!shit!ああ！」

兄「どうや!?挿入つたやろ!？」

作「F C K Y U」

兄「なんだてめえ。へい構わん殺すぞ」

彼「作者ざまあwww」

作「ああー!ー!」

彼「今回はこの辺で(苦笑)」

「P V 3 0 0 0 0 突破記念」(後書き)

彼「安心と信頼の駄文」

く第十一話く白服は弱すぎて話にならない。龍夜はスピード派。(前書き)

更新速度を上げて、クオリティーを下げないように頑張ります。

「第十一話」白服は弱すぎて話にならない。龍夜はスピード派。

前回までの24。

「ふざけるな！！遊びじゃないんだ。こっちには時間がないんだ！」

「……なんか間違ってない？」

そんなことはないよ。

「前は白服をばこってそこから始まるんだ」

知ってるんなら最初からお前が言えよ！

「少し黙ってろ」

すいませ〜ん。ごめんなしゃ〜い（笑）

「血祭りに上げてやる」

や、やめろ！ぐわあ〜〜

今日のテンションなにこれ怖い。

アホの作者は置いとくとして。

あの後白服を片付けて（半分しかも今なお増殖中きめえWWW）

増殖をどうやったら止めることができるかゝを考える。

答えは単純だ。術者を戦闘不能か殺す。これが1番だ。
とりあえず今日の戦闘は終わったので今は陣中で休んでいる。

今は銃の改造ではなく手榴弾の改造をしている。この前すっかり火薬を爆発させたのは秘密だ。

もう少しで澪にばれるところだった。

澪にばれる＝死を意味する。

なんで俺が改造に命をかけるかって？それには訳がある。

昔カスタム銃を見て憧れたから…かな？

その時憧れたやつがスネークだったんだ。

「へつくしゅ。誰か噂してるな」

スネークとは10歳の頃に知り合った。その頃はちょうど2000円札が開発されて俺がヤクザを辞めて（殺し屋は続行）メタルギア？とかいう核兵器を破壊する手伝いをした。

12歳で殺し屋辞めて チームを作った。

実は、澪とは2歳の頃からの知り合い。

澪はもう2歳のとき英語を話してたよ。

こうみてみると俺結構昔からやんちゃやってたんだなあって思う。

そんなこんなでできた手榴弾がこれだ。

命名 SK1（SKは佐々木彼方の略）

爆発範囲 半径20M

爆発範囲がバカみたいに広いので屋内で使ってはいけない。特攻す

るなら話は別だが。

安全装置（ピンを抜いても爆発しないための装置）があるが彼方専用の手榴弾なので安全装置を外して1秒で爆発する。少なくとも人に使うべきではない武器である。

改造止められないぜ。なんでスネークが止めるのかわからん。別に情報が漏れたり武器が盗まれたりすることは無いって。

こいつが漏れたらこの世界で第一次大戦が勃発する間違いなく。結局その日は改造と作戦会議（寝てて聞いてなかったが）をして寝た（地面に）

そして翌日。

「ふあゝゝ良く寝た。地面の方がベッドより落ち着くぜ」

朝俺は普通に目覚めたが、外がやけに騒がしかった。

「朝っぱらから何なんだ？」

テントを出て（隊員の服をきて）近場の兵士に話し掛ける。

「何かあったのか？」

「敵襲です！ 白服が1万の兵力で攻めてきました！」

わお！ 朝から？ ご苦労なこつて。

兵士から聞いた話だと、スネーク、龍夜、中村のじつちゃんが頑張っというか独壇場らしい。

皆チートだからなあ。さつきから宙で兵士が待ってるのが見える。確かに陣の中を櫓から見みると外は騒がしいがほとんどの兵士は

寝てる。

あの騒音の中よく眠れるよ多分夜間の見張りをしてた連中だろうな。
あんなにぐっすり眠れるのは。

「にしても、なんかなあ」

緊張感が無いというのがちょっと…ね。

白服は一応人間型だから血も出るし、臓器もある。

でも人間じゃないからぶつちやけ人体実験とかしてもいいんじゃない？
やりたくないが。

少なくともそこまでやるほど酷い人間になるつもりは無い。

「た〜いしょう〜さん片付きましたよ」

「なんだ龍夜か驚かせないでくれ」

「本当に驚いたのか？」

「いや」

「やっぱりな」

龍夜が急に訪ねてきたが白服の連中は片付いたらしい。
1万を数分で倒すとかwww。
期待を裏切る高スペックだな。

「1%も力を出さなかったが片手で勝てたぜ」

こいつは人間っていう生き物で合ってるんだよね？

こいつと一緒にする。普通の人達並び動物達に失礼だと思うんだが。

「お前失礼なこと考えてるだろ？」

「まさかただ白服の連中もご苦労だなと思ってただけさ」

嘘だけだな。

「どうだが」

「疑ってるなあゝゝ」

「いや別に疑ってはないさ。ただお前が化け物云々のことを考えてたんじゃないのかって思っただけだ」

思いつきり疑ってるだろ。目が嘘をついちよる。

「嘘つきは泥棒の始まりってな」

「お前には言われたくないが」

む、失礼な。

「い」の？」

そう言い放って走って逃げる。

「おい！！待てコラ！！絶対悪い意味だろその言葉」

「まさかそんな訳無いだろ」

「じゃあなんで逃げるんだよ！？しかも言葉に思いつきり悪意がこもってたぞ！！」

「捕まえてみるよ。ま、龍夜にはまず無理な話だけだな」

「許さねえぞ！！」

龍夜から走って逃げる。

龍夜が追いつけるとは到底思えないが最近では龍夜も秒速100mになったからな油断してトロトロ走っていると追いつかれちまうぜ。

「またあの2人やってるんですか。まったくよく毎日飽きもせずにやりますね」

「昔からだろ」

「そうですね。2、3歳の頃からああでしたよ」

「そうなのか」

今日も寛軍は平和のようだ。

「まちやがれ！！」

「誰が待つかつての」

今日の夕飯はなになって考えてた時だった。

普通で走っています。

白服の連中がまわりから沸いてきたのだ。

「またこいつらかよ」

「どうやら白服の連中に持てちまっ たみたいだ」

「よかったじゃ無いか。なあ――！賭けをしようぜ」

「いいが何を賭けるんだ？」

「だいたい予想はつくんだが。」

「こいつらを多く倒したほうが勝ちそれでどうだ！」

「乗った――！んで？何を賭けるんだ？」

何を賭けるかによって俺のやる気度が変わるんだぜ？
たとえば今夜の飯とか。

「今日の夕食でどうだ――！」

「OK――！それでいこう」

ヒヤッハー今日はいつもより多く食えるぜ――！！

ぶっちゃけステーキはいつでも食べられるんだけどね。

でも毎日食ってたらありがたみが無いだろ？それに動物も大変だしな。

こうみえても結構命を大事にするやつなんだぞ？
そつと決まればさっさと片づけるか。

もちろん殺すよ？

まあ生物かわからないから殺すよりも破壊するの方が正しいのかもな。

「もたもたしてると俺が勝っちゃうぜ！」

龍夜が調子のとってるね。良くないね。

「おっと」

手元が狂って龍夜に撃っちゃった、というのは嘘で完璧に狙って撃ちました。

「あぶねえじゃねえか！」

「ちっ外したか・・・ごめん間違えた」

「今ちつて言っただろ！」

「マサカソンナコトアルワケナイジャナイカ」

間違えて片言で喋ってしまった。恥ずいぜ。
つまりわざとてことだ。ざまあwww。

「腹がたつぜ」

「？に何言ってもわからないだろうけど」

「殴っていいか？むしろ殴らせる本気で」

「おお恐い恐い」

白服の連中を倒すことが目標なのに俺の挑発にのるとはね。

余裕、余裕。

「龍夜、手がお留守になってるぜ」

「そいつは悪かったな」

龍夜が敵を切り刻んでいく。

龍夜の剣術は我流なのだがパワーよりはスピード、と言った感じだ。俺も我流だがスピードよりはパワーで押す。

いわゆるこり押しだ。

もともと現代でナイフは使っても刀や検なんてものは使わない。

わかるだろ？刀持って突っ込んだら、機関銃に掃除されるそれだけの話さ。

「彼方！動きが鈍いぜ疲れたのか？」

「いやすこし考えごとをしてただけさ」

帰ったら軽機関銃を改造して装填数を上げまくろっそうすれば白服相手でも銃を使える。

そっしょう、じゃないとこの世界で銃が使えん。

「これで終わりだ！」

どうやら龍夜が最後の1人をやったまいた。

「どっちが勝った！」

何なんだろう今日の龍夜のテンションやばいな。

「984と973で俺の勝ちだ」

「彼方の・・・勝ち？」

信じられないといった顔で俺を見てる。

こっちみんなと言いたくなるような顔だったぜ。

「今夜の晩飯は俺のだな」

「次は負けねえ！」

と言って陣の方に走り去ってしまった。

「俺も帰るか」

ゆっくりと陣の方に歩きだす。

たまにはゆっくりしたっていいだろ？急ぎすぎるのは現代人、いや日本人の悪い癖だ。

まあ辺りは殺風景で何も無いけどね。

装備も刀とピストルしか持ってない。

流石に軽機関銃とかアサルトライフル、スナイパーライフルを常に持つてるのはちょっとな。

今はアサルトライフルとスナイパーライフルを組み合わせたような銃を開発している。

室内でも使いやすく、近中遠距離全てに対応できる頑丈で軽いつまりオールマイティな完璧な銃を作ろうとしている。

世の中に0%と100%は無いと言うが誰が決めたのか教えてほしい。

頑張ってもできないものはあるし、頑張らなくても出来ることも世の中にはあるはずだ。

世の中には0も100もあるのさ。

ただ、0を100にするのも、100を0にするのもそいつしだいさ。

もしかして明日目覚めたら、違う世界にいた。

なんてこともありうるだろうし、もしかしたら明日起きたときにはもう死んでるかもしれないだろ？

全ての可能性は否定できると同時に否定できない・・・つまり矛盾だ。

物事はいや特に人の理論は矛盾のオンパレードさ。

平和にすると言いつつも戦争で人を殺す。

そして戦争で憎しみは憎しみを生み負の連鎖を起す。

何が言いたかった？ようは人間は矛盾だらけの生き物ってことさ。だからこそ無限の可能性があるのかもな。

とりあえず今はこんなことを考えるのはやめにする。

気付けばもう夕方だ。

陣につくころには暖かい食事が待ってる。

漣の手料理はうまいことこの上ないからな。

兵士の連中も待ち遠しいだろう。

この後陣に帰ったら龍夜がやけ酒をしていたのはまた別の話。

翌日、今日は昨日と違って騒がしくない朝を迎えることが出来た。

「朝日が気持ちいい」

欠伸と背伸びをしながらまだ少し眠い頭を起こす。

「大将」

澪が急に話し掛けてきた。

気付いてはいるけど背後から話し掛けるのは止めてほしい。

「どうかしたの？」

「大将先程白服の軍団が発見されたのですが、その中に魏の大將が確認されました」

そーなのかー・・・ってえ？マジですか！

「魏の将と本郷軍に連絡は？」

「すでにとりました」

対応ナイスです。

そーいうことで早速作戦会議を開くことになった。

く第十一話く白服は弱すぎて話にならない。龍夜はスピード派。(後書き)

今回の彼方の考え方は意味不明でしたね。

ぶっちゃけ自分自身何を書いてるのか全くわからない状態でした。

く第十二話く龍夜最近だらしねえ……。零、恐いでしょう……？（前書き）

文才が無いってつらいな……サム。

「第十二話」龍夜最近だらしねえ……。零、恐いでしょう……？

結局会議では軽機関銃を持たせた第6連隊（男しかない部隊）を使うことになった。

実はこれくじで決めている。

なので会議では違う意味で緊張している。

どの連隊になっても俺が出陣するのは変わらないんだけどね。

そりゃあ俺大将だし一応軍のトップだからね。

よくそうは見えないって言われるけどちよつとどころか相当シヨツクだ。

まあ当たってるから反論出来ないのはしょうがないね（泣）

で、大事なのはいつやるの？ってことなんだがそこは相手の出方を伺うそうだ。

それまで暇だよなと考えるつつも最近自分も昔みたいにやんちゃしなくなつたよなとも考えていた。

やっぱり軍を辞めたためだろうか？軍を辞めてから調子がいいんだよなあ。俺に軍人とかヤクザは向いてないのかなあ？

ちよつと残念なそうでないような。まあ軍人に向いててもあまり嬉しくないけどね。

さつさと軍隊辞めてよかったよ。すつきりしたぜwww

「大将！」

兵士に話しかけられる。何のご用事かな？

「なんだい？」

「いえ、その、龍夜中佐が……」

ぼそぼそと耳打ちしてくる。

「はぁ、わかった止めてくるよ」

「ありがとうございます!!」

龍夜が昨日俺に負けてその腹いせに暴れてるらしい。

龍夜最近だらしねえな。この前も酒飲んで暴れてたらしいし。なんで酔わないのに悪酔いしてるんだ？

気分なのかー？どっちにしるだらしないので制裁してくる。

〔移動中〕

「昨日の戦いは俺が勝つたのによゝぶざけてるぜ!」

あゝダメだこりゃただの酔っ払いに成り下がってやがる。

「龍夜!死ね」

「!?!」

辺り一体に覇気を漂わせる。

今回は少しやりすぎだと思っただじゃあな。

「ちよつ、待って「存在その物を消し飛ばす!!秘剣・零!!」ア
ッーーーー!!」

「今度から気をつけろよ・・・龍夜」

半径500m程荒野になってるがもともとそうだったから問題ないね。

さて雑巾になってる龍夜は放つといて漣のところに行くとするか。漣がいるところまでジープで行くことにする。

道がボコボコしてるから走ると転ぶんだよね。

こんな時に限って故障するんだよね直すより走った方が速いんだけどさ、ジープ捨てるわけにいかないし。

「どうしよかな陣までもう少しだし運ぶか・・・よいしょと結構軽いな」

ジープを片手で持ってるんだが紙みたいな重さだな。これなら一円玉の方が重いぜ。

結局そのままジープを陣まで持っていった。

「ちょっといいかい？」

「はいなんでしょうか？」

「こいつの修理を頼むよ」

持っていたジープを地面にそつと下ろす。

「了解しましたでは」

「頼むよ」

さてジープも運んだし漣に会いに行くかなんて考えていると。

「あら大将帰ってきてたんですか？」

「いやさつききたところなんだ」

本人の登場だ。都合よく会えるとは思っていなかった。

「零第6連隊のことなんだけど・・・」

「確か全員に軽機関銃を装備させるんですよね？」

「そのとおりなんだけどさ、やっぱり装甲車も出したほうがいいんじゃないかなあ？と思ってさ」

大丈夫だとは思っけどさ念のため、ね。

少なくとも チームの連中が白服の連中に負けるとは思えない。
なにせ巷じゃあ最強の軍隊だからな。

チーム隊員のタフさは世界一さ、少なくとも人間という種族に入
れていいのか怪しいところである。剣ごときじゃあ死なないし、矢
は刺さらない。車に跳ねられたら車がへこんで、50口径の機関銃
をくらって無傷。

こんなの人間じゃないわ！ただの化け物よ！

だったら人間らしくすればいいだろ！っていうことになるんだよね。

多分この世で1番か2番に硬いんじゃないか？

やっぱり類は友を呼ぶのか？

俺の親友、知り合い、まともなのってせいぜいジミー（アメリカの

大統領で彼方の親友) くらいだよな。

漚、スネーク、龍夜は当然おかしい部類に入るだろ？あ、俺もか。

悲しいことながら漚レベルの化け物になると、銃弾、車、剣、あたるだけで全部壊れるんだよね。

つまりこういうこと。

硬さ順

一般人<乗用車<トラック<装甲車< チーム隊員<龍夜<スネーク<漚<俺 なんだよな。

この結果を見て自重しようとした心の底から思って、軍隊辞めました。結局働かせられてるけどね。

でも辞めたおかげか、ゆっくり出来るようになったね。

筋トレとかも毎日欠かさずやってるから太らないで今の体型維持できるけど、止めたら太るんだろうな・・・。

運動しないのに食って太らないなんて都合のいい体系の奴はまずいないと思う。

そういう奴って太ると痩せにくいらしいし。

そんなことを考えながら軽機関銃の装弾数を増やすために改造していた。

命名 S 2 4 9

威力 白服を5人貫通するくらい(200m)

装弾数 400発

重量 1kg

オプションパーツ 4倍率スコープ、サプレッサー(連射するなら
つけないほうがいい)

白服相手に普通のアサルトライフルを使うとすぐに弾が無くなって
しまったため、装弾数と貫通力を高めた銃。

フルオート時の反動が少なく取り回しやすい軽機関銃である。

地面に固定して使えばスナイパーライフルみたいな使い方もできる。
ただ、サプレッサーを装着して使うとサプレッサーがすぐにイカレ
てしまうので気をつけよう。

安定した銃弱点という弱点は無い。

「これなら对白服で使えるな」

俺は近くにあった椅子について一息つくことにした。

根の詰めすぎは良くないしね。

はあーお茶でも飲みたいなあ。

ウホッいいところに水差しがあった。

これでも飲むか。

その水差しに入っている液体をぐいーと飲む。

「・・・毒だなこれは」

まずくは無いが、体に良いもんじやあるまい。
ちなみに毒なんてものは効かない。
味はピリツとしてたね。

喉はあんまり潤わなかったが。

「白服の連中ついに毒を入れるようになってきたか」

毒がきかないのは過酷な訓練のおかげだ君達は真似しちゃいけないぞ！

そういえば毒を使う殺し屋っているのかな？

昔はいたみたいだけど最近は聞かないなあ・・・。

ついでに俺が殺し屋だったときはスナイパーライフルとか、爆弾とかよく使ってたな。後ナイフもよく使ってた。

なるべく関係無い奴は巻き込まないようにするのが俺のやり方。

まあ同業の連中にはよく甘いと言われてたが。

そういうこともあって殺し屋は辞めた。そして軍隊も辞める。

この世界から帰ったら家で普通に暮らすんだ・・・って死亡フラグたてちまったな。

「懐かしいなあ・・・」

いつの間にか20歳だもんな。光陰矢のごとしとまさにこのことだな。

少し前まで違う世界にいたとは思えないな。

現在進行形でまた違う世界に来てるが。

とにかくそんなことばかり考えていたらもう夕方になっていた。
こっちにきてから時間の進み方がやたらと速いような気がする。気のせいかな？

「大将、ご飯ですよ」

「はいはい今行く」

まあいいさ今はこの世界で生き残ることを考えようじゃないの。いやこの世界で暴れることをの方が正しいかな？

「大将？速くしてください冷めちゃいますよ？」

「そう急かさないでよ・・・」

まあ冷めた料理は食べたくないしさっさと行きますか。

溲の料理は美味しかったけど隣で蛇を食ってるスネークのせいでちよつと気持ち悪くなったのは言うまでもない。

共食い云々の前に人の隣で堂々と蛇を食べるのはご遠慮願いたい。スネークだから注意しようが無いんだけどさ。

「寒いなコートでも羽織るか・・・」

周りに障害物が無いため風が吹くとかかなり寒い。

しかもそんなに日に限って見張り番という残念なことになってしまっている。

「寒いなあ、ココアでも飲みたいぜ・・・」

まあ雪国住んでたからこれくらいはまともな方だと思う。

ロシアとか寒いレベルじゃ済まされないしね。

氷点下2、3 ならまだしも30 とかね凍るね。

もうね寒くて感覚が麻痺して逆に暖かく感じるね。

まあこれは錯覚とでも言うべきだろうか。

ハバネロを生で食べるかなんて馬鹿なことを考えていると漣がこっちに歩いてくるのが見えた。

「やあ漣どうしたの？」

「大将のために暖かいココアを持ってきてあげたんですよ」

「どうも」

漣からココアを受け取って暖かいというか熱いココアを一口飲む。

「どうですか？」

「普通に美味しいけど？」

「それならいいんです。じゃあ見張り頑張ってくださいね」

漣ココアになんか入れたんじゃないだろうな？

そんなわけないか特に何も入ってない感じだし。砂糖は入ってるかもしれないが。

まあそんなこんなで厳しい見張りをおえたわけだが眠いね。うん。

寒いことより寝ないように耐える方が辛かった。

寝たら次の日漣に覚めることのない眠りにつかされる。

しかもじつくりとね……。

「よお寛！」 危うく覚めることのない眠りにつかされそうになった人

「龍夜速いな」

「俺も昨日見張り番でな。危うく寝るところだったぜ」

「危ないな」

「ああ、あのときのことを思い出しただけで目が覚めたぜ・・・」

龍夜はその地獄を1度ではなく2度味わっている。

3度目は無いだろうな。

まあ流石に龍夜も意識はしてるみたいだが、それでもやらかしそうな気がしてならない。

龍夜だし。

ていうか昨日の事はノータッチですか。

龍夜は酒を取り出し飲みだした。

「おいおい何処から持ってきたんだその酒」

「店から買ってきたやつだよ。今日はこれ飲んで寝る」

「そうですか。まあ飲みすぎてまた暴れないようにな」

酔わないのに暴れるんだからたまったもんじゃない。

昨日みたいなことがまたあると洩が出勤する可能性があるんだよな。いやまあ自業自得なんだけどね。

それでも龍夜は俺の戦友の数少ない生き残りだからフォローはするけど。

でもあんまり度が過ぎるようなら洩のいけにえになってもらおう。

その時の俺は忘れていた魏の大將が操られていたことを。

く第十二話く龍夜最近だらしねえ……。零、恐いでしょう……。？（後書き）

更新速度を超速！？にしたい今日この頃。

↳第十三話↳魏の大將をダイナミック救出。(前書き)

作「救いはないんですか!?!」

カズヤ「救いは無いね!?!」

第十三話　魏の大將をダイナミック救出

「龍夜」

今思った魏の大將のことをすっかり忘れていた。

「なんだ？」

「いや、魏の大將ってどうなってたっけ？」

「澪かスネークに聞いてくれないか。そこら辺の話は」

むむむ・・・アツサリと言われてしまった。

一応龍夜も偉い方なんだからそれくらいは知っておいてほしいよ。
まあ俺も知らなかったから人の事は言えないけど。
しょうがない澪に聞いてこようか。

俺が忘れることはよくあることだ。やっぱり大事なことじゃないと
思ってるのか？

作戦とかよく忘れるしやっぱり俺は軍人に向いてなかったのかもな。
そんなこと気にしないけどね。この世界が終わったら同時に軍隊時
代も終わるんだから。

さてとそろそろ本格的に魏の大將を救うとしますかね。

作戦内容はこうだ。

まずは第6連隊を前進させ、白服と接触させる。
その間に俺が突っ込んで大將を救う。

簡単なことだ。しかし聞く人によっては自殺行為とも取れるが。何10万の軍団に1人で突っ込むことになるからな。まあ大軍を相手にしても勝てる自身はある。相手は人間では無く傀儡だからな。容赦なく斬れる。人間でも容赦なく斬るが。

「零!!」

零を呼ぶ。

「なんでしょうか？」

「そろそろ準備しよう」

「わかりました。伝えてきます」

零が目の前からスッと消える。

これも慣れた光景だ。まず自分がそうだったしな。とりあえずこの前開発した手榴弾を10個持っていく。念のため改造した機関銃も持っていくが。

「弾倉も10、いや20持つていくか」

念には念を入れてな。

400×20＝8000か。

今度また改造して装弾数を増やそう。

これから白服が敵になるなら軽くて尚且つ装弾数が多く威力がある銃が必要になる。

今度はこちらの技術部と話し合ってみるか。

「大将、準備完了です」

「よっしゃ、じゃあ行きますか」

「頑張ってくださいね。私は後方支援ですから」

「死にはしないさ」

死にたくても死ねないと言った方が正しいだろうか。

俺は神様なんて信じてないし尊敬もしてない。

この世界に本当に神様がいるなら俺は神様を殺すね。

神様がいなきや紛争なんかもなかったかもしれないだろ？

まあ戦争をするのは人間が愚かだからなんだろうけどさ。

そんなこんなで白服がいるところまできたわけだが。

「なんじゃこりゃあ」

櫓から見えるだけでも相当な数がいるぞ。

これにジープで突っ込むのか。ジープが持たないだろこれは。

やっぱり戦車だしてもらおうかなあ……。

「これみたら流石に自信がなくなってくるぜ」

もともと魏、本郷軍合同でやるはずだったんだが、犠牲は1人も出したくないのでうちの軍だけで頑張ることにした。

白服の対処にも慣れてきたみたいだしな。

「おいおい寛大丈夫か？ジープで」

「大丈夫だろ。多分な」

「まあ死にはしないだろうがよ」

「そこまでやわじゃないさ」

「まあ頑張れよ」

龍夜はそう言って酒を取り出し飲む。

「うめえー！！生き返るぜ」

「あんまり飲むなよ」

あいつの酒好きにも困ったもんだ。
まあ酔わないから高い水みたいな物だな。
胃に穴でも空けばいいのに。

なんて物騒なことを考えたりする。

「動き出したか」

大きな声や足音が聞こえる。
うちの軍隊が行動を開始したのだろう。

「さてと行きますか！」

ジープのエンジンをかける。

「この相棒と一緒に帰ってこれればいいが・・・」

俺が使った車は100%の確率で爆発する。
なんでかって？紛争地帯に行けば嫌でもわかるさ。
日本にいれば平和すぎてビックリするね。

「どばすぜ！」

もちろんこの時代だ。コンクリートで覆われた道路なんかありやしない。

言ってみれば悪路だ。

走っているとジャンプしたり横転したりしそうになる。

まあスピードを出し過ぎてることも原因なのだが。

あまりに酷い道で少し酔いそうになる。

「贅沢は言えないが、やっぱり気持ち悪いな」

そんなこんなで白服軍団の近くについた。

双眼鏡を取り出し遠くを見る。裸眼で遠くを見ることもできるのだが、目が異常なほど疲れるので素直に双眼鏡を使うことにした。

「これまた多いなあ」

すごく・・・ごちゃごちゃしてます。

まさしく見る人がゴミのようだ！！状態だね。これは。

あれに突っ込むのか主にジープが心配だ。

まあ白服をはねたくらいじゃたいしたことはないだろうが。

多分そこらの戦車より固いんじゃないかな？

普通の人間がRPG-7を喰らって生きてると思えないが。

「じゃあ行きますか！」

アクセル全開で白服集団に突っ込む。

ぐしゃぐしゃと明らかに何かが潰れている音がする。

グロいグロい。

「かあゝこりゃあ車が持ちそうにないぜ」

魏の大將が乗った（乗せられてる）神輿にはまだまだといったところか。

目測で1kmはあるかな？

まあすぐにつきそうだがいかんせんさつきから肉片と血が邪魔で邪魔で仕方ない。

「どけどけ肉の塊になりたいのか！！ヒヤッハー！！」

テンション上がってきた ！！

とことん邪魔な連中だ！！

「後500！」

なんとかもちそうだ。

ガタガタいつてるが大丈夫か？

「ラストスパート！！」

神輿の手前にジープを止めて機関銃を的確に白服にぶち込む。

魏の大將・・・名前は何て言ったかな？まあいい。

そいつをジープに乗せていざ発車！！

「ん？動け！動けってんだよ！！」

と叩いてみても破損が激しくなるばかりでいっこうにエンジンがかかる気配は無い。

俺のせいかなあ？

「やっぱり装甲車にすればよかった」

そんな後悔もする間もなく白服が群がってくる。

「少しは感傷に浸らせてくれよ！」

機関銃でぶん殴る。

その攻撃で4、5人吹っ飛んでいく。

くそっ！！機関銃に銃剣でも付けとくんだったぜ。

これじゃあすぐ機関銃が壊れちまう。

「魏の大將を担ぎながら合流するのはきついな・・・」

どこか抜けれそうなところは無いかと探すがもちろんそんな場所はないらしい。

やむおえないので先日開発した手榴弾を使う。

ピンを抜き思いっきり白服に投げる。

手榴弾が白服を貫通して飛んで行ってるが気にしない。

でかい爆発音が辺りに響く。まるで屋内にいるかのように。

「こりゃあつるさすぎてかなわんわ」

耳がアッー！ー！！

まだ耳鳴りがするぜ。

まあそれはいいとして今の手榴弾でポカンと穴が開いたところに突っ込む。

「どけ！！おらあ！」

機関銃を振り回して手榴弾を4個お見舞いしてやる。

相当な数が吹っ飛んだみたいだ。炭しか残っていない。

自分で開発した手榴弾だが改めて恐ろしいと思った一瞬であった。

「うおおおおお！！！」

雄叫びを上げながら少なくとも常人の限界を越えたスピードで走る。つまり白服を突っ張りしながら走っているわけだ。

第三者からみたらものすごい光景だろう。

第三者は回りにいっぱいいるが。

テッレターテという音楽が頭の中で再生された。

・・・なんてだろうな。

こんな世紀末に流れそうな曲が選ばれるとは俺の頭が世紀末かもな。

「天誅！！！」

「危ない危ない危ない・・・」

この連中なんなの？本当に嫌になるんだけど。

全く・・・この世界程やばい三国志は無いだろうよ（フラグ）

フラグってなんなの？もう一回別の世界に行くの？作者馬鹿なの？

死ぬの？

作者は言っている。『そこまで言われる筋合いはない』と。

どこのエルシャダイだよまったく・・・。

作者は後でキルするとしてさきにこいつらを片付けないうと。

あまりにもたかかってくるもんだからゾンビにしか見えなくなってきた。

Ｔ－ウィルス・・・なんて架空のお話だけどさ。

実際にあつたら大変どころじゃないし。

「そろそろ・・・もう少しか」

穴の開いた地面が見えてくる。

多分迫撃砲の着弾点だろう。

「死ねえ！！」

「どすこい！！」

突っ張りで押し出す。

RIKISHI舐めんなよ。

こうしてどんどん突っ張りで敵を吹き飛ばし味方に合流することができた。

突っ張り強いな。今度からこれ主体に戦おうかな？

突っ張り、投げ技があれば丸腰でも勝てる。

「ただいま」

え？軽いつて？いつもこんな感じだよ。

「お帰りなさい。あ・な・た」

「漣・・・大丈夫？」

素でこの言葉が出たけど今現在後悔してるぜ。

「酷いことを言いますね。乙女心を弄んで楽しいですか？」

乙女心云々の前にそれは流石にないと思っただぜ・・・。

告白するにしてももう少しムードを考えようよ。

すると漣はムツとした表情になった。

「ムードなんて言葉大将ご存知だったんですね」

流石に考えを読まれてたらしい。

しかしこんな安い挑発に乗るほど、馬鹿じゃないんでね。
そこは普通に返す。

「知らない奴の方が少ないと思うぞ」

「そうですね。冗談はここまでにしてつづいたんですね？」

どうだったんですか？と聞かれてもどう答えればいいのやら。
少し悩んでこう答えることにした。

「とりあえず魏の大将は助けたよ。ジープが大破したけど」

「その魏の大将は何処ですか？」

「あ・・・」

さっきまで抱えてたはずなのになあ。
どこに置いてきたんだろ？

「ちょっと捜してきます」

「いつてらっしゃい・・・ふう、大将も大事なところで抜けてらっしゃるんだから」

そういうことで魏の大將を搜索することになったのだが、如何せん白服が多すぎて倒れてる目標を捜し出すのがそうとう困難というね。

「どうしたもんかねえ」

「困ってるみたいだな」

声のした方を向くとそこには龍夜の姿があった。

「ほらこいつを捜してたんだろ？」

と龍夜は言い曹操を持ち上げる。

「どこから持ってきた？」

「そこに転がってたぜ」

龍夜が地面を指差す。

俺放置してたってことか・・・。

何にせよ見つかってよかったぜ。

漣から言わせると俺が微妙に抜けているのはよくあることらしい。俺もそこは自覚がある。

つまり作戦のときも何かが抜けているんだろう。何が抜けてるのはわからんが。

まあそれはもういいんだが。

「何考えこんだ顔してんだ？」

「考え込んでるからな」

悩みの無い龍夜には一生わからんて。

これをいうと龍夜がまた突っ掛かって来るので止めておく。漣のお仕置きのとぼちりはくらいたくないし。

「まあいいさ。さっさと帰って今日は寝よう」

「そうだな」

曹操の身柄は明日魏の連中に預けることにして今日は寝る。

こっちにきてから疲れる仕事はやけに多いような気がするぜ。

まあ歩きの移動が多いしな。

しかも中国だから広いし。

まあそんなこんなで陣に帰る俺達だった。

↳第十三話↳魏の大將をダイナミック救出。(後書き)

更新速度え・・・。

「第二四話」一刀も大変なんだね。しょうがないね。（前書き）

兄「作者更新ナイスです」

作「賛美の言葉をいただきましたがこれからも頑張ります！」

く第二四話く 一刀も大変なんだね。しょうがないね。

今日は魏の大將の身柄を引き渡す日だ。
え？人質交換みたいになってるって？
そこはスルーしてくれ。

魏將は本郷軍の陣地にいる。

説明すると本郷軍の陣地とうちの軍の陣地とは近所だな。
徒歩でも数分といったところか。

まあ抱えて運んで行くと、いきなり斬られそうなので車で運ぶことにする。

「ちょっと行ってくる」

「ああ、魏の大將を送ってくるのか。車をぶつけないようにしろよ」

「どつぶつけると？」

「まあなにもないからな。でも油断していると横転したりするからよ」

まあそれもそうかと思いいながらも車出す。

「気をつけるよ」

「まあお前が事故を起こすとは思えんが」

「そうかい」

車を出す。

一応運転技術はいくらかあるつもりだ。
整備されてない道路を走ったりすることはよくあるしな。
事故、なんて油断しなきゃぶついたりはしない。
それにたいした距離じゃないしな。

「しかし、白服の連中も忙しいねえ。各地に現れては色々な混乱を引き起こしてるなんてな」

まあそれが奴さんの仕事なのかねえ？
だとしたら相当ハードワークだろうに。

『妖術つてのは結構疲れるもんだ』つて俺の友人の魔法使いが言っていた。

魔法使いと聞いて俺の頭がおかしいんじゃないかと思った奴それは正常な反応だ。

俺ぐらいにいかれると異常な現実つてのを簡単に受け入れちまう。

考えてみてくれ突然友人が『俺、実は違う世界からきたんだ』つて言ったらどうする？

流すか？それとも119番通報か？それとも信じるか？

まあそれが嘘とは言えないがな。

人間っていう生き物は人間から見た非現実つて奴を受け入れないのさ。

それが普通か？つて言うとうどうだろう？

地球には人間だけ暮らしてるわけじゃない。

人間にとっての非現実とは人間以外の動物には現実かもしれないだろ？
だから一つの理論それこそ科学的な〜じゃあわからないこともある。

でも普通は生きてる間にそんな出来事に会えるのは無いと思うけどな。

でも俺は何度も経験している。

これは良い事なのか悪い事なのか。

少なくとも俺は良い事だと思ってる。

人生経験になるからな。

俺の頭がぶっ飛んでてよかったと初めて思ったね。

後軍隊出身っていうことも。

常人なら賊に斬り殺されて終わりさ。

この世界は思ったよりも残酷だ。

まあ現代の生活も多くの人達の犠牲があって成っているということを忘れちゃいけない。

「戦争や」虐殺なんて歴史の本を見てみればいくらでも載ってるだろ？

でもそれを現代人はどういう状況だったのかわからない。だってその場にいたわけじゃないだろ？

「まあ今まで人殺しをいいうようにやってきた俺が言うのもなんだけどな。」

「……着いたか」

一応車のキーを抜いて降りる。

車を動かせる奴はいないと思うが一応な。

さて、魏将の連中はどこだ？

辺りを見渡す…必要はなかったようだ。

近くにあったでかいテントから一刀とその配下、魏将が出てくる。

「寛さんよかった無事で」

「俺なんかの心配をしてくれるのか？随分やさしいんだな」

「で、華琳様はご無事なのか！！」

でかい声で元気に話しかけてくるのは夏侯惇だったはず（名前ちゃんと覚えてなかった）

「この通りしつかり救出しましたよ」

先ほどとは打って変わって言い方を変える。
一刀以外は丁寧口調でいくことにした。

「まさか寛殿一人で助けられたのですか？」

「いえいえ我が軍の全力を持って助け出しました」

これ以上変な噂をたてられると俺が精神的にダメージを受けるので、一応ウチの軍が助けたことにしておこう。うんそれがいい。

「華琳様は！！華琳様は無事なの！！」

急に走ってきたネコミミ？を付けた少女がゼエゼエ言いながら聞いてくる。

「華琳様は無事だ！！」

「よ、よかった」

愛されとるなあゝ。

この世界の有名武将って基本忠臣だよな。

「そついえば華琳様が眠ったままのようだが大丈夫なのか？」

「はい、操られていた後遺症だそうです。今日、明日には目覚めるという話ですよ」

って専門家？（澁）が言ってた。

まあ怪我や病気を持っている訳でもないみたいだしな。

「それならばいいのだが…。本郷！話がある」

「え、何？」

唐突に話を切り出すえゝと夏侯淵。

何だろうね？

「その季衣だけは助けてやってくれないか？使えないと思うなら一兵卒からでも構わん。命だけは助けてやってくれ」

「え？それはどういう？」

「処遇のことだと思うよ」

一刀が全く事態を理解していないようなのでフォローする。
まあ100%処刑なんて考えてもいなかったんだろうな。

「ああゝ魏の皆さんには今まで通り魏の領土を治めてもらいたいと思います」

「『『『『えっ？』』』』」

その場のほとんどの人が一刀の言葉を聞いて止まった。
ですよねー。まあ大体予想はしてたけど…。

その案を鬼のような形相をしている関羽の前で言えることがすごい
ぜ。

あんた…漢だよ…！（泣）

「それはどういうことですか…！ご主人様…！」

「どういうって…そのまんまの意味だけど」

「本郷それは流石に…」

「いや朱里とはもう取り決めをしてるんだ。だから手配とか準備は
もう始まつてるんだよ」

手回しがいいよな。

流石にバツクに三国一の軍師がつくと違うなあ。
曹操起きたときビックリするだろうなあ。

多分彼女達は1からやり直すつもりなんだろう。
それを普通に領土を返されるなんて言われたら何かあると思うだろ
うな普通は。

「要求は？なんなんだ？」

「え？そんなの無いよ。あえて言えば民のことを思った政治をして
くれれば」

でも彼にとっては違うんだよ。
これが一刀のおもしろいところだ。
損得勘定なんか無いっていう、ね。
言っちゃ悪いが変わってるよ。
もしかしたら俺以上にな。

「はあー関羽お主も大変だな」

「全くだ。ご主人様にはいつも手をやかされる」

敵すらも同情させてしまう一刀すげえな、おい。

「寛殿から何とか言ってください」

「まあその件は既に決定事項みたいですし、とりあえず魏の皆さん方もこれを受けられては？ 諸葛亮殿も容認している策ということはどちらにも不利益はもたらさないと思いますよ？」

「確かに何か問題がある訳でもないしな…」

「まあ、あんたがそういうのならいいんじゃないのかしら？」

初めて顔を会わせただけに信頼されすぎじゃね？

これも噂の効果というやつなのか。

「詳しくは曹操様が起きてからということにはしませんか？ 見たところ皆さんお疲れのようですし」

「そつだなこの件は後日にでもしよつか」

「華琳様がいなきゃ話にならないものね」

ということと解散ということになった。

俺と一刀以外はみんなテントに戻って行った。

「さてと、俺達も帰りますか！」

「えっとさっきはありがとうございました!!」

「俺は礼をされるようなことはしてないぜ。ただ俺と考えが一致しただけさ」

思ったことを素直に言っただけなんだけどね。
まあそういうことにしておいてほしいね。

漣とか龍夜が聞いたらネタにされそうだな。

「じゃあ一刀行こうか」

「は、はい！」

「にしても一刀も大変だな」

高校生でこんな血生臭い仕事をやるはめになるとはね。

三国もとい四国を統一するというでかい目標を抱えてても結局は人殺しになるわけだ。

それを発狂するのでも逃げるのでもなく立ち向かうなんてね。

俺には到底できないことだ。

そう…どんな理由があっても結局は人殺し…。

「それってどういう……!!」

一刀は彼方の瞳に悲しい光を見た。

「本当よくやるもんだよ。これだけの事を今までやってきたなんてさ」

「いえ俺の力なんて全然…。皆のおかげでここまでこれたんです」

「なるほど持つべきものは友、か…」

仲間がどれほど強く、心強いのかは知ってる。

だって今までもこれから俺は多くの仲間にさせられてるんだからな。

甘いなんてよく言われたもんだ。

でも孤独は好きじゃない。案外騒がしいのが…好きなのかもな。それに前の世界でも仲間の強さを教えてもらったしな。

「まあここまでこれたのは一刀の力であり仲間の力でもある。一刀の仲間達だって思ってるはずさ」と胸はって歩けっとな」

そうここまで何にも知らずに来たってことは良くも悪くも才能あるぜ。

「はあ…」

「まあ少なくとも元軍人の俺から見ても問題は無いと思うぜ？仕事をサボってる奴はどこにでもいるしな」

「そこを言われるとちよつと…」

「まあいいじゃないか。今日は祝勝会だし、酒でも…まだ未成年だったっけ？」

法律が無いとはいえ、流石に未成年に酒を飲ませるのは気が引ける。

「いえもう何回も飲んだことがあるので…」

「止める人はいないのな」

蜀大丈夫なのかな？

すっかりしてそうな関羽辺りが止めてくれそんな感じもするけど。

…ああ法律ないから未成年とか関係ないのな。

「じゃあ今日は飲もうか」

「そうしますか？」

「そうしよう」

その日宴会があつたのだが、飲み過ぎて皆をビックリさせてしまったのは別の話だ。その時に呉の人達も増援に来たのを知った。

なんでも蜀とウチと同盟してるから援軍に来たんだと。

まあむだ足になっちまったみたいだけどな。

問題は呉が裏切りそんな軍師をほつといて来たってことだ。

監視ぐらいはつけてるかもしれないが、孫権直々に来て大丈夫なのか？

まあ馬鹿ばかりじゃないだろうかなんらかの対策はあるんだろう…多分。

結局宴会は何事もなく終わった。

伝令がボロボロで突っ込んでくる事も無かったしな。

明日は帰る予定だし（朝早く）寝るか。

曹操はどうするのかって？

一刀に任せるよ。

「第二四話」一刀も大変なんだね。しょうがないね。（後書き）

作「書くことないんですか!？」

彼「それは作者のお前が考えるものだと思うぞ」

作「ん ん ん ん ん ん ん」

彼「凄く腹がたつな・・・」

く第十五話く暇な一日。改造が趣味の彼方。（前書き）

兄「更新速度だらしねえな!？」

作「これには訳があるんだ!！」

兄「意志の弱い子は抹殺……」

作「逃げるんだ…勝てっこない」

く第十五話く暇な一日。改造が趣味の彼方。

魏の大將の身柄を引き渡した俺達は翌日さっさと帰ることにした。だってこれ以上用は無いし、国をずっと空けておくのもなんだしな。まあ チームの連中なら大丈夫だとは思うが。

一刀にはもう行くんですか？と聞かれたが、ああと答えておいた。一生会えなくなるわけでも無いしな。

俺が早く帰りたかったのは帰るのに時間がかかるからさ。

俺は高速移動で帰りたいところなんだがあれを使うと体調が異常に悪くなるので使用禁止にした。

原因はよく分からん。

なんにせよ一旦落ち着いたわけだ。

これでまた改造ができる。

ショットガンでも改造しようかなあ？

でもサブマシンガンも捨てがたいなあ。

帰るまでずっとそういうことを考えてる。

片道12時間だぞ？

ずっと座っていると尻が発狂する。

だから適度に休憩はとることにしてる。

ああ…コンクリで固められた道路が懐かしいぜ。

時代が時代だから仕方ないだろうがな。

また世界を旅したとしてその時今度は未来に行ったりしてな。

「はあー」

思わずため息をついてしまう。
何故かその予想が見事に的中してそんな気がするからだ。

もう戦いに身は投じたくない。

そう思っけていても俺は死と戦いに好かれている。

あっちから勝手に寄ってくるからだ。

対処のしようがない。俺はあまりにも人殺しの道を進みすぎてしまったのかもしれないな。

もしこの世に地獄と天国があるなら、俺は間違いなく地獄行きだ。
そんなの考えなくたって分かる。

悪いことだからな。

汚れる必要の無い人間が汚れないようにするのが俺の仕事だったのかもしれない。

「はあー」

自分がマイナス思考になっていることにまたため息をつく。
ときどき変に暗くなるところはどうにかならないのかと自分でも思う。

どうにもなっていないのが現状なのだが。

もともと仕事からして明るくないほうだったしな。

最近血もあまりみたくなってきた。

気分が悪くなる。生きてて初めてだこの感覚は。

初めて人を殺した時だってそんなことは思わなかった。

戦いに身を投じていくうちに戦うこと自体嫌になってきた。

戦争も喧嘩もだ。昔誰かが俺に言った。

” お前にこの仕事は向いてない。普通に働いてる方が似合ってる”
ってな。

あそこで辞めてれば今の状況も変わってたかもしれない。

いらぬことに首を突っ込まず、私設軍隊も創らず静かに一生を過
ごしていたのかもしれない。

まあ今そんなこと嘆いてても仕方ないんですがね。

今は今だ。現実には絶望してるならとつくの昔に自殺してる。

まだ20歳だぜ？

まだまだ人生長いんだ。

人間の寿命は150歳という話を聞いたことがある。

俺はギネス記録を書き換えるくらい長生きして見せるんだ。

「大将。5分の休憩だそうです。澤大佐から指令がありました」

ジープを運転してた兵士が話しかけてくる。

「どうもありがとう」

ジープから降りて体を伸ばす。

骨がポキポキと鳴る。

「は、後6時間か」

腕時計（安物）を見て言う。

スネークや龍夜はもはや寝てるみたいで兵士の中には見当たらない。

そりゃ昨日の戦闘に今日の移動だからな。

ボコボコの悪路を走ってるせいで眠れもしない。
まあスネークと龍夜は別として、な。

こんな時はどこでも寝られるあいつらが羨ましいよ。
一度寝たら命の危険がない限り眠り続けるからな。
装甲車だぞ？ジープより劣悪な環境でよく眠れるもんだ。

その後エンジントラブルが4回あったが無事に本城につくことができた。

どんだけボロいジープなんだ。
後で整備しないとな。

とりあえずさつさと戦後処理をする。
まあたいしたことはないんだが。

「久しぶりに自分の部屋に帰ってきた気がする」
ベットに倒れこむ。

書類は明日やろうそう思いながら目を閉じた。

「ゝ将！！大将！！起きてください！！」

「んあゝ漣か後五分」

「はあゝふっ！！」

漣が寝台にパンチを繰り返す。
スレスレでそれを避ける。

「殺す気か!!」

「もちろんじゃなくてそんなわけないじゃないですかあ」

笑顔で答える漣。

どう考えてもいまもちろんって言いかけただろ。

漣をとんでもない奴と再認識したところで本題に入る。

「で、何の用？」

「技術部から戦闘機の試作品が完成したと」

「相変わらず仕事が早いことだ」

しかし燃料はどうするんだ？

まず原油が見つかるかどうか…。

技術部の連中ならなんとかするだろう。

じゃあその試作機を見せてもらうか。

ここだけの話、航空系の物何にもわからないんだよね。

俺の部屋から歩いてそうだな…10分くらいでついた。

「おい。誰がいるかー？」

「軍曹来てらしたんですね」

「ああ榎野大尉」

こいつは榎野^{まきの}繁敏^{しげと}って名前で、戦闘機や爆撃機、戦艦を設計するこ

とを得意としている。
いいやつだよ。俺もよく世話になってる。
ついでに男だ。

「試作機が出来たって聞いて来たんだが？」

「ああこちらです」

槇野に案内される。

「こいつが試作機か？」

「ええ。燃料を補給しなくても一日は飛んでいられます」

「燃料なんて簡単に手に入るものじゃないもんな」

一日飛んでいられれば充分だ。

「ただ武装はゼロです」

「偵察機として機能すればいいさ」

「とりあえず三日分の燃料は確保しています」

三日か…まあそれくらい飛べればいいか。

「空中でエンジンストップってことはないよな？」

「そこは大丈夫です。緊急脱出装置もありますし」

「備えあれば憂いなしか」

「ええ。しかし大将以外乗ることは無いと思いますが」

戦闘機か。

何年ぶりに乗るだろう？

「マニュアルあるか？乗る前に操作の確認をしたい」

「どうぞ、これです」

分厚い、マニュアルが渡される。

読み終わるのに0・02秒つてところか。

「どうも」

マニュアルを返す。

読んでみたがやはり実際に乗ってみないとわからないことも色々ある。

「昼食を食べたら、乗ってみる」

「じゃあ最終点検しておきますね」

「ああ頼んだよ」腕時計の針はもう12時を指してる。

今日は城下街で何か食べようか。

城の中にも食堂はあるんだが、まあたまには外で食べるのも悪くない。

自分で料理しないのかつて？

自分で作るくらいなら澁にでも頼むよ。

澁の料理は世界で一番と言われているくらいだからな。
軍隊を辞めても食うのに困ることはなさそうだ。

まあ食えれば文句は言わないけどな。

その料理が真つ黒じゃない限りはな。

まあそんなべたな料理作ってる奴は見たこと無いが。

なんて考えてるうちに外食のときによく食べにくる店にきた。

「大将！カツ丼頼むよ」

「へいかしこまりました！」

店に客は数人程しかいない。

それも店に来ると大抵いる連中ばかりだ。

なんでかって？

そりゃあ特に派手な店でもないし、若者に人気がある味でもないから、としか言いようが無いな。

「カツ丼お待ち！」

おゝきたきた。

「じゃあさっそく」

一口食べる。

「うまい！！」

「そうかい？あんがとよ」

ここの料理は何か懐かしい味がする。
俺が通っている理由はこれだ。

シンプルな味が一番いいのさ、俺はな。

にしてもうまいなあ。

腰にぶら下げた水筒の水を飲みながら思う。

「ごちそうさん！お代はここに置いとくよ」

「どうも！！また来てくだせえ！」

「またくるよ」

早く食べすぎたかな？

もう少しゆっくり食べばよかった。

まあでもあいつを待たせるのもなんだしな。
さっさと行くことにした。

大通りを歩く。

裏道を歩くといつ狙われるかわからないので、人目のあるところを
歩く事になっている。

俺は大丈夫だって？

俺も人間だからな、やられる可能性もある。

そっいうのを考慮してこの道を歩いてる。

兵士や一般人、漕とかのお偉い方も同じ。道を一人で歩かない。

まあ夜間外出禁止令は一応出してるんだけどな。
それほど白服の動きを警戒してるのさ。

皆も納得してくれてるしな。

「もうついてしまった」

思ったより速く歩いてたのかな？

もう少しゆっくり歩いて来ればよかったぜ。

兵器庫の中を見る。

誰もいやしない。

技術部つてもつと人がいたような気がするが。
なぜいないんだ？

もはや兵器開発が必要ないのか？

俺の改造のせいだったりしてな。

…その可能性が否定出来ないのが怖い。

「まさかな…」

流石にそれは無いはず。

だってそれだと首になるでしょ。

多分あれだな。一斉に飯食いに行ったな。

よくやるんだよあいつら。

まあ仕事がないのは事実だし、いいんだけどさ。

じゃあアイツを待つか。

つてもういるのかさっきの話忘れてたな。

「おーい槇野大尉。いるのかー？」

「ここにいますよ軍曹」

「最終メンテナンス終わった？」

「ええ完璧ですよ」

「じゃあちよつと飛ばしてくる」

「お気をつけて」

戦闘機に乗り込んで動かす。

車と違ってそんなに乗ったことないから操作しづらいな。

30分後あんまり飛ばすのもあれだと思って帰ってきた。

「どうでした？乗り心地は？」

「大丈夫じゃない？特に問題は無いと思うけど？」

まあプロってわけじゃないからよくわからんけどね。

戦闘機どころか飛行機もそんなに乗ったこと無いんだよね。
俺、高所恐怖症だからさ。

いっつも車か船で移動してるんだよね。

さて俺は部屋に戻って改造することにした。

もはや自重なんてものはしないぜ！！

S249（軽機関銃）を改造した結果かがこれだよ！！

命名 SS249

威力 戦車の装甲を貫通するくらい（通常時1000m強風時800m）

装弾数 600発

弾丸 SS249仕様弾を使う

重量 1500g

オプションパーツ 4倍率スコープ（暗視モード付き）、強化サプレッサー（1200発は耐えられる）

相変わらずの謎の技術で装弾数がおかしくなっている軽機関銃。もはや対人戦というより対戦車ライフルみたいになっている。

前のS249より射程距離が伸びたので狙撃銃として活用できる。サプレッサーを装着してもすぐ壊れないように改造してあるのでフルオートで容赦なく撃つこともできる。

フルオート時の反動がほぼゼロなので命中率がまったく下がらない。人に撃つと挽き肉なることは間違いなしの銃。

使い方を間違えると大変なことになる。

まあ一丁しかない銃だから大丈夫だとは思うが。

改造された銃は基本量産されません。

続いて二丁目。

最近改造しすぎだわ！！！！どういふことか説明して頂戴！！

D A M E D A

筋肉事項です。

M870（ショットガン）を改造した結果がこれだよ！！

命名 佐々木銃 昔日本に村田銃というショットガンがあったため
名前をマネた。

威力 戦車に風穴が空くくらい

装弾数 10発

弾丸 Mスラッグ弾

重量 500g

殺したい奴を仕留めたいならこれだ！

人間なら身元が確認できないほどぐちゃぐちゃにしてくれるだろう。
しかし音が大きいのが弱点でもある。

ポンプアクションなので連射性にも欠ける。
しかしそれを補うほどの威力があるので問題ない。

「こんなもんかな？」

すっきりしたー。

やっぱり改造いいね最高だね。

く第十五話く暇な一日。改造が趣味の彼方。（後書き）

作「更新なんて怖くねえ!!」

彼「じゃあ次からもっと早く出来るんだな？」

作「もちろんプロですから（キリッ）」

く第十六話く蜀と呉がドンパチ？一人では手に負えん。（前書き）

彼「更新速度が上がったってことは次話の投稿がかなり遅れるってことだな？」

作「今にみてる！一週間のうちに更新してやるよ！」

く第十六話く蜀と呉がドンパチ？一人では手に負えん。

あの改造をした日から1ヶ月。

忙しい日々が続いていた。

やれ戦後処理だの、耐震強度だの、食料を備蓄してる倉庫だのどうしろってんだい！！

書類は部屋の半分を余裕で埋め尽くすし、数秒で片付けたと思ったらまた持ってくるし。

この忙しさは異常だぞ！？

もう少しで白い悪魔（書類）とお友達になれそうだ。

「大将く追加です」

またあの白い悪魔が来やがった。

「どうも、後どれくらいある？」

「これでお終いです」

「やっとか…」

書類地獄はこれで終わりをつげるらしい。

こんな時に白服の連中が何かやらかしたらキレるね。間違いなく。

「大将！！情報部から呉と蜀が蜀国境付近で睨み合っているとのことです」

「いつ入ってきた情報だ？」

「数分前です。斥候から連絡がありました」

白服じゃないだけましか。

それにしてもなんで蜀と呉が？

確か同盟していたはずだが。

行って確認してくるか。

「技術部に連絡をとって戦闘機の準備をさせてくれ」

また白い悪魔が増えそうだな…。

しかし背に腹は変えられん。

それに同盟中の蜀と呉が睨み合ってる理由も知りたい。

「大将、また私の面倒を増やすつもりですか？」

「み、澪いつからそこにいたの？」

「部屋の外ですつと聞いてました。気になるのはわかりますけど、余計なことに首を突っ込むのは止めた方が…」

「わかってるよ。でも気になるじゃないどうして同盟中の蜀と呉が戦争をしようとしているのか」

そついうと澪はため息をついた。

「そつ言うと思ってましたよ。せめて誰か一人連れて行ってください」

誰を連れていこうか…。

「私は仕事があるので違う人にしてくださいね」

じゃあ後残ってるのはスネーク、龍夜、槇野、中村のじっちゃんくらいかな？

槇野と中村のじっちゃん飛行機と船酔うんだよな。

槇野はなんで飛行機酔いなんてするんだよ。

飛行機好きなのに酔うって洒落にならん。

龍夜にしようかな？

どうせ暇だろうし。

と、いうことで龍夜の部屋の前まで来ましたー。

部屋から出るとき濡からの視線が凄かったが気にしない。

「龍夜入るぞ〜？」

ドアを開けて入る。

部屋の中に入ると酒瓶が無数に転がっていた。

龍夜はここで仕事してるのか？

だとしたらすごいな。にしてもその龍夜の姿が見当たらないが。

部屋を見渡していると不自然に酒瓶が重なっているところがあった。

俺はその酒瓶の山に近づいて酒瓶の山を蹴飛ばした。

ものすごい音がして山が崩れる。

そしてその下から龍夜が出てきた。

「おい龍夜起きろ！」

「うーん」

「龍夜、澪が呼んでたぞ」

「ええっ！？マジで！？」

そしてこの驚きである。

龍夜は澪にトラウマ持つてるんだね。

大抵龍夜が澪に呼ばれるのは怒られるときだし。

「嘘です！」

「なんだ〜脅かすなよ」

ホッとした様子で近くにあった酒瓶を掴んで酒を飲みだす。

「これから蜀と呉が睨み合つてるところに戦闘機で行くけど一緒に来るか？」

「同盟状態の国がなんで睨み合つてるんだ？」

「そいつを今から確かめに行くのさ」

「ふーんいいぜ仕事はもう片付いてるしな」

俺にはお前の倍以上の仕事が回ってきてるよ。

「よし！じゃあ準備ができれば兵器庫に来い。戦闘機の準備をしておくから」

一応武器も持って行くか。

つってもAKI47（アサルトライフル）だけ持っていくがな。

AKI47って何かって？

1947年にソ連に正式採用されたアサルトライフルだ。

非正規品も含めて約1億丁世界に出回ってる。

世界最強の殺人マシンなんてあだ名が付くくらい人を殺してる銃だ。

俺もAKの殺害数を増やしてるうちの1人だからなんとも言えないんだが。

気圧？そんなのは問題ない。

俺のこのバックに入ればたとえ核ミサイルに攻撃されたとしても大丈夫なのさ。

すごいだろ？友達の魔法使いが1日でポンツとやってくれたぜ。

「よし！行くぞー！！」

「おおー、準備早いねえ……」

「最近仕事ばかりだったからな久しぶりの喧嘩かと思うとワクワクするぜー！！」

サボったら濡に殺されるもんな。

おお、怖い怖い。

今更だが身震いしてきやがった。

「じゃあ行こうか」

「おー！」

「ところで運転龍夜がやってくれない？」

「いいけどよ、どうかしたのか？」

「この前運転したら気絶しかけたからさ」

「飛行機苦手だったか？お前」

「高いところが苦手なんだよ」

あゝ、思い出すだけで気持ち悪くなってきた。

「意外な弱点だな」

「揺れがなきゃ大丈夫だよ。多分俺酔ってるから」

車とか船とかはいいんだけど飛行機はやっぱりダメみたいだ。余裕でリバーできます。

「まあそれはいいとして結局いつこの世界から帰れるんだ？」

「俺に聞かれても困るんだけど……」

こいつで二回目の異世界なんだが帰れる条件がいまいちわからない。時間なのか、それともこの世界なら天下統一なのか、白服をぶちのめせばいいのか、本当にどれなのかわからないから困る。

まあ三国志なわけだから多分天下統一が本当なんだろうな。
しかし、この世界で殺した連中も殺したことになるのは困る。
またしっかり記録をつけないと忘れちゃう。

ここで説明したほうがいいと思うのは平行世界、いや並行世界と呼
んだ方がいいのかな？

俺たちから言わせればもし何々だったら〜とかの話だ。

例をあげてみよう。

例えば日本が第二次世界大戦に負けなかったらとか。

俺が普通の学生として暮らしてるとかな。

俺的にはこういう解釈で合ってると思う。

まあ頭がいいわけじゃないから本当にあってるのかは怪しいが。

「なあ龍夜俺達の世界もパラレルワールドだったらどうするよ」

「別に、いままでとにもかわらんだろ」

「そうかな…？」

「何ガラでもないこと言ってるんだ？お前らしくないぜ」

「俺だって考え事することぐらいあるさ」

「最近多いなそういうこと」

「そうか？」

自分では気づかないがやはりそうなのだろうか。
最近漚や、スネークにも言われる。

「お前やっぱり軍隊辞めて正解だったよ」

「えっ？」

何を言い出すのかと思ったら急にそんなことを言い始めた。

「最近のお前を見てればわかるよ。血を見ないようにしてるだろ？」

「まあ、な」

「だろうな。軍隊辞めたって食っていけるんだから何も問題は無い
だろ？」

「そう思うか？」

「そう思うね。お前が思ってるほどお前は最低な人間じゃなねえよ。
自分じゃ気づいてないかもしれないがな」

「俺はもう駄目なのかもな」

「ずいぶん弱気だな。今までおかしくなっていないだけマシだ」

しばらく沈黙が続いた後龍夜が言った。

「…漚に言っというてやる。元の世界に帰ったらもう軍の仕事は回させないようにってな」

「龍夜！」

「澪もうすすす感づいてるはずさ。お前がだんだん戦場に嫌悪感を持ってるてことをさ」

自分はやっぱり情けないと思った。

自分がふがいないばかりに仲間や親友を心配させていたなんて…。

「迷惑なんて思ってないさ」

「えっ？」

その龍夜の一言が不思議でならなかった。
迷惑じゃないならなんなんだろうと。

「親友として当然の事をしてるだけさ」

そうか俺はまた忘れてたんだな。

仲間に、親友に頼るって事を。

ふっ、笑っちゃうな。

しかし、それと同時に自分も人間なんだなと実感できて安心出来た。

「それに今だけさそんなこと思ってるのは。平和ボケすればそんなことも忘れる。なにせまだ130年も人生残ってるんだからな」

「…龍夜に励まされるとわね」

「一応お前より年上なんだけどな」

「心配させて悪かったな。よくよく考えたら俺はなるようになれっ
ていうスタイルだったのを忘れてたぜ」

「つぶ、そうじゃなきゃ俺の知ってる彼方じゃないぜ」

これだから人生おもしろい。

俺が150歳まで生きたら、今度は200歳を目標にしようかな？
少なくとも150までは死ぬ気はない。

「龍夜はもうすこし悩みを持った方がいいぞ」

「余計なお世話だったの」

「…そのときは俺が話聞いてやるからよ」

「そいつはどうも。じゃあそのときはよろしく頼むことにするよ」

まあ悩むのも人生、悩まないのも人生つてところかな？

龍夜みたいに一生悩みを待ちそうに無いやつもどうかと思うけどな。

「話してるうちについたな」

「ふうー戦闘機なんて久しぶりに飛ばすな…大丈夫かなあ？」

「俺でも出来たから大丈夫だよ。他に何か飛んでるわけでもあるま
いし」

「それもそうか。まあ山を飛ぶわけじゃないみたいだしな」

「槇野大尉準備はOKかい？」

「軍曹。大丈夫ですよ往復の燃料は入ってます」

「じゃあ行こうか？」

戦闘機に乗り込む。

「よっしゃあ！！出すぞ」

「俺は寝るわ。あっちにつくまで2時間はかかるらしいし」

「2時間なら大丈夫だ。あっちについてから寝ればいいだけだしな」

その後こいつに操縦を任せたせいでああなるとは思いもしなかった。

「第十六話」蜀と呉がドンパチ？一人では手に負えん。（後書き）

作「今回の彼方シリアスがちょっと入ってたね」

彼「自分でいうのもあれなんだがこんな感じだったっけ？」

作「最初のキャラ像からはかなり外れてるかな」

彼「なんかなあ……」

く第十七話くミッシヨん呉と蜀のドンパチを止める!! (前書き)

作「今回は手抜きです!!」

彼「それ堂々と言うことじゃないぞ」

兄「だらしねえな!？」

く第十七話くミッション呉と蜀のドンパチを止める！！

「うーんここは何処だ？」

何が起こったんだ？確か龍夜と戦闘機に乗ったんだよな。
あれ？戦闘機が大破してるのはなぜだ？

まさか龍夜の奴事故ったんじゃないだろうな？
頭が痛い。

「ここは…森の中みたいだな」

周りに木しかないのはいいとしてやつが見つからない。

「龍夜ー！！龍夜ー！！何処に行きやがった？」

無線機を調べたんだが墜落の際見事にぶっ壊れたみたいだ。

おいおい予定ならもうつついてるはずだぞ？
なのにこんな山でピクニックとわね。

龍夜がこれくらいでくたばるとは思えんが一応辺りを捜してみるか。
さすがに国の長と国のお偉いさんが消えたとなれば大変だろう。
書類とかな。

全く困ったもんだ。

また白い悪魔とご対面になっちまうな。

「龍夜ー！！龍夜ー！！」

いくら叫んでも返事は帰ってこない。

墜落した際にどっかに吹っ飛んでたのか？

まあ居眠りしたせいだろうな墜落したのは。

帰ったら零に報告しなきゃな。

自業自得とはいえ憐れだな。

本当に困ったなあ。

まずここが何処なのかわからないし、目的の蜀と呉が睨み合ってる国境も何処だかわからないし、龍夜も何処だかわからないしでわからないことしかねえな。

「とりあえず龍夜と合流するか」

っと言っても捜すあてはないのだが。

ここで選択肢が3つある。

龍夜を見捨てて蜀の国境に向かう。

龍夜を殺してから蜀の国境に向かう。

龍夜を殺しながら零を待つ。

どれがいいかなあ？

一番上がいいような気がするんだが…。

そうしよう。

龍夜は見捨てる。

我ながら酷でえな。

ま、自業自得だしな。

死ぬわけじゃあるまいし大丈夫やろ。

と、いうことで龍夜は見捨てることにしました。

さっそく蜀国境付近に行くために山を抜けた。
墜落現場から数10分歩いてやっと外に出た。

「あつ… 国境が何処なのかわからないんだったな」

こういうときこそ俺の千里眼を使うとき！

「……………うーん」

現在地点から約300kmつてとこだな。

これくらいなら高速移動でなんとかなるか？

いやしかし腰が痛くなるしな。

低速移動でいこうか。

「…よし！」

自分の頬を叩いて気合を入れる。

低速移動〓 毎分10km

高速移動〓 毎分500km

「ふー」

このスピードで走っていると遅い感じがする。

いつもならもっと速く走ってたからな。

足が速いのは生まれつきだったし、人の限界を越えて走るなんてことはいつもだったからな。

この技の弱点といえば森は走れないところかな？

後、水の上も。

やっぱり急には曲がれないんだよ。

〈30分後〉

「腰があー!!」

蜀の国境まで後少しとなったのだが…。

「なに高速系の技全般的にOUT？」

俺はそう叫びながら荒野を走る。

戦が始まった気配は無いが念のためだ!!

痛む腰には溼印のシップを貼っておいた。

こいつで相当楽になるはずだ。

「なんか年よりみたいだなあ」

あれ？前が霞んで見えないや。

なんて漫才してる場合じゃない。

さっさと行って理由を聞かないと。

ついで行っておくがあくまで理由を聞きに行くだけだからな？

別に戦争自体を止めにいくわけじゃない。

本郷が私欲で戦争するとは思えないが、呉はどうだかわからん。
なんでつて？そりゃあ王がどうかは知らんが、軍師は相当ヤバいら
しいな。

それに最近白服が静かだったのもひっかかる。

てなわけで今蜀の陣地にダッシュ中。

「うおおおおー!!」

陣地の柵をジャンプで越える。

一瞬またに擦った感じもしたが大丈夫だったようだ。

「なんだ!？」

「人だ!!」

警備兵いるの忘れてた。

下でもものすごく騒ぎになつとる。

「何事だ!騒々しいぞ!!」

「関羽將軍空から人が!」

「えっ!？人が」

「あちらに」

「着地に失敗した…」

足がくく！！！！！！

「寛、さん？」

「どうも」

くその日の夜く

関羽達に事情を説明した後、軍師の諸葛亮にどうして呉と蜀が睨み合いになってるのか説明してもらった。

「と、いうことですがわかりただけかもしれませんか？」

「簡単にまとめると…まず蜀の街に呉が攻撃をしたという情報が入った。蜀本隊が行ったところ呉軍の武具や旗が落ちていた。そして国境付近に呉軍の本隊の姿、か」

「寛さんはどうやって情報を？」

「うちの諜報員から情報をもらいましてね」

今は武官や文官には下がってもらっている。
ここにいるのは一刀、俺、諸葛亮だけだ。

「寛さんの軍は？」

「本拠にいますよ。俺は連れと2人できたので」

「じゃあもう1人は？」

「戦闘機が事故った際にはぐれてしまったのでおいてきました」

「「!？」」

そんな顔されても困るんですけど。

「おいてきた!？」

「YES」

「大丈夫なんですかその方は？」

「あれくらいじゃ死なないから大丈夫ですよ」

「実際寛さんの目から見てこの出来事はどう見えますか？」

一刀から質問がくる。

「おかしいね。俺達から見れば同盟状態にあった国が急に戦争おっ
はじめようとしてるようにしか見えない」

「なるほど」

「それに話がうますぎる。街が襲撃されたと報告されてからすぐに
見に行ってるのに呉がもう撤退しているし、なにより呉が自分の領
土にいるってのもおかしい」

「それを聞くと確におかしい点はたくさんあるんですよね」

「寛さんもしかしてこの件…」

「ああ、白服の連中が怪しいな」

「この前も原因不明の疫病が起りましたし」

「うちもだ」

あれも白服の仕業だろうな。

「この仲間割れの狙いは両者の消耗だ。どっちも本隊を動かしてるんだからな」

「そう考えると今呉と戦うのは白服さん達の思っ壺っていうことですか」

「一刀、こいつを持っとけ」

「いいんですか？」

「ああ。護身用だ」

一刀に渡したのはピストルだ。

「弾は15発。引き金を引くだけでいい」

「問題は呉をどうするか、ですよな？」

「その通り。俺が説得に行ってもどうなるかわからん。一番いいの

は俺と一刀が一緒に行くことなんだが…それは無理だろうな」

一刀はよくても関羽達がなんと云うか…。

「説得します」

「ご主人様？危険なんですよ？」

「わかってるよ朱里でも今やらなきゃたくさんの人が死ぬんだ」

「気に入った！！安心しな一刀の身は俺の命に代えても守ってやるよ」

ということで俺と本郷で呉に説得に行くことになったのだが…。

「ご主人様には危険過ぎます！！」

「そうなのだ！！お兄ちゃんにもしもの事があつたら…」

「まあおちつけお主ら」

今一刀が過保護な家臣達を説得してるところなんだがなかなか話が進まない。

「寛殿がついていくのであれば斬られるような事はあるまい」

「しかし！！」

「大丈夫だよ俺はみんなのために行ってくるけど死ぬ気はないから」

「あ、いい忘れてましたけど武器は持っていないので」

「寛殿それはどういう意味でしょうか？」

「そのまんまの意味ですが？」

「寛殿は敵のど真ん中に丸腰で行けとおっしゃるのですか!!」

「武器を持つてるとその時点で駄目なんですよ。今回の目的はあくまでも話し合いです。敵の大將を斬りにいくわけではありません」

「こりゃあ関羽の説得に時間がかかりそうだな。」

「ですが!!」

「頼む!! みんな!! もしここで逃げ出したら自分を自分で許せなくなると思うんだ。だから行かせてくれ!!」

「安心してくれ。話は簡単に収まりますよ」

おれの予想だとな。

軽く行つてきて話して帰ってくる。

これで戦争が起きないなら安い安い。

「…わかりました。寛殿ご主人様の事お願いします」

「承りました。命に代えてでも守って見せます。よし行くぞ」

「あれもう行くんですか？」

「善は急げだ」

さっそく出発することにした。

「彼方さん。なんでわざわざ教えにきてくれたんですか？」

「そりゃあ無駄に血は見たくないからさ」

本当に血は見たくないね。

今だけかなそう思ってるのも。

「にしても呉と蜀の陣地って結構近いんだねえ」

「まあ見えますしねえ」

「なにせよ戦闘になったりはしないさ。ただ睨み合ってたただけだしさ」

結局呉の連中にはお互いの勘違いってことで納得してもらった。

え？途中の話省きすぎだって？

いいのいいのこれが作者クオリティーなんだから。

作者には死んでもらうよ。

アッーーーーー！！

説得した後どうなったって？

一刀の軍にしばらくいさせてもらっことにした。

だって帰り道わからないし、無線があるわけじゃないしさ。
一応仕事は手伝ってるんだぜ？

そして俺が白い悪魔と睨み合ってるときだった。

あ、あの説得大作戦から2週間後の話な。

「寛殿に報告したいことがあるそうです」

「了解今行きます」

関羽に呼ばれて大広間に向かった。

何があるってんだ？

「みんな今日は集まってもらって悪いね。朱里お願い」

「はいご主人様。皆さん次の満月の日にこの世界はなくなるそうです」

衝撃の一言だった。

「第十七話」ミッション吳と蜀のドンパチを止める!!（後書き）

作「今回の適當さは異常だぜ…」

彼「いっぺん死んでこいや」

作「次は頑張るから許してくれんか？」

彼「駄目だ」

「第十八話」最終決戦だ！！何が始まるんです？世界の崩壊だ！！（前書き）

作「今回いままで一番の駄文の予感」

彼「こ・れ・は酷い」

「第十八話」最終決戦だ！！何が始まるんです？世界の崩壊だ！！

「この世界が無くなる？」

それはあまりにも急だった。

確かに世界はたくさんある。

それは今までの経験から言えることだ。

でも世界が消える？消えるってのはゲームのセーブデータを消すみたいに跡形もなくなるってことか？

「それについては貂蟬さんから説明があります」

そういつて出てきたのは…。

「じゃあ説明するわね〜ん」

筋肉モリモリマッチョマンの変態だそのものだった。

シユワちゃんの筋肉よりすげえぞ。

北斗の拳みたいな筋肉してやがる。

しかもオカマキャラとか濃すぎるだろ！！

「！＃\$％＆％’％（＆％？？？’」

あれ？普通に言葉がしゃべれないぞ？

あまりのショックで少し混乱してしまったようだな。

「本当ならもう少しこの世界を滅ぼす儀式は遅くなるはずだったの」

なるほど原因はここにいるわけだ。

「で俺がそれをはやめたと」

「そういうこと」

「ろくなことしてねえな、俺」

「あらんそんなことないわ。あなたはこの世界のありかたを変えたもの」

「ありがた？」

「そうこの世界そのものと言ってもいいわね」

「変えたって言うのはいい方に？それとも悪い方に？」

これで悪い方に変わってたらそれこそどうしようもねえな俺。

「もちろん良い方でよ」

「ならいいか」

もしこの世界に俺が来たことが良い事なら文句は言わねえさ。

「で、その儀式つてのは次の満月の日なんだろ？いつなんだ？」

「2週間後」

2週間ねえ…。

「ではさっそく作戦会議をしましょう」

「そうですね。軍備も整えないといけませんし」

最初から殴り込む気満々なんですね。

「それとあなたに悪い報告」

「何ですか？今更何があつたつて驚きませんよ」

「あなた以外の人達は帰ったわ」

「それは悪い報告じゃないさ。むしろ良い報告だ」

うるさいのが少なくなつていいよ。

それにどうせもう少しで帰れるんだ。

徹底的に暴れてやるぜ。

「ところでその儀式を止めてもこの世界の崩壊は止まらないんだよな？」

大広間にはもう誰もいない。一刀もな。

「ええ、残念だけど。この世界はもう終わるの」

「でも本当の終わりじゃない。そうだろ？」

「ええ、その通りよ」

「簡単に言つと区切りつてところかこれが第一章で次が第二章みたいな？」

「ご主人様しだいよ」

「一刀なら大丈夫さ。そんだけの根性くらいあるさ」

あいつなら新しい世界くらい簡単に作れそうだな。

「あなたはもともとイレギュラーな存在だった。だって違う世界からきたんですもの」

「イレギュラーのイレギュラーか。でももうすぐ終わる」

「ええその通りね。あなたはどうするの？」

「ここまで来たら最後まで付き合つよ。恨みを晴らそうじゃないの」

「そう…じゃ私はこれで。ご主人様といちゃついてこなくちゃいけないからあん」

「ガンバツ テキテクダサイ」

いかん…危ない危ない。

危うく戻すところだったぜ。

最終決戦ときたら銃の整備と刀の手入れはしっかりしなくちゃな。

く改造中く

SS249（軽機関銃）を改造した結果がこれだよ！！

命名 SSS249

威力 ダイヤモンドを木っ端微塵にするくらい（通常時2000m
強風時1800m）

装弾数 800発

弾丸 SSS249仕様弾を使う

重量 2kg

オプションパーツ 4倍率スコープ（暗視モード付き）、強化サブ
レッサー（1600発は耐えられる）、SSS249式銃剣。

相変わらずの謎の技術である。

装弾数が日ごとに増えている。

もはやなんなのかわからない状態である。

しかし人間を正体不明にするには丁度いい銃だろう。

サブレッサーが改造されているためさらに頑丈になった。

フルオートで撃てば嫌いな奴を土に返すことだってできる。

スナイパーライフル？そんなもんじゃないね。

言ってみればスナイパーライフルの命中率とショットガンの威力と

軽機関銃の装弾数を兼ね備えた化け物銃だ。

ただネーミングセンスはおかしい。

ただたんにS多くなっただけだよね！？これは。

説明ご苦労。

邪魔な作者は消えていいんだぜ

お、覚えてやがれえ！！

三下の台詞だな。

改造最高！！

やばいテンションが上がりすぎておかしくなりそうだ。

落ち着け！落ち着くんだ俺！

興奮して熱くなったので城壁の上で頭を冷やすことにした。

「ふー少し熱くなりすぎたな」

さっき体温計ったら体温計がぶっ壊れやがった。
少し自重しよう。

「うん？」

ふと横に目をやると一刀が1人で座っていた。

「よう！一刀」

「彼方さん」

未だにさんずけなんだよね。
ちょっと悲しいな。

「どうしたんだ？暗い顔して」

「なんか自分の手にこの世界の未来がかかってるんだなと…」

「それで考え事か。急にでかい事に巻き込まれて混乱してるのか？」
まあ高校生でいきなりこの世界はあなたの手に委ねられましたなんて言われても困るわな。

「この先どうなるのかな？って」

「俺は今まで20年生きてきたがなるようになれで何とかしてきた。だから俺より強い意志を持つてる一刀は大丈夫さ」

力だけが全てじゃないということさ。

孤独は罪、らしいからな。

昔の俺はそうだったかな？

「彼方さんが言うんだったらそうなんでしょうね」

「まあ、年はそう大差ないけどな」

「2週間後か…」

「お前には余るくらいの仲間がいるだろ？大丈夫さ、2週間後にはいつも通り暮らしてるさ」

そう2週間後には必ず決着がつく。

鍵は一刀だ。

一刀が死ななきゃ他は大丈夫だ。

どうせ新しい世界で生き返るんだからな。

「まあ、今は剣が錆びないように磨いとけ。じゃな」

「彼方さん……」

2、3歩あるいてから振り向いて一刀に言う。

「どんな結果になっても……少なくとも、お前のせいじゃないから安心しろ」

「えっ？それってどうい「おやすみ」彼方さん!？」

悪いのは少なくとも白服の連中さ。

いや一刀がこの世界にくることは予定済みだったのかもな。

ただやつらが想定外だったのが一刀がこの世界で強くなっちゃまったってことだ。

権力的にも、勢力的にもな……。

っへ、おもしろいじゃねえか。

やっぱりこういう計算通りに行かないところがいいよな。

なんでも思い通りになったら世の中つまらなくなっちゃう。

まあそのままだったらと2週間が過ぎたわけだが、別に何か変わったことがあったわけじゃない。

午前は巡察か書類又は自主トレ。

午後は紅茶飲んだり、お茶を飲んだり、鍛冶屋に行って刀を造ってきたり、それくらいか。

そして俺は今大広間にいる。

「これが最後の戦いよ〜ん。この世界のために頑張ってね〜ん」

相変わらずきしょく悪いな。

差別はあんまりしたくないがこれだけは人間として認められない。

「俺は何すればいいんだ？」

「寛さんとはにかく暴れてください」

「了解。それともう一つ」

みんな俺の方を向く。

「俺の本当の名前は・・・彼方だ」

「じゃあ今までの名前はなんだったのだ？」

「いや偽名使ってたならそのままここまで来ちゃって・・・」

「では私も真名を明かしませんか」

「いいんですか？相当大事な名みたいですけど」

「彼方殿には是非受け取っていただきたい」

「じゃあありがたく受けとることにします」

「我が真名は愛紗」

「我が真名は星」

「私の真名は翠！」

「鈴々は鈴々なのだ!!」

「私の真名は朱里です」

「じゃあ行きましょうか」

「『『『『『『『』』』』』』」

みんながいそいそと移動し始める。

「まって〜ん」

「ゴホッゴホゴホ。なんでしょうか？」

絶対拒絶反応出てるわ。

「この世界が続いたとしても、続かなかったとしてもあなたがどうなるかは知ってるわね？」

「もちろん。俺は結果がともあれ自分の世界に帰る。いや、帰されるが正しいかな？元々俺は部外者だからな」

「そうならいいの・・・」

その才力m・・・じゃなくて貂蟬の顔は悲しそうだった。

やっぱり貂蟬にも後悔は変かもしれないが、そういうものがあるだろうか？

少なくともそこには俺は入れそうもない。

ここは少しの間貂蟬をそつとしておくか。

「おお彼方殿では出発しましょう」

「・・・」

「彼方殿？」

「いや、なんでもない。じゃ行こうか」

貂蟬、お前が考えてるほどこの世界の消滅ってのは深刻な問題じゃないんだ。

だってよこの世界が新しい世界になるのは目に見える。

消滅するだけじゃない、次がある。

・・・だから大丈夫さ。

さてと派手にぶっ放すか！！

（関）

「守りの堅そうな関だな」

「でもこの世界のために突破する！！」

「全軍突撃準備をしてください！！」

「銃よし刀もよしと」

残念ながら銃の出番はないかな？
刀の方がいつきに倒せるんでね。

「出陣！！」

誰かがそう叫んだ。

もちろんみんなこれに應える。

「おー！」「おー！」

「ちよいと力を出すぜ。一閃・横一文!!」

誰よりも一番最初に白服の連中を斬った。

そしてその技を出した瞬間数万の白服の体が横に真つ二つになる。

しかし、白服達はいつもより数倍の勢いで沸いてくる。

「足止め役か……まあ付き合ってやるか!!」

斬る斬る斬る。

そして何10万斬った頃だろうか、白服が沸いてこなくなった。

俺はそれを儀式の準備が完了したんだと思った。

「よし今のうちに進軍しよう」

「私達はここに残ってこいつらを倒す。だからご主人様は先に行つてくれよな」

「翠、気をつけて」

「わかってるよ!!」

そしてついに山頂までたどり着いた。

「ふんっきたようだな」

「左慈!!」

「散々殺しそこねたがここで死んでもらう」

「左慈さんもうやめにしましょうこんなつまらないことは」

「つまらないことだと?」

「ようはあの鏡を壊せばいいだけですしね」

俺は自分の愛銃M1911A1を懷から取り出し鏡に撃った。

パリーン。

そんな音が部屋に響き渡る。

「さあ一刀!この世界はもう終わりだ!!」

「終わりってどういうことなんですか!?!彼方さん!」

「この世界はもう絶対に終わるのさ・・・でも次がある!!!さあ思い浮かべる!!自分にとって1番大切な人を!!」

（１番大切な人・・・）

愛紗のことを思い浮かべる

鈴々のことを思い浮かべる

朱里のことを思い浮かべる

みんなのことを思い浮かべる

その瞬間淡い光を放ち始める鏡。

その光はこの物語の突端に放たれた光。

白色の光に包まれながら、俺はこの世界との別離を悟る。

自分という存在を形作る想念。

その想念が薄れていくことを感じながら、それでも俺は心の中に愛しき人たちを思い描く。

みんな。

俺のことをずっと支えてくれた仲間たち。

無口な恋。陽気な霞。口うるさい詠に、心根の優しい月。

敵対し、そして文句を言いながらも仲間となり、俺を助けてくれた曹操たち。

王としての責任、役割・・・そういったものを教えてくれた孫権たち。

力の無かった俺を助けてくれた、義侠に富んだ少女、公孫瓚。

みんなの顔が次々と浮んでは消え
って、あれ？誰か１人

忘れてるような・・・。

「誰だっけ？」

「どうかしたのん？」

「あれこのまま終わりの的なノリだったのに・・・」

「!?!」

「なんだ!?!」

「むっ!?! なんです、この揺れはっ! こんなものはプロットに無かったはず・・・っ!」

「なーるほど。物語でいうところのハッピーエンドを引いたのかもな一刀は」

「どうなるのかしらねえ？」

そして強い光に飲み込まれた!!

・
・
・
・
・

「ん?ここは?」

目を開ける。

まさかまた荒野だったりしてな。

目の前には草木や花噴水があった。

「公園みたいだな」

この前は家だったのに今度は公園？しかも知らない公園だ。

異世界に次異世界だったとか？

笑えない冗談だ。

腰を上げてまわりを見渡す。

特に変わったところh・・・あった。

誰もが見ただけでわかる。

何10人も武装した女性が集まってるのが見える。

ありゃあ即通報だな。

都合のいいことにまわりには誰もいない。

なんか気が引けるが話しかけてみるか。

その女性の武装集団に近づく。

「やっぱり一刀か！」

「彼方さん！！」

「あらあん？帰ったと思ったんだけどん？」

「まあ別れの挨拶をするくらいの時間はくれるみたいですよ」

「別れって・・・？」

「悪いが一刀俺は、お前のいた世界の人間じゃないんだ。だからお前とはここで別れなのさ」

悲しいがな。

弟みたいだった奴と分かれるんだから。

「そう・・・ですか」

「落ち込むなよ。俺だって悲しんだからさ。でも前向いて生きねえと、な？」

「はい！！」

「よしそれでいい。じゃあ愛紗さんもお世話になりました。その他の皆さんもありがとうございました」

「いえ我らなど何も・・・むしろ彼方殿に助けられてばかりで」

「はは・・・じゃあな一刀元気でやれよ」

俺を明るい光が包み込む。

わかる。この世界とはもうおさらばなんだってな。

悲しいけどよお・・・人生出会いがあれば別れもくるだろ？

必ずとは言わないが今回は少なくともその別れにあてはまっちゃったらしい。

楽しかったぜ！一刀！

そこで俺は意識を失いかけた・・・ところに机の角が頭にヒット！

「グッ！！」

もう少し優しく家に帰せないのかよ。

あの女だらけの三国志に行ってから今までで1番効いた攻撃だったぜ。

「頭が逝きそうだ」

なににせよ帰ってきたんだな、うちに。

そして彼の物語はここで終わらない。

次回作をお楽しみに。

「第十八話、最終決戦だ！！何が始まるんです？世界の崩壊だ！！（後書き）」

彼「言い残すことは？」

作「この駄文を読んでくださっている皆さん本当にありがとうございます！！」

彼「次回作・・・やるの？」

作「やります。ただ少しでもまともな文になるといいな」

彼「まあ、頑張れよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8193m/>

彼方無双～どきっ現代技術ばかりの三国志～

2011年4月6日01時58分発行